

第42回東北大学高等教育フォーラム報告書

コロナ禍は大学入試をどう変えたのか



令和 7 (2025) 年 12 月
東北大学アドミッション機構

第42回東北大学高等教育フォーラム

コロナ禍は大学入試をどう変えたのか

◇日 時： 令和7年9月22日（月） 10:00～12:30

◇会 場： 東北大学青葉山新キャンパス青葉山コモンズ（農学部）2階大講義室（翠生ホール）
〒980-8572 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 468-1

◇主 催： 東北大学アドミッション機構

プログラム

司 会 東北大学アドミッション機構特任教授 三戸 望

開会の辞 東北大学アドミッション機構入学者選抜設計・評価部門部門長 宮本 友弘

来賓挨拶 文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長 片柳 成彬 氏

話題提供1 コロナ禍の教訓 ——「日本型」大学入試の本質とその変容——
東北大学アドミッション機構教授 倉元 直樹

話題提供2 コロナ禍における日本の大学入試の強靭さと脆弱さ
——オンライン面接とCBTの分水嶺は？——
大学入試センター研究開発部准教授 寺尾 尚大 氏

話題提供3 COVID-19による教育環境の変化と大学選択行動——日中の高校生比較から——
東北大学アドミッション機構助教 林 如玉

話題提供4 地方公立高校の現場から見たコロナ禍の影響
——生徒と保護者が受けた心理的制限——
新潟県立新潟高等学校教諭 山崎 健太 氏

討 議 —パネルディスカッション—
司 会 お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系教授 安成 英樹 氏
東北大学アドミッション機構特任教授 秦野 進一

指定討論 上智大学特任教授 /
オックスフォード大学名誉教授・東京大学名誉教授 莢谷 剛彦 氏

開会の辞 東北大学アドミッション機構長 滝澤 博胤

第42回東北大学高等教育フォーラム

コロナ禍は大学入試をどう変えたのか

目 次

第42回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会の辞	3
来賓挨拶	5
第1部 話題提供	
話題提供者紹介	7
話題提供1：コロナ禍の教訓——「日本型」大学入試の本質とその変容—— 東北大学アドミッション機構教授 倉元直樹	11
資料	18
話題提供2：コロナ禍における日本の大学入試の強靭さと脆弱さ ——オンライン面接とCBTの分水嶺は?—— 大学入試センター研究開発部准教授 寺尾尚大氏	23
資料	29
話題提供3：COVID-19による教育環境の変化と大学選択行動 ——日中の高校生比較から—— 東北大学アドミッション機構助教 林如玉	35
資料	41
話題提供4：地方公立高校の現場から見たコロナ禍の影響 ——生徒と保護者が受けた心理的制限—— 新潟県立新潟高等学校教諭 山崎健太氏	47
資料	52
第2部 討議——パネルディスカッション——	55
指定討論 上智大学特任教授 / オックスフォード大学名誉教授・東京大学名誉教授 莢谷剛彦氏	
閉会の辞	63

講評

講評 1：コロナ禍が教育現場に残したもの

——第 42 回東北大学高等教育フォーラムに参加して——

青森県立八戸高等学校

福島 隆雄 教諭

65

講評 2：コロナ禍は大学入試をどう変えたのか 講評

岩手県立盛岡第一高等学校

北川 貴彦 教諭

69

講評 3：第 42 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

宮城県白石高等学校

佐々木 貴之 教諭

73

講評 4：第 42 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

秋田県立秋田南高等学校

大友 和也 教諭

77

講評 5：第 42 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

山形県立酒田東高等学校

菅原 祐子 教諭

81

講評 6：第 42 回東北大学高等教育フォーラム

「コロナ禍は大学入試をどう変えたのか」講評

福島県立安積高等学校

菅野 博 教諭

85

アンケート・参加者統計

アンケート集計結果

89

アンケート自由記述

90

参加者統計

97

第 42 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



2019（令和元）年末から世界的に流行が始まり、わが国でも 2020（令和 2）年 2 月後半から人々の日常生活の隅々まで大きな制約を強いことになった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によるパンデミックの世界は、2023（令和 5）年 5 月 8 日の 5 類感染症への移行により一応の収束を見た。歴史的事象には実験的比較検証が叶わないので厳密な評価は難しいが、コロナ禍によって大きな影響を受けて不可逆的な転換が生じた社会的活動は枚挙に暇がないだろう。

いわゆる「三密」の典型である入学者選抜の実施もコロナ禍に大きな制約を受けた社会的活動の一つである。突然のパンデミックの渦中では、前例のない試行錯誤を繰り返しながら感染防止のためにありとあらゆる対策が打たれた。昨年度からは大学入試における COVID-19 対策に特化した特例がほとんどなくなり、「コロナ禍」が及ぼした直接的、間接的な影響について冷静に検証すべき時期が来た。制度や選抜方法から大学入試の当事者である実施者や受験者の意識から大学入試に関する言説、さらには、国際的な動向に至るまで、良きにつけ悪しきにつけ検討すべき論点は豊富である。

本フォーラムでは 4 名の話題提供者を予定している。大学入学者選抜における技術的な問題、諸外国と比較した日本の特徴、高校教

育の変化など、幅広い切り口からわが国の大学入試における「コロナレガシー」に関する分析を試みる。倉元直樹（東北大学教授、大学入試学会理事長）が総論的な問題設定を行い、それを受けた寺尾尚大氏（大学入試センター准教授）が主として実施者、林如玉（東北大学助教）が主として国際比較、山崎健太氏（新潟県立新潟高等学校教諭）が主として受験する側の観点からの話題提供を行う。話題提供を受けた苅谷剛彦氏（上智大学特任教授／オックスフォード大学名誉教授・東京大学名誉教授）のコメントを基にパネルディスカッションを行う予定である。

(編集担当: 東北大学 アドミッション機構
教授 宮本友弘・准教授 林如玉)

開　　会　　の　　辭

東北大学アドミッション機構 入学者選抜設計・評価部門長
宮本 友弘

三戸望特任教授（総合司会）

皆様、こんにちは。本日はご来場オンラインのそれそれで全国から多数の皆様にご参加をいただき誠にありがとうございます。予定の時刻となりましたので第42回東北大学高等教育フォーラム「コロナ禍は大学入試をどう変えたのか」を始めさせていただきます。ご案内の通り、本フォーラムは東北大学と大学入試学会の共催であり、当学会の第2回大会公開シンポジウムとして実施するものであります。

本日は、東北大学の三戸が総合司会を担当させていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

開会にあたりまして、主催者を代表し、宮本友弘東北大学アドミッション機構入学者選抜設計・評価部門長よりご挨拶を申し上げます。

宮本友弘部門長：

はい。皆様こんにちは。ご紹介いただきました。東北大学アドミッション機構の宮本友弘でございます。この度は、第42回東北大学高等教育フォーラムにご参加いただきありがとうございます。一言ご挨拶を申し上げます。

本フォーラムは通算42回目を迎えます。今回、この4月に本学入試センターから改組された東北大学アドミッション機構が主催となります。また、昨年に引き続き大学入試学会に協賛いただき第2回大会の公開シンポジウムを兼ねて開催いたします。ご参加くださいました皆様に改めてお礼を申し上げます。

さらに、本日ご臨席を賜りました文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長の片柳成彬様に心よりお礼を申し上げます。また、ご登

壇の先生方に対し、この場を借りて感謝申し上げます。



本日のテーマは「コロナ禍は大学入試をどう変えたのか」です。感染症流行は入試のあり方に大きな影響を与えました。制度や方法の変化にとどまらず、受験生や指導者の意識、さらには国際的な動向も含め冷静な検証が求められています。本日は本機構の倉元直樹教授、大学入試センターの寺尾尚大准教授、本機構の林如玉助教、新潟県立新潟高等学校の山崎健太教諭により、それぞれの立場から話題提供をしていただきます。そして、上智大学特任教授であり、オックスフォード大学及び東京大学の名誉教授であられます苅谷剛彦先生を指定討論者としてお迎えし、議論を深めてまいります。

本日のシンポジウムが、皆様にとって大学入試の将来を考える有意義な機会になることを期待し、開会の挨拶といたします。

本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

来賓挨拶

文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長
片柳 成彬 氏

三戸望特任教授（司会）

続きまして、来賓としてご出席いただいております文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長片柳成彬室長からご挨拶を頂戴いたします。では、片柳室長、よろしくお願ひいたします。

片柳成彬室長

ただいまご紹介にあずかりました文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室室長の片柳と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

第42回東北大学高等教育フォーラム及び大学入試学会第2回年次大会の公開シンポジウムが開催されることにつきまして、まずもってお喜びを申し上げます。昨年に引き続き、お誘いご挨拶をさせていただけて大変ありがとうございます。本フォーラムでございますけれども、まさに一昨年12月に設立された大学入試学会との共催ということでございまして、公開シンポジウムというような形で続けられていると伺っております。東北大学の皆様はもちろんでございますけれども、大学入試学会の倉元理事長、本フォーラムこれらの開催にご尽力をいただきました皆様に深く敬意を表するとともに、本日ご参加いただきました皆様におかれましては、日頃より大学入試のことについてはもちろんでございますけれども、高校の先生でいえば高校教育、大学の先生でいえば大学教育、それらの実施及びその工夫等に、多大なご尽力をいただきまして、この場を持って深く御礼申し上げます。



本フォーラムにおきましては、「コロナ禍は大学入試をどう変えたか」というテーマで実施されると伺っております。

新型コロナウイルスの感染症の拡大ということで、今ほどご案内もありましたけれども、かなりいろいろなことが変わったと思っております。教育現場全体に大きな影響を及ぼしまして、それは当然、大学入試においても、試験実施の方法や選抜のあり方についても考えさせられる機会となり、また新たな取り組みが行われる契機ともなったと思っております。コロナ禍という特殊事情を踏まえつつですね、公平性、公正性また安全性、これらを両立並立するような形で、入学者選抜に向き合って実践をいただいた経験というところにつきましては、コロナ禍への対応ということだけにとどまらず、今後起こりうる未知への状況への対応として、危機管理の観点からも得られたものが多いのではないかと思っております。本フォーラムでも、こうした視点が関係者の間でも深められるチャンスになるのではないかと期待している

ところでございます。

コロナ禍のこの背景だけではございませんけれども、文科省もコロナもきっかけとして、CBT の関係、これを進めて検討していかなければいけないのではないかというようなことで、委託事業等も進めさせていただいております。こちらは電気通信大学に受託をいただきまして、3年間にわたって実践をいただいてきたところでございます。

技術の進展が目まぐるしい中で、様々な方向からアプローチを考えること自体は進めさせていただいているところでございまして、一歩は踏み出せたかなというところではございますけれども、CBT に関して申し上げますと、まだまだ道のりは長くて、今後も丁寧な検討を重ね合意形成をしていくことは必要かと思っております。

CBT のことを一つ例示にも挙げましたけれども、こうした形で、一歩ずつ、より良い選抜に向けて進めていくというようなことは非常に大事だと思っております。まさに、本日の場はですね、そうしたことへの一助となることと思っております。

本日のシンポジウムが実り多いものとなることを改めてお祈りをいたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。お時間を頂戴いたしました。ありがとうございました。

(拍手)

三戸望特任教授（司会）

ありがとうございました。

第1部 基調講演

話題提供者紹介

倉元 直樹（くらもと なおき）

1961年北海道生まれ

[職歴]

大学入試センター研究開発部 助手	(1990年12月～1999年3月)
東北大学アドミッションセンター 助教授	(1999年4月～2004年3月)
東北大学高等教育開発推進センター 准教授	(2004年4月～2014年3月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	(2014年4月～2015年9月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授	(2015年10月～2025年3月)
東北大学アドミッション機構 教授	(2025年4月～現在に至る)

[主な研究歴]

専門は教育心理学、テスト学、大学入試学

[主な著書、研究業績]

- 東北大学高度教養教育・学生支援機構編（2019）. 大学入試における「主体性」の評価——その理念と現実——, 東北大学出版会.
- 倉元直樹監修, 倉元直樹編（2020）. 「大学入試学」の誕生, 東北大学大学入試研究シリーズ 第1巻, 金子書房.
- 倉元直樹監修, 倉元直樹・宮本友弘編（2022）. コロナ禍に挑む大学入試（1）——緊急対応編——, 東北大学大学入試研究シリーズ第6巻, 金子書房.
- 倉元直樹監修, 倉元直樹・久保沙織編（2023）. コロナ禍に挑む大学入試（2）——世界と日本編——, 東北大学大学入試研究シリーズ第7巻, 金子書房.
- 倉元直樹監修, 倉元直樹・林如玉編（2024）. アドミッションセンターの現在と将来, 東北大学大学入試研究シリーズ第9巻, 金子書房.

[学会活動等]

大学入試学会理事長, 日本テスト学会理事, 日本教育心理学会会員等

[その他の特記事項]

- 日本テスト学会賞（第16回）（2023年）
日本行動計量学会 林知己夫賞（優秀賞）受賞（第27号）（2007年）
日本教育心理学会 城戸奨励賞受賞（第37号）（1995年）

寺尾 尚大（てらお たかひろ）氏

1990年愛知県生まれ、千葉県育ち

〔職歴〕

大学入試センター研究開発部 試験技術研究部門 准教授（～現在）

大学入試センター研究開発部 試験技術研究部門 助教（5年間）

日本学術振興会特別研究員（DC1、教育心理学）（2年間）

〔主な研究歴〕

専門は教育測定学（多肢選択式項目における誤答選択枝の作成と分析方法の研究）

Computer Based Testing (CBT) の実施方法に関する研究

〔主な著書、研究業績〕

- 1) 寺尾尚大・石井秀宗・清水友貴・西郡大・木村智志・播磨良輔（2025）。モバイル端末管理の機能を活用した環境配布型 CBT の試験室での運用実験—Windows 端末と Chromebook を用いて—。大学入試研究ジャーナル, 35, 217–224。
https://doi.org/10.57513/dncjournal.35.0_217
- 2) 寺尾尚大・内田照久・石井秀宗・林篤裕・中村裕行・立脇洋介・西郡大・宮本友弘・久保沙織・倉元直樹（2024）。大学入試における近年の危機対応事例の総括—感染症・自然災害・刺傷事件・不正行為と未知の危機に備える—。日本テスト学会誌, 20, 43–71。
https://doi.org/10.24690/jart.20.1_43
- 3) Terao, T. (2024). Computer-based listening tests with full video, visual-limited video, and audio: A comparative analysis based on difficulty, discrimination power, and response time. *Applied Measurement in Education*, 37(1), 29–42. <https://doi.org/10.1080/08957347.2024.2311923>

〔学会活動等〕

日本大学入試学会編集委員会（1年間）

日本テスト学会表彰選考委員会（2年間）

日本教育心理学会編集委員会（2年間）

〔その他の特記事項〕

大学入学者選抜における CBT の活用の推進に向けた連携協力 世話人

林 如玉（りん よぎょく）

1995年 中国生まれ

〔職歴〕

東北大学高度教養教育・学生支援機構 助教	(2023年4月～2025年3月)
東北大学アドミッション機構 助教	(2025年4月～2025年9月)
東北大学アドミッション機構 准教授	(2025年10月～)

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（高校生の大学選択プロセスに関する研究）

〔主な著書、研究業績〕

- 倉元直樹・林如玉編 (2024). アドミッションセンターの現在と将来, 東北大学大学入試研究シリーズ第9巻, 金子書房.
- 林如玉・倉元直樹 (2021). 大学進学における相談相手の選択に関する日中比較研究, 日本テスト学会誌特集 Vol.17, pp.115-120
- 林如玉・倉元直樹 (2022) . 大学進学における進路選択プロセスに関する日中比較研究—情報収集活動を中心として, 日本テスト学会Vol.18,pp.39-55
- 林如玉・倉元直樹 (2024). COVID-19が日中両国の高校生の学習活動と大学選択に与えた影響, 大学入試学会誌第1号, pp.137-146
- 林如玉・宮本友弘・久保沙織・倉元直樹・長濱裕幸 (2023). 入試広報戦略立案のための東北大学合格者に関する分析—相談相手と志望順位の地域別比較—, 教育情報学第 22 号, pp.55-63.
- 林如玉・倉元直樹 (2024). COVID-19禍における高校生の大学選択行動—情報収集活動変容の詳細—, 大学入試研究ジャーナル第 34 号, pp.139-146
- 林如玉・宮本友弘・倉元直樹・長濱裕幸 (2025). オープンキャンパスの参加形態が志望決定に及ぼす影響—東北大学を例として—, 大学入試研究ジャーナル第 35 号, pp.31-38

山崎 健太（やまさき けんた）氏

1977年埼玉県生まれ

[教員歴]

新潟県立長岡向陵高等学校教諭（4年間）
新潟県立国際情報高等学校教諭（8年間）
新潟県立長岡高等学校教諭（8年間）
新潟県立柏崎常盤高等学校教諭（1年間）
新潟県立新潟高等学校教諭（現職）（1年目）

[主な教育活動]

進路指導主事、学年主任

[その他の特記事項]

新潟県 Bridge for the Next 事務局
数研出版 理数探究基礎 編集委員

話題提供1：コロナ禍の教訓

——「日本型」大学入試の本質とその変容——

東北大学アドミッション機構

倉元 直樹 教授

三戸望特任教授（司会）

[告知]

ここでお知らせとお願いがございます。

まず、本日の進行についてのお知らせです。参加の皆様は、事前にメールにてご案内させていただいた参加者用ページに配布資料がございます。スクリーンに表示されているQRコードからもアクセスできます。

まずは配布資料にあるプログラムをご覧ください。本日は第1部として東北大学の倉元直樹先生から「コロナ禍の教訓——『日本型』大学入試の本質とその変容——」、大学入試センターの寺尾尚大先生から「コロナ禍における日本の大学入試の強靭さと脆弱さ——オンライン面接とCBTの分水嶺は?——」、東北大学の林如玉先生からは、「COVID-19による教育環境の変化と大学選択行動——日中の高校生比較から——」、新潟県立新潟高等学校の山崎健太先生より、「地方公立高校の現場から見たコロナ禍の影響——生徒と保護者が受けた心理的制限——」という話題提供をして頂きます。その後、第2部として4名の先生方に再びご登壇いただき、話題提供を踏まえての討論を行います。指定討論者は、上智大学特任教授でオックスフォード大学と東京大学の名誉教授でいらっしゃいます荔谷剛彦先生にお願いいたしました。第1部終了後に10分程度の休憩を挟み、本フォーラムの終了は12時30分を予定しております。なお、ご登壇いただきます先程先生方の詳しいプロフィールにつきましては、配布資料に含まれております

のでご覧いただければと思います。

次に、皆様へのお願いです。この度のフォーラムでは、討論のための質問票および事後アンケートをウェブ上でご入力いただくようご用意いたしました。



まず、討論のための質問票についてご説明させていただきます。ご参加の皆様には、事前にご案内申し上げました参加者用ページより討論質問票にアクセスいただけます。あわせて、現在投影しておりますスライドに表示されているQRコードからも同じページにアクセスしていただけます。第2部の討論に反映させていただきますので、ご入力は第1部終了後の11時30分までに行っていただくようお願いいたします。なお、話題提供に対するご質問やご意見は、11時30分までの間であれば、お一人につき何度でもご入力いただくことが可能です。2度目以降続けて入力する場合には、別の回答を送信と表示され

ることがあります、そちらを選択していただいても構いません。また、大変恐れ入りますが、討論のためのご質問ご意見の受付は、今回はウェブからのみとなりますので、ご理解のほどお願い申し上げます。

続いて、フォーラム終了後のアンケートへのご協力のお願いです。参加の皆様にはウェブ上でご回答してください。アンケートへのご回答はフォーラム終了後にお願いいたします。なお、今年も参加された皆様には、本フォーラムの内容等を記載した報告書を後ほどお送りすることになります。

皆様のご協力のもと、本日は有意義な会となりますよう努めさせていただきますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

それでは、早速、第1部の話題提供に移らせていただきます。日本型大学入試の本質とその変容と題して、東北大学教授倉元直樹先生よろしくお願ひいたします。

倉元直樹教授

おはようございます。トップバッターで登場いたしました倉元でございます。昨日からご参加の皆様方には見飽きた顔かもしれません。申し訳ございません。もう少しお付き合いください。「コロナ禍の教訓——『日本型』大学入試の本質とその変容」とつけました。今回、4件の話題提供ということですが、実質的にこれから行われます三つの話題提供のプレビューを私が務める形になるかと思います。こういった構成でお話をさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

はじめに

最初に、まあ、自分たちが今やっていることで、意識化されていることと無意識なことがあるなと思います。例えば、息はしています。普段、無意識にしています。どこで意識化するかというと、できなくなつて初めて意識化するわけです。息が吸えないぞ、・・・

いろんな状況があるかと思うのですが、・・・まあ、例えば、大学入学者選抜、大学入試も同じことではないかと思います。毎年、何となく無意識にやっていることなので、コロナ禍を通して、初めて、「あ、こういうことなんだ」と気付く、そういう機会だったのではないかと思います。意外と、ここからですね、日本の大学入試のポイントが見えてきたという気がしています。そのことのお話をさせていただくという趣旨です。



関連事項

今まで私がやってきたことをご紹介させていただきます。私が科研費をいただいて回してきたプロジェクトがあります。実は、科研費を決定していただいた時は、「コロナ禍の下での云々・・・」というのは非常にホットな話題だったので。その時点で採択されて、実際に研究が始まるまでにはやっぱりタイムラグがあるわけですね。研究活動は令和3年度から始まっています。2021年4月です。コロナに関しては、ある程度我々もリテラシーが出来上がったところで始まっているので、「何だかな?」といった感じも少しあったのですが。ここでまとめさせていただいたようなことが話題の一つの中心になっています。科研費のウェブサイトを作っていて、このQRコードで行くことができます

すので、よろしかったらご覧ください。余談ですが、個人的にはこのイラストがすごく気に入っています。足場の悪いブロックをですね、マスクをかけた小人が何とか修復しようとして頑張っている。まあ、そんな状況。これを科研費のトップページにしています。

次は、大学入試センター・・・次に寺尾先生がお話されるのですが、・・・まさしく、2021年ですね、コロナのまだ真っ最中の時に、とにかく、前年度に関して何があったのかをまとめるシンポジウムを2件立て続けて実施されました。一つが世界の大学。・・・これは、実は、私の知り合いの各国の研究者に集まつていただいて、つまり、日本人の比較教育等の研究者の目から見て、その国でどういう対応をしたのか、確認するようなことをシンポジウムとしてまとめたということです。もう一つは、我々、大学入試の現場がテーマですね、大学入試センターに集まって、この時期は全部オンライン配信ですが、シンポジウムをやりました。それをまとめた本があります。ということで、これはちょっとこれまで宣伝です。

もう一つ、今日のテーマに関連するのは林如玉先生が、・・・あの当時は私の学生、指導学生だったのですが、・・・タイミングとして、ですね、ちょうど修士論文を仕上げた、で、さあ、後期課程博士に進んで研究して行こうという時に、コロナになってしまった。そこで、彼女の修士論文のテーマが「高校生の大学選択プロセスの研究」でした。これはなかなか面白いテーマなんんですけど、ちょうどそのタイミングだったので、その年度のうちに修論と同じ内容の質問紙を用いて日本と中国の状況を調べています。林先生のご研究は、まず、前提として、日中の高校生がどうやって大学を選ぶのか、ということの比較研究があって、その上で、それがコロナでどう変わったのか、という話になります。この調査結果がエビデンスとして存在している

のが、多分、将来的に財産になってくれるだろうなと思っています。

論点整理

さて、論点整理ですけれども、3点ですね。コロナ禍において特別措置がなされました。どんなことをやったのか、再確認します。それが、実は、国際的にみるとかなり違うんですね。ただ、カテゴリに分けられます。東アジア、ヨーロッパ、米国、となります。そこで出てくるのが、「ああ、こんなことを大事にしていたのだな」という話になります。そして、最後、現在に至るコロナの影響という話です。

コロナ禍初期の議論

まず、思い返してみましょう。コロナ禍のタイミングは、非常に特殊なタイミングだった。あの、2021年度入試というのは、もう完全にコロナの下での入試になったのですが、これは、実は、鳴り物入りで始まった東大接続改革の実施年度のはずだったのです。ところが、その直前に、大学入試英語成績提供システム導入の計画が、まさしく申し込み開始の日に記者会見が行われて延期になりました。さらに、その半月後には大学入学共通テストの記述式問題の導入が撤回になりました。これですね、歴史に「if」はないのですが、これらを実行していて、コロナ禍に突入していたら、もう、どうしようもない状況になっていたのではないでしょうか。逆に言うと、直前に方針転換の決断をしていただいて、本当によかったです。

もう忘れているかもしれません、コロナ始まった時は、まだ、前年度の入試が完全には終わってなかったのですね。国立大学の後期日程の時期に少し重なっていたので、一部の大学で入試を中止せざるを得なくなって、特別措置となりました。いくつかあったと思うのですが。あまり大きな影響ではなかった、

というのは、今は後期日程そのものが全体の入試の中であまり大きな位置を占めないとことがあります。

むしろ、やはり、本当にロックダウンが本格化した時期からが、「大学入試をどうするか」という話が本格化します。5月頃、・・・私もこの議論に乗ってしまった苦い記憶があるのですが・・・4月入学を秋入学に移行しようじゃないか。つまり、1年後ではなくて、1年半後に入試をすれば、コロナが収まっているのではないか、ということを前提にした議論がありました。もちろん、入試だけではなくて教育全体に及ぶ話でしたが。今、考えると我々、皆が「感染症」というものを全く理解していなかったことがよく分かる議論です。この議論は、実は、コロナ対策を進めていく中で、文部科学省による検討に大きな悪影響があった。多分、それで具体的な対策が遅れてしまったというのは、すごく大きかったのではないかなと思います。ちょうど、「大学入試のあり方に関する検討会議」が開催されていた頃で、私もヒアリングでお呼びいただいたりしたのですが、その時期でしたね、5月だったでしょうか、まさしく、こういう議論がされていた当時の担当者は、非常に苦労されていたと思います。

その頃は、実は、感染症の蔓延という意味ではそれほどひどくはなかったのです。一度収まって小康状態の時期もありました。そこで、9月ですね、ちょうど、この時期に東北大学でこの「高等教育フォーラム」が開催されました。これは二つの意味での挑戦だったのでです。一つは、まず、毎年、対面で5月に実施してきたのですが、5月にはとてもできなかつたので、9月に延期して、ハイブリッド方式ですね・・・今回もそうなんすけれども・・・来場する方と、それからオンライン、これを初めてやってみたということが一つ目の挑戦です。

コロナ禍の下での選抜へ

もう一つが、いわゆる総合型選抜・・・東北大学ではAO入試と呼んでいますが、・・・その実施時期が迫ってきている中で、高校は一体どういうことを重視しているのか、コロナ対策の検討のための調査をすでに実施していました。それを発表したのが二つ目の挑戦でした。この時期、・・・林先生、それから山崎先生のお話とも、多分、関係しているのでしょうか、・・・いわゆる、「対面型」と呼んでいる入試広報が全面中止になっていたんですね。東北大学では「オープンキャンパス」という7月末に実施する2日間のイベントを非常に重視しているのですが、実施できなかった。そこで、急遽ですね、ショート動画のようなものを撮ったり、講演を記録したり、オンラインの広報に移行して行きました。これがどうだったのかということを、今、検証する機会かなと思います。

総合型選抜等における感染症対策。これも専門家の助力を得ながら実施しましたが、非常にありがたかったのは、やはり、文部科学省から基本的なガイドラインが出されたことです。大学側としては、それに従って入試を実施していくということになりました。東北大学のような総合型の大規模大学には感染症の専門家は大勢いらっしゃるので良いのですが、そうではない大学では、ちょっと手掛かりがない。そこで、このガイドラインを手掛かりにして、何とか入試を実施できたのではないかと思います。

次は、一般選抜における感染症対策ですが、これは後ほど国際比較のところでも話そうと思います。日本では、まず受験機会の確保を非常に大切に考えて対応したと思います。大学入学共通テストの日程、第1日程、第2日程という制度。通常、追試験として実施しているものを第2日程と位置付けて、1週間後ろにずらすという形で対応しました。個別大学としては非常にきつかったのですが、個

別学力検査の追試験を実施するというようなこともありました。

コロナ禍の2年目の時には、私自身は少しショックだったのですが、オミクロン株の影響がありました。年末に官邸から直接、「こうしなさい」という指示が来てしまうということがありました。まあ、話し出すと長くなってしまうので飛ばしますが、これはどうかな、と思っています。要は、現場に任せてくれないのかな、ということです。ここでもそうなってくる、というのはちょっとショックだな、と思ったところです。

その後の共通テストでは、もう大事件が満載だったのですね。この辺の話は、寺尾先生にお譲りしますので、もし、話題に出していただけたらな、というところです。はい。

特別措置の国際比較

そういうことを実施しながら、世界の状況に関わる情報を集めました。基本的には、以下のように整理しています。まず、「東アジア型」ですね。これは、選抜日程を調整しました、「ヨーロッパ型」は選抜基準の変更。

「米国型」経済原理最優先という形で、私がまとめました。それぞれ、こういう対応をしたのだなと思います。

初期対応については、コロナがいつ流行したのかということが結構大きな要素でした。実は、日本は相當に恵まれていたと思います。あの、もちろん、大学入試は通年化しているところがあるのですが。まあ、共通テストがクライマックスだとすると、かなり検討時間はあったということになります。世界的に見ると、大学入学者選抜に関しては比較的恵まれた状況に置かれたのかな、と思っております。秋入学の制度を取っている国では、春頃が、選抜、あるいは、募集の時期ですから、コロナ禍がそれを直撃したことになります。

同じ東アジア型の国の中でも、中国が早いんですね。6月です。それで、韓国は秋の試

験11月。これらをどうしたかという話です。東アジアの3か国は、もうとにかく時期の調整をしました。中国の「高考（ガオカオ）」は1ヶ月遅れ。韓国では2週間遅れでした、まあ、色々あるのでしょうか、日本は先ほど申し上げたような形で、とにかく時期も基本的にはあんまり変えないけれども、ちょっと特別措置を加えて、これも時期の調整に入っていると思います。以上、今、札幌医科大学でお務めの木村心南（南紅玉）先生、彼女は元々中国語と韓国語がネイティブで、日本に留学して3ヵ国語ができるということなので、ざっと調べてまとめていただいた。その資料を基にしています。

ヨーロッパ各国ですが、まあ、苅谷先生、すみません、間違っていたら教えてください。英国はAレベル試験が中止となり、大学入学者選抜は高校の成績で評価する措置を取りました。これは一体どうなんだろうと思った次第です。要は、日本のような定員管理という発想がないのですね。基準による選抜（日本でいう資格試験）なので、基準に達した人は「合格」となります。当然、高校の先生は自分の生徒を合格させたいですから、評価は甘くなるわけです。その結果、ものすごくゆるい入試になったのですね、その年は。そこから後が、ある意味、面白くて、・・・フォーラムの直前にイギリスの状況について調査してきたのですが・・・次の年、その分、合格者数を絞ったということと、そのまま恒常定員にしちゃったところがありました。コロナ禍その年に関して言えば、まだオンラインパスの授業をやれない状況だったので、オンラインだとそれほど問題なかったのでしょうか。多分、徐々に問題が出てくる状況だと思います。

フランスですが、これはバカラレア中心の制度と理解されていますが、高校の成績評価による合否判定が成されました。やっぱりヨーロッパ型です。以後、バカラレアの成績が

大学入学者選抜から外れていきます。完全に高校の卒業成績が大学入学資格になりました。これは、元々そういう政策の流れがあつてということになるのですが。そして、その年は合格者を多く輩出した結果、その年には不満が出ないようにしたということでしょう。

フィンランドがヨーロッパでは実は少し日本に実は近い入試になっていて、大学の個別試験があるようなのですが、これが中止になつたり、配点変更だつたりということで、受験生からの反発があったようです。推測ですが、日本と似たような定員管理をしているのかもしれません。

アメリカです。これはびっくりしました。まず、予算ありきなんですね。コロナ禍の被害が甚大で、州の予算が削られる、と。そこでさらに、高等教育予算は授業料増で補填可能だということで、大幅削減の対象になる。そうすると雇用部門も大幅削減になり、当然、アドミッションオフィサーも解雇されますから、まあ、通常よりもさらに少ない人員で何をやつたんでしょうか。お金もなくて、みたいな状況だったようです。流れとしては、テストオプション・・・ACTやSATのような共通試験は受けても受けなくてもいい・・・の制度がさらに広まったようです。これが加速した。一方、志願者は増加した、というようなことが報告されておりました。

コロナ禍の影響の評価

コロナ禍対策を経た日本の大学入試ということですが。実は、やはり、選抜方法にたいする受験者側の受け止め方については、勉強になったなと思います。いくつか、早い段階で「個別学力検査は中止」と発表した大学ありました。結果的に、大幅に志願者減につながって、2次募集になったというような話です。だから、やはり、受験生が準備してきたことを直前に変えるというのは、日本でな

かなかできないのではないかと思います。

オンラインで何が代替できるか、というような話が次の話題ですね。選抜方法ですが、とにかく、試験実施側としては、万難を排して予定通り予告通りの選抜をどうやって実施するかという点で苦心をしたということになるでしょうか。次の年度などは、アクシデントの同時発生があったわけですが。実施側に関しては、そういう状況をかなり耐えて、準備ができたかのかな、というところがあります。ただ、限界もあります。

実は、官邸からの指示で一番きつかったのは、「最後の一人まで」というキーワードでした。もちろん、できる限りのところまで、受験者に配慮をします。でも、「最後の一人まで、例外なく」と言わわれると、方法論的にも不可能ですし、ものすごく負荷がかかります。実は、最初の年の共通テストで第2日程の後に追試験があったのですが、たしか受験者が1人だったはずです。その1人のための追試験に、大学入試センターは大変な準備をしましたね。まあ、そういうようなこともありますので、ちょっとそこは、一緒に考えていただきたいところです。

コロナ前後での選抜方法の違いは、ある程度見えてきたところとそうでもないところがあります。むしろ、どこに影響が出たかというと、キャリア選択のプロセスですね。やはり、オープンキャンパス等の大学の実体験、これは、臨教審から始まる入試改革に伴って、一番変わってきたところだと思うのですが、それがなくなつたってことによってどういう影響を与えたか。これは林先生のお話ですね。そこから、高校の先生方が子どもたちの進路選択でどういう役割を果たしているのかということも、はつきりわかったところだと思います。

特に、メンタルな部分では、結構その後も響くような影響が出てきているのではないかと思うのです。実は、あまり詳しく言えな

いのですが、個別学力検査に追試験があることで、普段だと問題にならないような通常のプロセスからのちょっととした乱れが、かなり受験生に影響を与えました。「追試験あるだろう、受けさせてくれるだろうな」みたいな話ですね。だから、そこは非常に大きかったのかな・・・。逆に、「1回きり」というのもいいところがあるのかなとも思います。とにかく、当事者がどう考えるかが大事なんです。官邸が、まあ非常に親切心を持って言ってくれたことが、現場で大混乱を引き起こすというようなことが、やはりあるのだろうな、ということはご理解いただければな、と思います。

まとめ

意識、無意識の話です。コロナ禍を通じて分かったことですね。「日本の常識」というのは「世界の常識」ではないし、あえて、「欧米先進国の常識」も最善ではない、ということが確認できたのではないかと思います。

可能であれば、大学はこういう事態は避けたいのですが、まあ、経験してしまった以上は、貴重な経験として、こうやって記録に残して引き継いでいきたいと思います。

そして、何が変わって何が変わらなかつたのかというのは、残りの3名のお話を聞くことで明らかになると思います。

すみません、ちょっと時間が過ぎてしましました。ご清聴いただきありがとうございました。

三戸望特任教授（司会）

倉元先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上の入力をお願いいたします。

第42回東北大大学高等教育フォーラム
大学入試学会第2回大会公開シンポジウム

コロナ禍の教訓 —「日本型」大学入試の本質とその変容—

話題提供者 倉元直樹（東北大大学）

JARUAS
The Japan Association for Research on University Admissions

1

話題提供の構成

- はじめに
- 関連事項
- 論点整理
- コロナ禍の下での選抜
- 特別措置の国際比較
- コロナ禍の影響の評価
- まとめ

9/22/2025

フォーラム / 公開シンポジウム

JARUAS
The Japan Association for Research on University Admissions

2

JARUAS

はじめに

- 意識 / 無意識
- 呼吸
- 普段は無意識
- 呼吸困難に陥って初めて意識化
- 大学入学者選抜における諸要素
- 通常の年度は無意識
- コロナ禍を通して初めて意識化
- コロナ禍から日本の大学入試の何が見える？

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム The Japan Association for Research on University Admissions

3

JARUAS

関連事項 (1)

- 科研費研究プロジェクト
令和3~7年度 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）
基盤研究（A）（一般）課題番号21H04409

**「コロナ禍の下での大学入試政策
及び個別大学の入試設計のため
の総合的大学入試研究」**

<https://www.adrec2.ihe.tohoku.ac.jp/>

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム The Japan Association for Research on University Admissions

4

JARUAS

関連事項 (2)

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム The Japan Association for Research on University Admissions

5

JARUAS

関連事項 (3)

コロナ禍に挑む大学入試 (1)
緊急対応編
倉元直樹・宮本友弘 ■

記憶を記録する。記憶が教訓に変わる。
コロナ禍の大学入試の本質をより深く見ようとしたときの教訓が流れた。
物語の状況で、私たちは何を、誰と、何を守りうとしたのか。

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム The Japan Association for Research on University Admissions

コロナ禍に挑む大学入試 (2)
世界と日本編
倉元直樹・久保沙織 ■

正解のない世界、前例のない決断。
コロナ禍での大学入試では、正解を見出せない中での判断が求められた。それは、物語の状況で、私たちが何を、誰と、何を守りうとしたのか。
物語の状況で、私たちが何を、誰と、何を守りうとしたのか。

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム The Japan Association for Research on University Admissions

6

JARUAS

関連事項 (4)

- 林如玉先生の研究（博士学位論文）
 - H30年度東北大学大学院教育学研究科入学
 - 修士論文のテーマ
高校生の大学選択プロセスの日中比較
- 2020(令和2)年4月後期課程進学
 - 突然のコロナ禍
- 修論と（ほぼ）**同一内容の質問紙調査**を企画
 - コロナ禍の影響（日中比較）の**エビデンス**

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

7

JARUAS

論点整理

- コロナ禍における選抜に対する特別措置**
 - 前提：令和3年度入試という特殊な状況
 - コロナ禍の下での特別措置
- 特別措置の国際比較**
 - 東アジアの状況と特別措置
 - ヨーロッパの状況と特別措置
 - 米国の状況と特別措置
- 現在に至るコロナ禍の影響とは？**

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

8

JARUAS

コロナ禍の下での選抜 (1)

- 2021(令和3)年度入試の特殊性
- 高大接続改革**の実施年度…のはずだった
- コロナ禍直前の出来事
 - 大学入試英語成績提供システム**の導入延期（2019 [令和3] 年11月1日）
 - 大学入学共通テストへの**記述式問題**の導入撤回（2019 [令和3] 年12月17日）
- 歴史に「if」はないけれど…

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

9

JARUAS

コロナ禍の下での選抜 (2)

- 令和2(2020)年度入試への影響**
 - 一部の大学で後期日程の中止、特別措置
 - ロックダウン状況の中での大議論
 - 4月入学から**秋入学への移行**の検討
 - 感染症の本質を理解していなかった
 - 結果的に**コロナ対策の遅れ**に…
 - 二重の挑戦：東北大学高等教育フォーラム(9月)
 - コロナ禍の下でのハイブリッド方式のシンポジウム
 - 緊急高校調査に基づくコロナ対策の検討

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

10

JARUAS

コロナ禍の下での選抜 (3)

- コロナ禍の影響と対策
 - 対面型入試広報活動の中止** → オンライン化
 - 総合型選抜等における感染症対策
 - 面接試験の感染予防、オンライン化等も
 - 一般選抜における感染症対策
 - **受験機会の確保**
 - 大学入学共通テストの第1日程、第2日程
 - 個別学力検査の追試験実施
 - 2年目に官邸の直接介入、大事件満載の共通テスト

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

11

JARUAS

コロナ禍の下での選抜 (4)

- 日本におけるコロナ禍対策の共通項
 - 例年実施してきた**選抜方法を変えない**
 - 救済措置** → 受験生の実力が発揮できる環境
 - 追加でかかる人員や費用の問題はほぼ度外視
- 根底にある無意識の価値観 / 哲学
 - 受験生保護の大原則**（倉元、2019）
 - 測定すべき特性：長年にわたる受験生の**努力**
 - 実施の心得：受験準備行動を等閑視しない
 - 告知した選抜方法の**変更は許容されない**

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

12

JARUAS

特別措置の国際比較 (1)

- コロナ禍に対する特別措置の類型化
 - 東アジア型**: 実施時期の調整
 - ヨーロッパ型**: 選抜基準の変更
 - 米国型**: 経済原理最優先
- 初期対応: コロナ禍の蔓延と選抜の時期
 - 何をもって選抜の時期とするかは困難?
 - 秋入学・春頃 ← コロナ禍が直撃
 - 中国の高考は6月、韓国の修能試験は11月
 - 日本の共通テストは1月 ← **対策期間の確保**

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

13

13

JARUAS

特別措置の国際比較 (2)

- 東アジア3か国の対策: 時期の調整**
 - 中国**の高考実施は7月7日、8日
→ 例年から1か月遅れ
 - 韓国**の修能試験実施は12月3日
→ 例年から2週間遅れ
 - 日本**の共通テストは追試験を2週間後に
← **第2日程**と位置づけ、さらに追試験を追加
加えて、個別学力検査に**追試験**を付加
(以上、南, 2023)

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

14

14

JARUAS

特別措置の国際比較 (3)

- ヨーロッパ各国の対策: 特別基準による選抜**
 - 英国: **Aレベル試験の中止**、高校成績で評価
→ 合格者、入学者の急増、次年度以降調整
次年度合格者減、あるいは、定員増…
 - フランス: **バカラレアの中止**、高校成績で評価
→ 以後、バカラレア成績が入学者選抜から外れる
 - 総じて**合格者を多く輩出**、当該年の不満解消
 - フィンランド: **大学個別試験の中止**、配点変更
→ 受験生からの反発、救済措置の要求

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

15

15

JARUAS

特別措置の国際比較 (4)

- 米国の対策: 経済原理最優先**
 - コロナ禍の被害甚大 → **州予算の削減**
 - 高等教育予算は授業料等で補填可能
← 大幅削減の対象に
 - 影響は雇用部門へ → **大幅な人員削減**
 - アドミッション・オフィサーの解雇
 - テスト (SAT, ACT等) が実施できない
→ **テスト・オプショナル** (テスト離れ) の加速
 - 志願者は増加

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

16

JARUAS

コロナ禍の影響の評価 (1)

- コロナ禍対策を経た日本の大学入試
- 選抜方法: **受験者側**の受け止め方
 - 個別学力検査中止の大学 → 志願者減
 - オンライン**で代替可能な方法の線引き
- 選抜方法: **試験実施側**の受け止め方
 - 万難を排して予定通りの選抜を実施
 - アクシデントの同時発生 → 耐性の強化?
 - ただし、**限界**がある ← 日常的に抱える困難
- コロナ禍前後で選抜方法に違いは?

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

17

17

JARUAS

コロナ禍の影響の評価 (2)

- コロナ禍を通じて見えた「日本型」大学入試
 - キャリア教育**、**キャリア選択のプロセス**
 - オープンキャンパス等**大学実体験**の重要性
 - キャリア選択における**高校教員**の影響、貢献
 - 大学入試における公平性とは何か?
 - 特別措置の悪影響:
受験生・保護者の**メンタル**、実施側の負担
適切な能力の判定 (大学入試の3原則) の担保
 - 大学入試の二重性: 外部の仏心と**当事者性**

9/22/2025 フォーラム / 公開シンポジウム
The Japan Association for Research on University Admissions

18

18

まとめ

- (ふたたび) 意識 / 無意識
- コロナ禍を通じて分かったこと
 日本の常識 = 世界の常識 ではない
 欧米先進国の常識 = **最善** でもない(?)
- コロナ禍などの非日常的緊急事態
 ← 可能であれば、避けたい事柄
 しかしながら、貴重な経験、共通の財産に
- 何が変わって、何が変わらなかつたのか?
 → 寺尾氏、林氏、山崎氏の話に乞うご期待!

9/22/2025

フォーラム / 公開シンポジウム

19

**ご清聴
ありがとうございました**

The Japan Association for Research on University Admissions

19

20

話題提供 2 :

コロナ禍における日本の大学入試の強靭さと脆弱さ ——オンライン面接と CBT の分水嶺は?——

大学入試センター研究開発部
寺尾 尚大 準教授

三戸望特任教授（司会）

それでは続きまして、「コロナ禍における日本の大学入試の強靭さと脆弱さ——オンライン面接と CBT の分水嶺は?——」と題して、大学入試センターの寺尾尚大先生、よろしくお願いいたします。

寺尾尚大准教授

大学入試センター研究開発部の寺尾と申します。よろしくお願いいたします。本日は、「コロナ禍における日本の大学入試の強靭さと脆弱さ——オンライン面接と CBT」いうところに焦点を当てて、「その分水嶺が何か?——」というところを考えていきたいと思います。

表紙ですけれども、先ほど倉元先生からプレイバック座談会という、日本の大学入試の現場をまとめたシンポジウムのご紹介をいただきました。実は「プレイバック座談会 Part2」がありまして、そのときと同じデザインを使わせていただきました。オリーブの花言葉は平和、知恵、勝利だそうです。旧約聖書の創世記では、大洪水の後、ノアが鳩を放つわけですね。一旦は何もくわえずに戻ってくるが、その洪水が収まった後はオリーブの実をくわえて戻ってきたという伝説があります。この発表も、このシンポジウムそのものも、洪水の後のオリーブの実のように、実のある知見というのが得られることを祈って、こんな表紙にしました。



さて、今日のお話ですけれども、改めて 2020 年から 2023 年くらいのコロナ禍についての復習をしたいと思います。今もコロナ禍は続いているという考え方もあります。この夏、ニンバスという変異株が流行して、皆さんを苦しめたかもしれません。ただ、社会的な混乱がなくなっただけであるという状況です。その後の発表では、コロナ禍で入学者選抜の中で試験実施者側の立場で何が困ったか、あるいはどういう考え方をとっていたかを振り返って私なりに考えてみたので、それについてもお話をしたいと思います。その中で、オンライン面接と CBT に焦点を置きたいと思います。オンライン面接は、実はそのコロナ禍の中で比較的速やかに導入がされていったのですが、CBT はあまり爆発的な普及っていうのはなかった。海外では実は爆発的に普及したのですね。では、どうして処方箋になったのか、ならなかつたのか。

これについても考えてみたいと思います。最後、コロナ禍から見る日本の大学入試の強さと脆さー弱いのではなくて、はかないという考え方をしているのですがーそういう点を考えてみたいということです。

それで、実はこの発表には元ネタがあります。私が筆頭で書いた論文ー私、論文にあだ名をつけるのが好きで「プレイバック論文」というふうに呼んでいるんですが、先ほどのプレイバック座談会 2 つ分+その考察を混ぜて論文化したものーをテスト学会から出しています。平時に読んでいただくものというよりは、再び感染症が起こった後に(倉元先生からも振りをいただきましたけれども)何か珍事件があった時に読んでいただくものというふうに考えています。YouTube でもアップロードしていますので、シンポジウム全体をご覧になりたい方は YouTube をご覧ください。

最初に、おさらいをしたいと思います。久しぶりにご覧になる方もいらっしゃるかと思うのですが、PCR 検査の陽性者数の分布です。2023 年の 5 月に 5 類に移行したということで、3 年分、2023 の 5 月までその陽性者数をプロットしたものです。

3 年全体で見ると、2020 年（令和 2 年）度ー令和 3 年度入試に対応した年度ーは、全く大した人数ではなかったということがわかると思います。令和 4 年度は割と落ち着いた対応ができた一方で、陽性者数はかなりその 3 年の中でも多いわけです。これはやっぱり 3 年全体で見るのではなくて、年度単位で見た方が望ましいというふうに考えまして、年度ごとに陽性者数を見ていきたいと思います。

2020 年度ですけれども、まず 4 月 7 日に緊急事態宣言が発令されるわけです。その後、5 月の末に解除されるわけですけれども、実は年内でも大したことのなかった人数だったということですね。

3 月にダイヤモンド・プリンセス号が横浜に着いて、そこからどうするんだという話になっ

て、その後、緊急事態宣言でロックダウン、県境をまたぐ移動の禁止ということになったわけです。少し落ち着いて、文科省から大学入学者選抜実施要項の公表が若干後ろ倒しになつたということもありました。その間、いろいろな議論をしていたから仕方がないところではあったのですが、遅れたと。その後、各大学の選抜要項を公表するという流れになっていくわけですけれども、ドミノ式に後ろ倒しになつたという状況でした。総合型・学校推薦型選抜の時期に、GOTO トラベルという施策が打たれ、県境をまたぐ移動というのを促進して経済を活発にしようという話がありました。共通テストの時期になりますと、再び緊急事態宣言が出てくるわけですね。

共通テストの日の日本全国の陽性者数を都道府県別に着色してみると、こんな感じになります。緊急事態宣言は、関東+近畿と福岡という感じでしょうか。1 月 30 日は第 2 日程の 1 日目にあたりますが、第 1 日程よりは色が薄れてきます。国立大学の個別学力検査の日はだんだん収まっていく感じになっています。共通テストに関しては、第 1 日程、第 2 日程、特例追試験という、史上まれに見る三回の試験をやるということになりました。先ほども倉元先生から言及いただいたのですが、特例追試験では、最終的に 1 名の受験者の方に受験していただきました。第 1 日程、第 2 日程、特例追試験の設定についても、卒業見込みの方（高校生）については、出願時点で第 1 日程を受けるのか、第 2 日程を受けるのか希望を出すという形になりました。カリキュラムが終わっていない可能性というのを含みこんで、第 2 日程として第 1 日程の 2 週間後に設定された試験を受ける権利というのを有することになりました。それが、従来でいう本試験の扱いという形になつたわけです。結構大変だったのは、第 1 日程の追試験の方も第 2 日程を受け、第 2 日程を本命で受ける方も第 2 日程で受けます。大学側からしてみると、二つの共通テストを同時に実施し

なきやいけないという状況になって、かなり大変なお願いをしたという認識でいます。

さらに、後の論点にもつながってくるのですが、各大学の個別学力検査でももちろん、追試験を設定してくれというご要望は考え得るわけですけれども、なかなかできない状況というのも事実です。

令和3年度はどうだったか、と言いますと、年度内で見ると、陽性者数の傾向は、4月にひと山、夏にひと山、その後、冬にガツンとくるという感じになっていて、5月ぐらいでしょうか、緊急事態宣言と、まん延防止等重点措置が定められました。共通テストの時期も着色してみると、昨年のものと色を合わせているのですが、若干赤黒いものが出てきます。広島、山口、沖縄の感染が目立ったところでした。

2週間過ぎますと、これが真っ黒になってくるわけですね。「まん防」がかなりたくさんの都道府県に発令されるという状況になります。個別試験、国立大学の個別学力検査の日もこんな感じになります。むしろ、1月から2月に向けてですね、かなり状況が深刻になっていた。3月には「まん防」が解除されるわけですけれども、まだちょっと赤が残るという感じです。

令和3年度の途中まではコロナ対策の2周目をやればいいという認識が共有されていたかと思います。基本的な感染対策として、三密を避ける、マスク、消毒などが皆さんとの間でかなり定着をしてきましたので、これを守れば別に試験をやっても大丈夫だというような認識になってきました。あるいは、選抜要項の中で「最新の情報を確認してください」という案内が定着してきたわけです。これも、コロナ禍以前では考えられないですよね。夏に固定的な選抜要項を出して、そこから変えることはないというのが定説だったわけですけれども、最新の情報は学内のウェブサイトを見てくださいという形がある程度定着をしました。

それで、コロナ対策の2周目と思っている中で、10月末からオミクロン株の足音が近づい

てくるわけです。11月以降、オミクロン株が徐々に水際対策のところに影響を及ぼしまして、外国の方の新規の日本への入国を停止するという措置になっていきます。となると、留学生の方で日本に居住していない方にとっては、新たに日本に来ることができないということで、対面で試験を受けてもらえない可能性が出てきたわけですね。そこで、先ほども倉元先生から「官邸の介入」というお話がありました通りですが、12月にオミクロン株の流行が認められる中で、共通テストにおける追試験の受験資格に関して、対応が二転三転します。例えば、濃厚接触者の方は、もちろん症状が出ていない方もいらっしゃいます。基本的には、ホテルでの宿泊を求められることになるわけですけれども、元来、その濃厚接触者の方については、本試験を別室受験できる、追試験に回らなくてもいいという対応でした。ただし、オミクロン株の流行のため追試験に回ってもらうというような対応になった後、いや、別室受験でよいという形で、国も時々に応じて対応方針が変わっていったという状況でした。

さらに、共通テストと個別学力検査の一方のみでも選抜可能にするようにという通知もありました。普段であれば、特に国立大学の場合は共通テストと個別学力検査で一般選抜のメニューにしているわけですが、どちらか一方で合否判定できるようにしましょう、というような通達があったということです。ちなみに、令和4年度の共通テストは、コロナ以外にもいろいろありました。例えば、東大の農正門前の刺傷事件から始まって、トンガの火山の噴火ですか、不正行為も含めていろいろありました。コロナ以外にも結構大きな事件があって、それぞれについて危機対応を考えなければならぬ事例ではあったということです。

さて、3年目の令和5年度入試の年ですけれども、陽性者数自体はかなり多いですが、3年目にしてようやく安定軌道に入ってきたました。もちろん、完全に平時には戻っていないという

状況でもあり、大学入学共通テストは、本試験と追試験の間を2週間あける、という対応が続きました。これは令和6年度試験まで続いて、先般の令和7年度試験では1週間あきに戻ったという次第です。

さて、おさらいをしたのですが、コロナ禍が突きつけた問い合わせるのは何だろうかと考えてみると、一つは、問題作成や試験実施運営体制が硬直化していないだろうかということです。例えば、共通テストに関しても、特例追試験を作るということはかなり苦渋の決断でした。各大学でも、個別学力検査で追試験をなかなかやれない。それは追試験の問題を作るエフォートが割けないからということですね。あるいは、試験監督者を大学の先生方に毎年お願いしているわけですけれども、試験監督者の先生方の中には高齢であったり、基礎疾患がある先生方もいらっしゃいます。この先生方にそもそも、濃厚接触者の別室受験の試験監督は絶対お願ひできないわけですよね。大きい部屋の試験監督も少しやっぱりご本人的には抵抗があるというようなお話を伺いました。こういった状況の中で試験監督をどういうふうに回していくらいいのか。これも突きつけられたわけですね。

それから、今回あまりこう真っ向切って取り上げないですが、国あるいは大学入試センターの方針のあり方っていうのは適切だったのかっていうのを今一度振り返らなきやいけないと思うんですね。確かに、状況を見ながら変更していくという要素も必要である。一方で、入試そのものは、周知したとおりに実施するという側面が強いものですから、これらの競合をどのようにアツフヘーベンしていくのか、昇華させていくのかも求められるわけです。国で一律に対応するということもメリット・デメリット、それから個別に判断するということも、メリット・デメリットがあるわけで、これもしっかりと考えなきやいけない時期に来ただろうと思います。これも含めて、私なりに考えて

みたのですが、「安定と革新のトレードオフ」があるのではないかと思っています。入試業務は基本安定が第一で、ミスなく終えるというのが望ましいということですね。

昨日も話題に上がっていましたけれども、入試の形式的な公平性・公正性は分かりやすいもので、本当に公平かどうかはクエスチョンかもしれないけれども、分かりやすいので、あらかじめ定められてお知らせされたものを受験生がそのメニュー通りにこなしていくということがまず信頼につながる、こういう業界だと思っています。一方で、新しい時代あるいは危機の時にどのように対応するのかに関しては、同じメニューを繰り返しているだけではなかなか対応ができないという状況で、革新が求められるということですね。もちろんこれまで、平時にも小さな革新というのはいくつかあると思うのですが、大きな革新をいきなりやろうとするとトラブルが続出します。後でCBTの話をしますけれども、不確実性が高くなっちゃう。ミスなく終えるということについて、不確実性の高いものは忌避するということになりますから、あまり入試業務には馴染んでこなかつたという経緯があります。

試験実施運営の体制の硬直化について、特に学力試験に関して感じるのは、安定の原理が強く働いているということですね。やはり受験者にお知らせしたとおりにいつも通りに受けてもらうということが大事であって、固定したものを繰り返しやっていくことが重要視されますので、革新へのアクセラルがかかりにくいものだと考えることができます。一方で、総合型選抜や学校推薦型選抜でやられているような面接や小論文、グループディスカッション等は、ある種大学の特色が反映している、あるいは学力試験に比べて小規模を対象にして個別の対応が増えるというところもありまして、安定の原理のアクセラルが若干弱まり、むしろ革新にアクセラルがかかるという点が、大きな違いかなというふうに感じました。

そう考えると、オンライン面接と CBT を対比するということがとても意味のあるもののように見えてくる。後のところで説明します。次に、追試験ができない。今の制度の中では、やはり本試験の中でできるだけたくさんの方に受けただくというパラダイムが最適であります。ところが、コロナ禍を通じて、問題作成者が 1 箇所に集合するということの危うさが浮き彫りになったわけですね。いまは、少數の問題を作る。完成度は高いと思うのですが、少數の問題を作ることの追試験への柔軟性のなさが出てきたのかなと考えます。

例えば、共通テストの英語リスニングでは、対面で英語音声を収録するわけですけれども、4月・5月に緊急事態宣言が発令されたために、収録作業がかなり停滞するということが起こりました。なんとかうまくやったわけですが、集合することの危うさが浮き彫りになりました。しかも、受験者の思考を問う大問という形で、意匠性の高い問題をしっかり練り上げて作る。高校での学習を促すように作るとすると、やはりたくさんの試験をやることからは、逆行する。追試験をたくさん設定してくれというニーズとは反するわけですね。もちろん粗製乱造ではいけないわけですけれども、リスクに弱いというところです。

あるいは国の方針、including 大学入試センターということですが、例えばコロナ禍では、健康チェックリストを使って健康観察をした後のフローがかなり事細かに決まっていました。追試験を受験資格認定するときにも、たとえば国語まで途中まで解いていた時に、国語は受けられないとか受けられるとか、そういうところもかなり細かく規定したというところがありました。この方針があるために、逆に動きづらくなったり、煩雑になったという側面もあったでしょうし、これがあることで対応のひな型になったという考え方もあるって、同じものに対しても評価が分かれていきました。例えば、健康チェックリストそのものは、個別学力検査に転

用する場合に個別大学の実態に合うようにカスタマイズされてきたという話も聞いています。

そういう形で、いろいろな課題が噴出してきたと思うのですが、この後、オンライン面接と CBT を対比してみたいと思います。先ほど、安定と革新のトレードオフという話をさせていただきました。オンライン面接は、安定にアクセルがかかりそうなところの均衡が破られて、革新に振ったということだと思います。一方で学力試験は、あまり革新へのアクセルがからなくて、安定原理が崩れなかった。だから爆発的に広がらなかった。そういうふうに整理してみたいと思います。ただ、両者はかなり共通点があります。受験者が慣れていないかもしれない。そもそも試験実施者が慣れていないかもしれないから使えるだろうかという問題がある。二つ目に、不作為ではないトラブルもいくつかあって、CBT の場合は再試験や追試験を織り込んで制度設計しなければならなくなるわけですね。例えば、インターネットの切断、端末再起動の時間をどうするのかという問題があって、これは両者に共通しているので、両者は本質的に違わないはずだったんですね。

では、両者はなぜ袂を分かったのか。オンライン面接はなぜ処方箋として導入され、CBT は爆発的には広がらなかったのか。至近因としては、しゃべる／しゃべらないの問題というのがあると思います。新型コロナ感染症ですから、エアロゾルの拡散というところが心配なわけですが、面接の場、例えばグループディスカッション、あるいは一人と先生方で面接するとなった時に、エアロゾルによって面接試験を受けに来もらった受験生が感染してしまったらどうしよう、という責任の問題が発生してしまいます。先ほども言ったように、面接そのものはかなり個別対応を求められる事例ですので、そもそもオンラインであっても個別対応が行いやすいっていうところが導入の至近因になっていたという気がします。一方で、試験は「解

答始め」の後はしゃべらないわけですよね。ですので、やっぱり対面で何とか実施できないか、いつも通り実施できないかという誘因にはなるわけです。

令和3年度共通テストに、マスク男がいました。顎マスクのような形で口元を出したりして、なかなか大変な男だったんですけれども、これは珍事件ではなくて、確たる不正行為であります。それは、しゃべらないということを前提にするからですね。ちょっと時間もなくなってきましたので早足にいきます。究極因は何か。オンライン面接というのは、高校の先生方の技術的なサポートをある種見込んでやっていたところもあるかもしれないということなんですが、一方で CBT では、特別なシステム構築が必要で ZOOM のように使いやすいアプリケーションがあるわけではないので、それを引き受けてまで使いたいカードじゃなかったということがあると思うんですね。費用、不正行為、いろいろなこうリスクも山積して、そこまで使いたいカードではなかったということです。

これで明らかになったのは、日本で CBT を導入する動きは緊急時には生まれないということです。もちろん、導入したいという萌芽はあったのかもしれません。コロナ禍の中で CBT を入れようかとご検討された大学さんもあったかもしれないですが、やっぱり取り下げる羽目になったわけですね。だから、CBT の導入契機は緊急時には生まれない、むしろ平時に生まれるというふうに考えた方がいいのではないだろうかということです。一方で、海外ではコロナ禍を契機にして、大学入学者選抜でオンライン型の CBT を導入するような国も増えてきていて、アメリカではデジタル SAT とか ACT も CBT に振り切っているところです。

やはり緊急時は、安定を追求しがちなので、いつもやれるものを志向するということです。一方で CBT を入れるというのは、不安定を引き受けことになりますから、平時にしかできないだろうということです。

この話は、私と立脇先生が書いた論文をご覧いただければと思うのですが、最後、ごめんなさい。一分ぐらい。日本の大学入試の強さと脆さっていうのはどこにあるのだろうかと考えたときに、強さは、国が方針やガイドラインを決めれば順守して動けるっていうところだと思います。もちろん反発もあり、こういう形でスタンダードにしますという決めがあれば動ける。あるいは、一度経験すると強くなれるということもあります。一方で、脆さとしてはあまり革新的な方法へのアクセセルがかかりにくいことですね。しかも、その安定していく実施できる学力試験への重みづけがまだ強くて、学力試験がないと困っちゃうので実施することなんですね。ちょっとこの辺は少し時間がないので、議論のところでカバーできればと思います。

CBT に関して、一言だけ。昨年の 6 月に、神田外語大学、佐賀大学、電気通信大学と、私ども大学入試センターの間で協定を結んだということがあります。CBT に関して平時から意識の醸成、実施パッケージの構築が必要だらうということで締結させていただいたものです。緊急時には CBT は広がらない、むしろ平時に広がるという考えがあったので、こういった地道な取り組みをできるだけ進めようということです。

だいぶ時間を過ぎてしまいました。申し訳ありません。これで発表をおしまいにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

三戸望特任教授（司会）

寺尾先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

2025/09/22(月) 10:00~12:30
大学入試学会第2回大会公開シンポジウム + 東北大学高等教育フォーラム
「コロナ禍は大学入試をどう変えたのか」

コロナ禍における 日本の大学入試の強靭さと脆弱さ オンライン面接とCBTの分水嶺は?

寺尾 尚大
大学入試センター研究開発部



オリーブの花言葉：平和、知恵、勝利
「創世記」では、大洪水の後、ノアが放ったハトがオリーブの実をくわえて戻ってきたという

1

アウトライン

- ・コロナ禍で日本の大学入学者選抜に何が起こったか
 - ・新規陽性者数のレビュー、入試で起こったことのレビュー
- ・コロナ禍の入学者選抜における、試験実施者側の論理
- ・オンライン面接はなぜ処方箋になったのか？CBTはなぜ処方箋の候補とはならなかった（なりにくかった）のか？
- ・コロナ禍からみる日本の大学入試の強さと脆さ

2

本発表の元ネタ

- ・論文
 - 寺尾尚大・内田照久・石井秀宗・林篤裕・中村裕行・立脇洋介・西郡大・宮本友弘・久保沙織・倉元直樹 (2024). 大学入試における近年の危機対応事例の総括—感染症・自然災害・刺傷事件・不正行為と未知の危機に備える—. 日本テスト学会誌, 20, 43–71. https://doi.org/10.24690/jart.20.1_43
 - https://doi.org/10.57513/dncjournal.33.0_191
- ・YouTube（プレイバック座談会）
 - ・プレイバック座談会 <https://youtu.be/ckCFj4S9cXI?si=qLktbQpExHlk80r>
 - ・プレイバック座談会Part2 https://youtu.be/0MG_88aXQfA?si=KzckMmP2hSgdxV2J

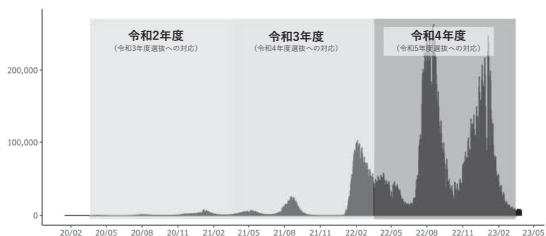
3

1

コロナ禍で 日本の大学入学者選抜に 何が起こったか

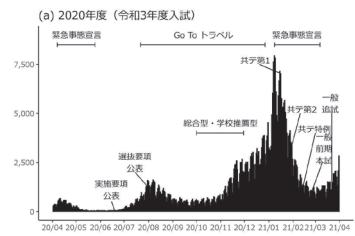
4

新規陽性者数の推移 (2020/1~2023/5)

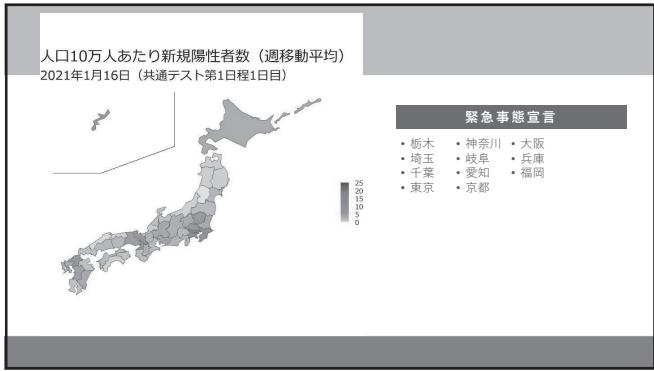


5

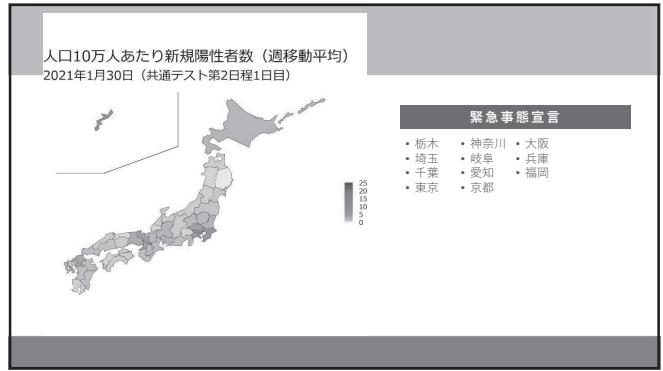
令和2年度 (2020/1~2021/3)



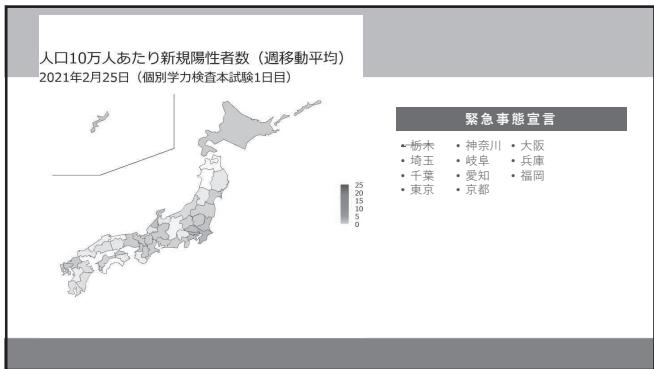
6



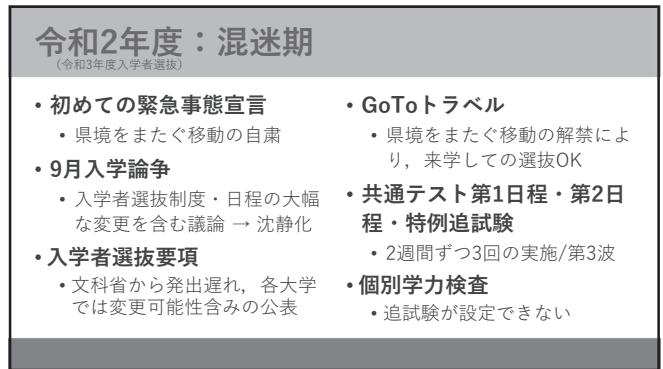
7



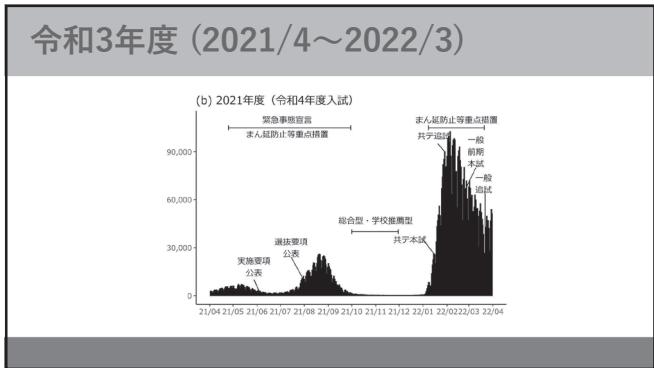
8



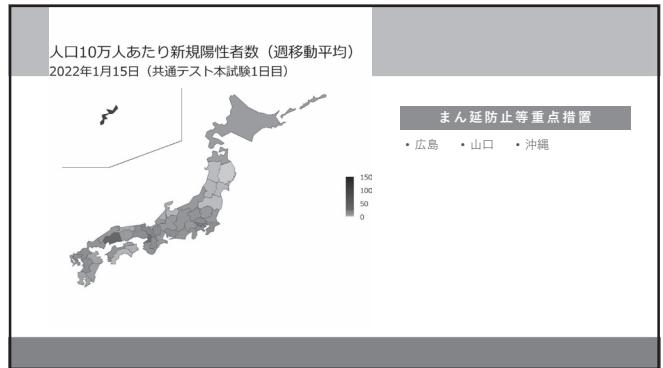
9



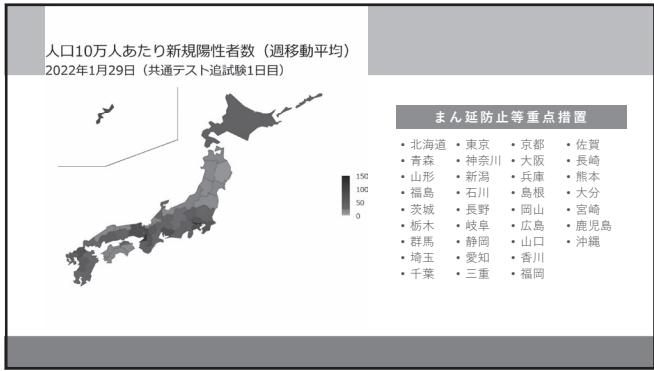
10



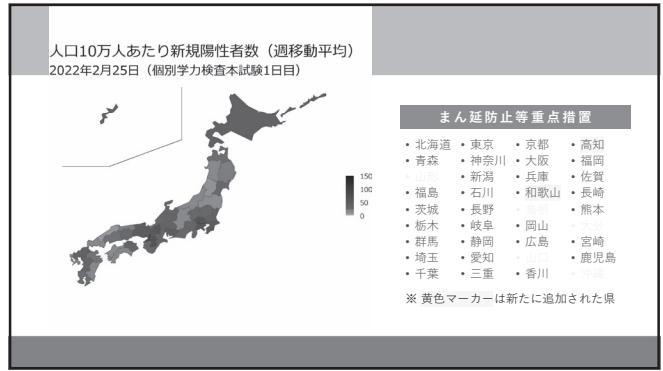
11



12



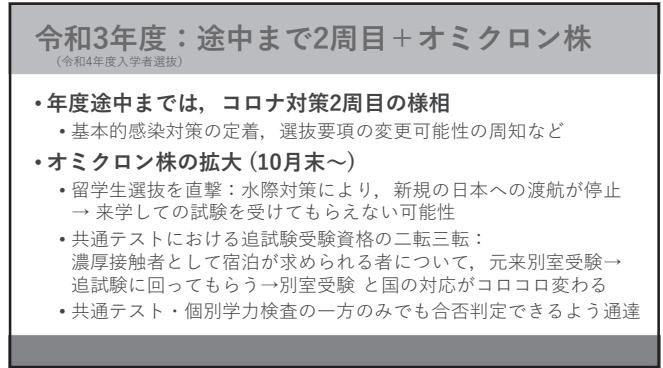
13



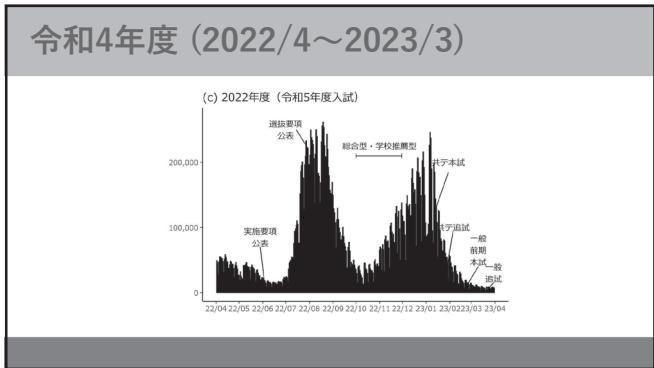
14



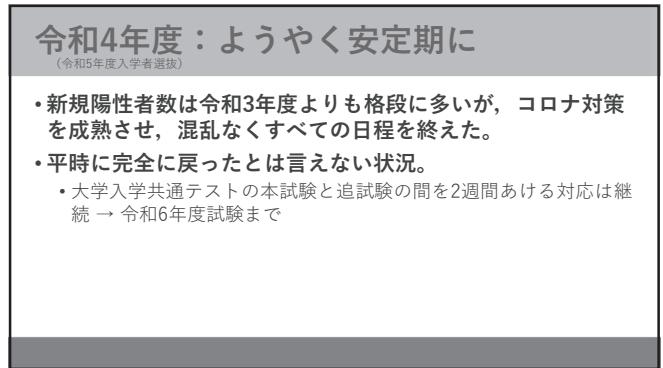
15



16



17



18

コロナ禍が突き付けた問い

- ・問題作成や試験実施・運営体制が硬直化していないか?
 - ・共通テストも特例追試験の設定がやっと。各大学の個別学力検査では、追試験の問題作成のエフォートを割けない。
 - ・試験監督者は、大学教員の厚意に依拠している。高齢+基礎疾患のある教員には、試験監督をお願いできない。
- ・國の方針の在り方は適切だったか?
 - ・時宜を得た変更 vs. 周知したとおりに実施
 - ・一律 vs. 個別判断

19

コロナ禍の入学者選抜における試験実施者側の論理

2

20

安定と革新のトレードオフ（私案）

- ・入試業務は安定が第一。ミスなく、定められた業務を確実にこなす(終える)のがよい。
 - ・入試の(形式的な)公平性・公正性を高める一要因と考えられる。
 - ・いつもの型を緊急的に変更すると、ミスが生じやすくなる。
- ・新しい時代に対応したり、緊急時にも対応できるようには、選抜方法や入試業務フローの革新が求められる。
 - ・ただし、革新の初期にはトラブルが続出し、不確実性が高い。
 - ・新しい業務フローに対しては、入試課職員の理解が不可欠。
 - ・もちろん、小さな革新や改善の例は枚挙にいとまがない。

21

試験実施・運営体制の硬直化

- ・背景には、安定の原理が強く働いている。
 - ・受験者に周知したとおりの方法で、いつも通りに試験を実施することは、受験者の安心感にもつながる。
 - ・このため、革新へのアクセラがかりにくい。
- ・特に、学力試験で相対的に安定の原理が強く働く。
逆に、面接や小論文、グループディスカッションなど特色のある選抜では、(元来、革新的であるために)安定の原理は、相対的に弱い。
 - ・この後で、オンライン面接とCBTを対比する理由のひとつ

22

試験問題作成体制の硬直化

- ・問題作成者が一か所に集合して、少数の問題の完成度を高めるという考え方で作成されている。
 - ・集合できないことによる問題作成作業の停滞（内田ほか, 2025）
 - ・受験者の思考を問う大問を、しっかり練り上げて作る。素材にもこだわり、高校での学習を促すように作成する。= 意匠性
→ この作題・点検体制は、受験機会の複数設定とは逆行する。
 - ・もちろん、粗製乱造ではいけないが、あまりにリスクに弱い。
 - ・大学教員に、問題作成を兼業してもらっていることの脆弱さか。
- ・種々の観点で、問題作成のパラダイムシフトが必要。

23

國（including 大学入試センター）の方針の在り方

- ・コロナ禍では、選抜の全体像をゆるやかに規定するだけでなく、現場の一挙手一投足にまで統制が及んだ。
 - ・e.g., 健康チェックリスト、追試験の受験資格認定フロー、別室対応
 - ・この方針があるために、試験室の現場が動きやすくなったり側面と、制約を受けてしまった側面がある。
- ・國の方針は、現場の対応がまちまちにならないよう統率したり、ひな形を示したりする役割もある。
 - ・個別学力検査では、各大学の実態に合うよう、適宜カスタマイズされたと聞いている（カスタマイズの雛型の提供という意義）

24

3

オンライン面接とCBTの分水嶺

25

なぜオンライン面接とCBTか

- ・安定と革新のトレードオフ関係について、その均衡が破られて革新が起ったのが“オンライン面接”その均衡を保った(安定の原理が崩れなかった)のが“CBT”

・両者の共通点

- ・受験者・試験実施者が慣れていない。
- ・不作為ではないトラブル(インターネットの切断や端末再起動等)を見込む必要がある。

両者の分水嶺は、果たして何であったのか？

26

至近因：面接は喋る、試験は喋らない

- ・至近因の一つは、面接では必ず受験生による発話が必要になること → エアロゾルの拡散による感染: オンラインへの誘因
 - ・大学としては、面接試験の場が受験生・面接官の感染の原因の場となることを避けたい
 - ・面接時にトラブルがあっても、個別対応が行いやすい
- ・試験では、解答時間中に受験生が喋ることはない → 対面実施への誘因
 - ・基本的感染対策の定着が対面実施をサポートする役割
 - ・マスク男(R3共通テスト本試)は珍事件ではなく、確たる不正行為

27

究極因：CBTへの動因のなさ・コスト高

- ・オンライン面接は、コロナ禍以降でオンライン授業も普及し、オンライン会議システムの利用方法への慣れも見られた。
 - ・高校教員の技術的なサポートを前提としていた側面もある
 - ・オンライン会議システムの使い方以外に慣れるべきものがない。
- ・他方、CBTには導入への動因がない。
 - ・システム構築や自宅受験のコスト(費用・不正行為の懸念等)が莫大 →それを引き受けまで使いたいカードではなかった。
 - ・R3選抜にCBTを導入した九工大、函館大は、コロナ前からCBTの構想があった。

28

日本のCBT導入への動因は平時に生まれる

- ・海外では、コロナ禍を契機に大学入学者選抜でオンライン型のCBTを導入(e.g., Digital SAT, International UAS)
- ・一方、日本ではCBT導入への動因が、緊急時には生まれなかつた(もしくは、生まれていてもその構想を取り下げる羽目になった)。
 - ・緊急時の不可抗力をもってしても、学力試験にかかる安定の原理を打ち崩すことはなかつた。
 - ・むしろ、CBT導入の動因は、緊急時ではなく平時に生まれると考えたほうがよい。←緊急時は安定を追求しがちであるため

29

CBT導入のメリットの体系化

- ・入学者選抜の本質的な課題とCBTの活用イメージの接続(寺尾・立脇, 2024)
 - ・アドミッション・ポリシーの効果的な実現
英語スピーキング(東外大、佐賀大、函館大)、情報I(電通大)
 - ・遠隔モデル(自宅等からオンラインで試験を受ける)の活用
留学生選抜(神田外語大)
 - ・受験上の配慮
 - ・問題バンクと統計理論を用いた柔軟な出題
- ・こうした革新を達成する道具としてCBTを位置づけるのが、学力試験の平時の革新を生む点において望ましい。

30

4

日本の大学入試の 強さと脆さ

31

日本の大学入試の強さと脆さ

・強さ

- ・国が方針やガイドラインを決めれば、それに準じて動ける。
- ・一度危機を経験すると強い。

・脆さ

- ・選抜資料として、学力試験への重みづけが高い。ないと困る。
安定の原理が働きやすく、革新が起こりにくい。
→ 革新的な方法を安定的な水準まで高めて、各大学に提案しては？
- ・自大学での創意工夫に対して、不安が高い。革新による失敗やトラブル発生に対し批判を浴びやすい。→ 社会の機運醸成もセットで？

32

大学入学者選抜における安定と革新

- ・ドラスティックな革新は混乱を生むので、忌避されやすい。
⇒ ゆるやかな革新・社会の理解を得ながらの提案
- ・新しい学力試験の方法を支えるパラダイムや体制構築の足元固めが必要になる。
 - ・熟練工による最高傑作から、大量生産・大量消費(フォード型)に切り替える必要性 ← 問題バンク型のCBTを作り立てる
 - ・安定して実施できるCBTパッケージの提案 ← 素人がやると必ず怪我する
- ・この取り組みに、大学入試センター(国)のかかわりが不可欠。

33

CBT活用連携：平時のCBT導入を支援

- ・2024年6月に、神田外語大学・佐賀大学・電気通信大学と大学入試センターとの間で、「大学入学者選抜におけるCBTの活用の推進に向けた連携」を締結。
 - ・はじめてCBTを導入する大学向けのガイドライン作成や、試験実施の雛型となる(マニュアル的)ハンドブックの作成、試験問題の流通や共有の新しい枠組みに向けた議論を実施
 - ・脆さとして指摘した2点(革新を安定まで高めて提案・社会の機運醸成)を意識した活動
- ・こうした取り組みが他のドメインでも広がることを期待する

34

話題提供3：COVID-19による教育環境の変化と大学選択行動

——日中の高校生比較から——

東北大学アドミッション機構

林如玉 助教

三戸望特任教授（司会）

続きまして、「COVID-19による教育環境の変化と大学選択行動——日中の高校生比較から——」と題しまして、東北大学林如玉先生、よろしくお願ひいたします。

林如玉助教

東北大学の林です。本日はよろしくお願ひいたします。最初に、スクリーンに一本の線を映しています。この線が長いのか短いのかは、1本だけでは判断が難しいと思われます。そこで円を追加してみると、性質が異なるため比較ができず、特徴を捉えることはできません。さらにもう一本線を示すことで、最初の線が相対的に長いことが分かります。このように、ある対象の特徴を捉えるためには、共通の性質を持つ比較対象がある方がよいことが示されます。そこで、今回は日本と中国を比較します。両国には大学入試制度やCOVID-19への対応といった共通の土台が存在するため、違いがよりはっきりと見えてくるからです。

まず、中国の教育制度の全体像について簡単にご紹介します。中国の学校教育は教育法によって、就学前教育、初等教育、中等教育、高等教育の四段階に区分されています。これは日本とほぼ同じ仕組みです。義務教育も日本と同様に、小学校6年と中学校3年の計9年間です。その後、高級中学（日本の高等学校に相当）に進み、普通高校、職業高校、中等専門学校などが含まれます。中等教育を終えた後、生徒は高等教育機関への進学か就職

かを選択します。本日は、このうち高等教育機関への進学を希望する高校生に焦点を当ててお話しします。



ここで、補足情報として、中国の学校の学期制度について少し触れます。中国の学校年度は9月に始まり、1月末から2月にかけて冬休みがあります。その後、第2学期の春学期が2月頃に始まり、6月下旬から7月上旬にかけて卒業するという仕組みです。

続いて、進学の希望状況、高等教育への進学率について紹介します。アメリカの教育社会学者マーチン・トロウは、進学率が50%を超えると「ユニバーサル段階」と整理しています。日本では早い段階から50%を超え、大衆化が進み、最近の学校基本調査では84%程度となっています。中国でも大衆化が進んでおり、教育部（日本の文部科学省に相当）の統計では、2023年の進学率は60%ほどです。日本でも中国でも大学進学が一般的な選択となっており、現在の高校生にとって大学

選択は多くの生徒が直面する重要なプロセスです。ここからは、そのプロセスの要となる入試と進学の流れについて見ていきます。

中国では、日本の共通テストに相当する全国普通高等学校募集入学試験、いわゆる「高考」が毎年 6 月 7 日と 8 日に実施されています（一部の地域では 3 日間実施）。受験者数は非常に多く、2024 年度は 1,342 万人でした。参考までに日本の受験者数と比較すると、規模の違いが明確に分かります。

この高考は、「千軍万馬過独木橋」（千軍万馬が一本の木橋を渡る）という表現で象徴されるように、極めて競争が激しい入試として社会に認識されています。日本の一般選抜に近い仕組みですが、日本みたいに個別大学ごとの学力検査は行われず、全国統一試験一本の一発勝負となっています。もう 1 つの参考として、難関大学への合格率です。中国の難関大学グループである「211 大学」や「985 大学」に合格できる割合はごくわずかであり、この数字からも大学入試が非常に厳しいことが分かります。

中国では、高考による選抜が基本となっていますが、制度上は多様化への試みも存在します。例えば、2003 年度以降、一部の大学で「自主募集制度」が認められていました。これは日本の総合型選抜に近い仕組みですが、全国に 2,600 以上ある大学のうち実施していたのは約 3% に過ぎず、この制度自体も 2010 年度から全面的に廃止され、一部大学のみの改革試験（強基计划）へと移行しました。

また、「推薦入試」も 1980 年代から導入されていますが、資格要件が全国共通で非常に厳しく、毎年の入学者はごくわずかに留まっています。例えば、2019 年度の大学合格者約 915 万人のうち、推薦入試による入学者は約 2,000 人でした。制度として多様化の試みはあったものの、実際には例外的な存在であり、大多数の受験生にとっては依然とし

て高考が唯一の手段となっています。

この点は、日本の大学入試における多様化の進み方とは大きく異なります。スライドにあるとおり、各入試区分で入学した学生の割合を見ると、中国では事実上、志望大学に入学するための唯一の方法は、高考で高得点を取ることだと言えます。

では改めて、両国の制度面における共通点と相違点を整理します。まず共通点として、日本でも中国でも高等教育機関への進学率が 50% を超えユニバーサル段階に入り、高等教育の大衆化が進んでいることが挙げられます。さらに、教育制度の構造自体も類似しており、全国規模の共通試験が進路を決める重要な節目となっている点も共通しています。また、一発勝負への批判が存在する点も両国に見られます。

一方で、相違点は制度の多様化にあります。日本では推薦入試や総合型選抜の拡充によって、複数のルートから進学できる柔軟性が確保されています。これに対し、中国では、先ほどの表でも示したように、依然として高考の結果への依存度が非常に高く、制度としての特徴が大きく異なっています。

ここまででは制度の違いを見てきました。次に、COVID-19 の影響について述べます。日本の状況については、先ほど寺尾先生や倉元先生の発表で詳しく触れられていますので、ここでは主に中国の状況を紹介します。

まず、2020 年度初頭には武漢を中心に感染が急拡大し、1 月 23 日には武漢でロックダウンが始まり、全国で最高レベルの危機対応が取られました。この日付について注意が必要ですが、1 月 23 日は先ほど紹介した中国の学期制度のとおり、ちょうど冬休み期間中にあたります。つまり、高校生も多くが在宅している時期でした。

教育面では、春学期の開始が延期され、さらに倉元先生の紹介にもあったように、高考は 7 月に延期されました。同時に、全国規模

でオンライン授業が開始されました。

続いて、2020年から2021年にかけては「動的ゼロ COVID-19」という方針が取られ、地域ごとに再発した感染への防止対策が行われました。授業はオンラインと対面を切り替えながら実施され、学校生活では検温や健康コードの提示が日常化しました。健康コードは、定期的にPCR検査を受け、陰性であれば発行される仕組みです。

教育への影響の中でも特に大きかったのが、高考の延期です。これについて少し補足します。3月31日には教育部から1か月の延期が発表されました。延期の理由には「健康第一」と「公平第一」の2点があります。健康第一については、2020年3月末時点でも一部地域では小規模感染やクラスターの危険が残っていたこと、さらに世界的な感染拡大が続いていることが背景にあります。公平第一については、都市部ではオンライン授業へ移行できた一方で、一部の農村地域では休校やオンライン環境の格差があり、学習準備が遅れている受験生に配慮したものです。

この年の対応は過去最大規模となり、受験者数は1,071万人、全国で約7,000か所・40万室の会場が設置され、スタッフも約945,000人が動員されました。受験生やスタッフは、試験日の14日前から毎日体温を記録し、さらにPCR検査を受け、予備試験場の設置や徹底した会場消毒など、さまざまな感染対策が取られました。

全体的な状況に戻りますと、2021年までの対応に続き、2022年度にはオミクロン株による大規模感染が各地で発生しました。都市によって、高校3年生は長期間オンライン学習が続くことになりました。この時期、大学説明会や相談会などのイベントもすべてオンラインとなりました。長時間の自宅学習で、受験生や家庭の負担が大きくなりました。

しかし年末頃には、オミクロン株の病原性減弱、ワクチン接種の普及などに伴い、政策

が転換され、新型コロナ感染をB類感染症に区分として扱われるようになり、教育活動が急速に正常化しました。ここで述べている「入学試験が対面に戻る」というのは、通常の学校授業のことではなく、芸術系の実技試験や大学院の面接など、一部でオンライン化されていた試験が全面的に対面に戻ったことを指しています。

ここで、相違点をまとめます。日本と比較するとどのような違いがあったでしょうか。まず共通点として、両国とも入試を中止せず、日程を調整して実施したことが挙げられます。また、授業の中止に伴うオンライン化や、高校生活・課外活動への大きな制限があった点も共通しています。

ただし、対応の仕方には違いがあります。日本では大学や地域ごとに柔軟な対応が取られ、共通テストには追加日程や追試が設けられました。休校期間は1~2か月程度で、補習や夏休み短縮によって学習の遅れを取り戻す形が見られました。

一方、中国では全国一斉に高考が1か月延期となり、休校期間は3か月以上に及びました。オンライン授業は長時間にわたり、特に高校3年生を優先的に対面授業へ復帰させるなど、入試に備えた対応が特徴的でした。

ここまでが背景の説明になります。ここからは、自分の調査研究の結果について述べたいと思います。まず調査の概要ですが、最初に倉元先生の説明にもあったように、同じ内容の質問紙調査を日本と中国で、コロナ前とコロナ後に取得し、その比較結果を紹介します。こちらが調査対象となった時期と学年の内訳です。調査対象となる時期とは、質問紙では過去1年間の状況を尋ねている、という意味です。例えば2020年度調査の場合、回答者には2019年から2020年にかけての経験を基に回答してもらったということになります。

まず、授業形態についてです。中国では

2020 年の春頃に、先ほど紹介した政策に基づき全国的にオンライン授業が行われました。5 月には、9 割近くの高校生が対面授業に戻っています。一方、日本では多様な形が見られ、調査結果によると、課題のみを与えられた生徒が全体の 6 割を占め、オンライン授業のみや一部オンライン併用という形もありました。

次に、授業時間と学習時間についてです。1 日平均のオンライン授業時間は、中国では約 7 時間半、日本では約 4 時間 10 分で差が見られました。一方、オンライン授業を除いた 1 日の平均学習時間は、中国では約 3 時間 30 分、日本では約 3 時間 10 分で、ほぼ同じ水準となっています。オンライン授業時間に大きな差があるものの、授業以外の自主的な学習時間には大きな違いは見られませんでした。

ここでは、高校生にとって COVID-19 が大学選択にどのような影響を与えたかを見ていきます。このグラフでは、進路選択や感染状況の考慮、経済的な変化、医学・保健学への関心といった各項目について、自分の考え方や経験に当てはまるかどうかを尋ねた結果を示しています。色分けとしては、紫系が「当てはまらない」、オレンジ系が「当てはまる」または「やや当てはまる」という肯定的な回答を示しています。

まずは日本の状況です。進路選択に影響があったと感じる生徒や、医学・保健学に興味を持った生徒も一定数いましたが、全体としては大多数が「どちらとも言えない」または「当てはまらない」と回答しており、影響は限定的であったことが分かります。下段には自由記述の結果が示されており、より具体的な影響が浮かび上りました。回答した生徒の約 3 割は「影響はなかった」と答えていますが、「影響があった」とする回答の中では勉強に関するものが最も多く、授業の進度や学習環境への不満が目立ちました。また、オ

ープンキャンパスに行けなかったことを大きな障害として挙げる声も多く、情報収集活動の重要性が改めて示されました。

一方、こちらが中国の状況です。医学や保健学への興味については、「興味を失った」という項目に当てはまらないと回答した生徒が 8 割を超えており、逆に「興味を持った」という方向に影響した回答も見られます。つまり、COVID-19 は関心の方向性には一定の影響を与えたと考えられます。ただし、ここで示されているのは「関心を持つこと」であり、必ずしも大学選択に直結するわけではありません。

下段の自由記述の結果を見ると、全体のうち約 7 割は「影響はなかった」と回答しています。一方で「影響があった」とする回答の中では、勉強に関するものが最も多く、約 6 割を占めました。具体的には、勉強時間が足りない、家での効率が良くない、成績が下がった、オンライン授業の効果が低いといった回答です。その他、精神的な負担や大学選択そのものへの影響を挙げる回答も見られました。

次には、情報活動について見ていきます。対面型の活動とは、オープンキャンパス、講演、キャンパス見学、進路説明会など、大学教員が高校生と直接対面して話をする機会を指します。2018 年度（コロナ前）を見ると、1 年生は対面型の活動に参加する時間が比較的多く、頻繁に参加していましたが、2・3 年生になると勉強が中心となり、参加頻度が減少していました。

2020 年度（コロナ禍）に入ると状況は大きく変わりました。大学主催の広報活動の一部がオンラインへ移行し、高校でも臨時休校が実施されたため、組織的なキャリア教育の機会が減少し、高校生の対面型情報収集活動の頻度は全体的に下がったと考えられます。

続いて中国の結果です。日本と異なり、学年間の差が大きく表れています。2018 年度

では3年生の活動頻度が最も高く、2年生が低めでしたが、2020年度（コロナ後）では逆に2・3年生の活動頻度が比較的高い結果となりました。COVID-19の影響を見ると、特に1年生と3年生の活動頻度が下がっています。これは日本と同様、活動の機会が減少したためと考えられます。加えて、3年生はもともと他学年よりも対面型活動が多い傾向があり、高考前は受験勉強に集中し、受験後に対面型イベントへ参加して情報収集を行うケースが多かった可能性が高いと考えられます。

次に、受信型の情報収集活動について見ていきます。受信型メディアとは、下に示されているとおり、インターネット検索や大学の公式サイト、SNSなどの情報源を指します。調査結果を見ると、コロナ禍の2020年度は2018年度よりも全体的に活動頻度がやや低くなっていました。COVID-19の影響により、受信型を含めた情報収集全体の頻度が下がったことが考えられます。学年差を見ると、学年が上がるにつれて進学意識が高まり、情報収集活動の頻度も高まる傾向が見られました。

一方、中国では逆に、2020年度の受信型情報収集活動の頻度が高くなっています。授業の一部がオンラインとなり、自宅で過ごす時間が長くなったため、携帯電話やパソコンを使用する時間が増えたことが背景にあると考えられます。つまり、中国の場合、COVID-19の流行により対面型の情報収集活動が抑制された分、その代替として受信型情報収集活動が促進されたことが分かります。

次に、相談相手についてです。高校生が誰に進路の相談をして大学を決めたのかを示しています。2018年度も2020年度も、一貫して最も多いのは母親で、続いて高校の教師、友人、父親の順となっています。特に注目すべきなのは2020年度の変化で、母親や

友人はわずかに減少している一方、高校教師は微増しています。COVID-19によりオンライン化が進む中でも、進路指導に関しては高校の先生が引き続き重要な役割を果たしていましたことが示されています。特に高校3年生では、受験に直結する指導を担う高校教師が安定した相談相手となっていた可能性が高いと考えられます。

中国の場合、最も多い相談相手は友人と母親です。全体的に見ると、コロナの影響により母親と相談する頻度がわずかに増加しました。在宅時間が長くなり、日常的に顔を合わせる機会が増えたことが背景にあると考えられます。ただし、母親や父親といった家庭内の相談相手はもともと高い水準を保っており、家族の影響が依然として大きいことが分かります。一方、高校教師の得点は2点程度にとどまり、日本ほどの存在感は見られませんでした。

ここからまとめに入ります。高校生の大学進学における進路決定のプロセスがこちらのグラフになります。ここで示している数値は標準化した値のため、実際の活動頻度そのものではなく、学年間の変化を表しています。2018年度を見ると、日本では1年生の段階でキャリア教育や文理選択を前提とした対面型の情報活動が活発で、2年生になると対面型の活動が減少し、その代わりに受信型の情報収集や相談活動が増加します。2020年度も基本的には同じ傾向ですが、大きく異なる点は1年生です。COVID-19の影響により、1年次の対面型情報収集活動が大きく減少し、その結果、相対的に2年生の数値が高く見えています。低学年では、情報収集の機会が特に制約を受けていたことが分かります。

中国の状況についてですが、まず2018年度、1年生は文理選択を前に家族や友人と相談する活動が多く、2年生では全体的に活動が下がり、3年生で志望大学の最終決定を前

に一気に活動が増える傾向が見られました。さらに、中国では高考受験後に大学を決める生徒が多いいため、この特徴が表れています。

2020 年度のデータを見ると、受信型情報収集の学年差は従来と同じでしたが、対面型と相談活動に違いが見られました。特に 3 年生の対面型活動が減っており、これは高考が 1 か月延期されたことで時間が制約され、従来の「受験後に対面活動で志望校を決定する」というプロセスが機能しなかったことを示しています。

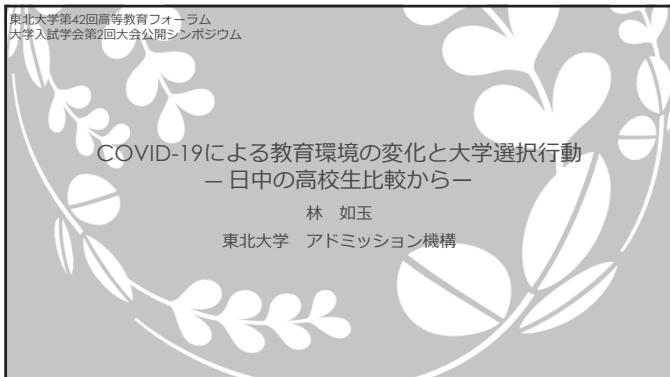
また、2 年生では相談活動が増えており、外出制限の解除後に先生と直接話せる機会を貴重に感じたことや、将来への不安が強まり相談が増えた可能性が考えられます。

最後に、ぜひ共有したいのが志望大学の決定時期についてです。日本の高校生では、コロナ前後の差が特に顕著に表れました。2018 年度と比べて 2020 年度は、志望大学の決定が全体的に遅くなる傾向が見られました。特に、共通テスト終了後に決定するケースが増えている点が特徴的です。COVID-19 の影響により社会全体が大きく変化したことから、将来への不安が高まり、最後の段階まで考える傾向が強まったと考えられます。

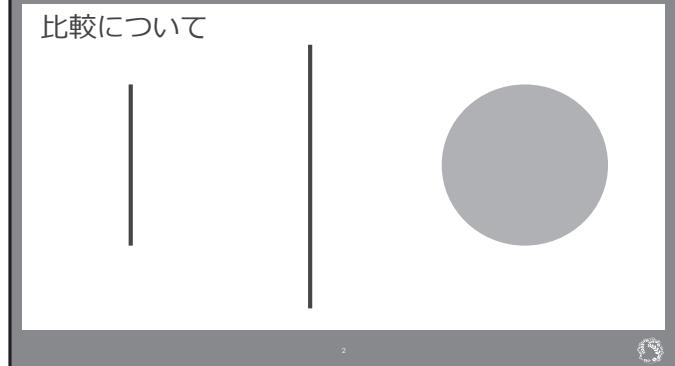
発表は以上となります。ご清聴ありがとうございました。

三戸望特任教授（司会）

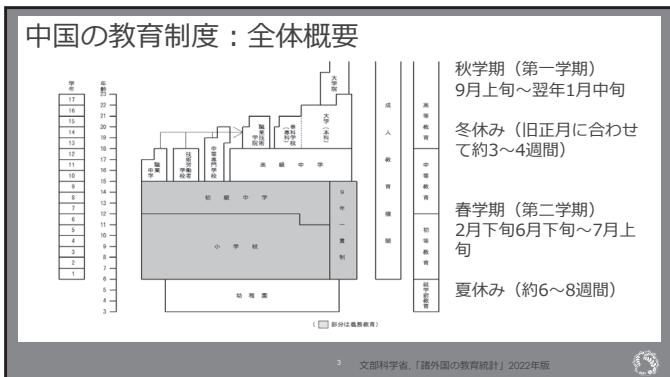
林先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、WEB 上での入力をお願いいたします。



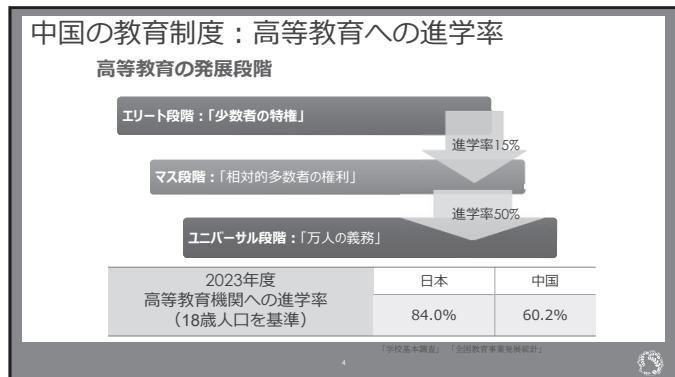
1



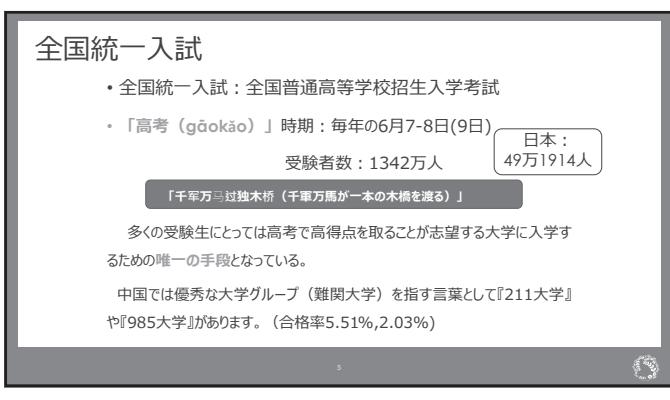
2



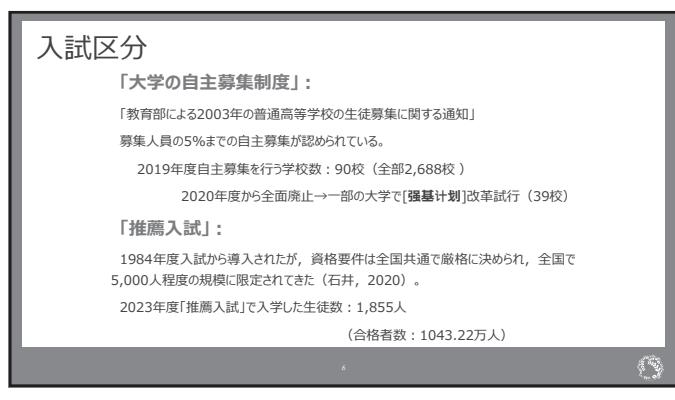
3



4



5



6

日中の大学入試区分

各区分で入学した学生の割合（2019年度）

日本	割合	中国	割合
一般入試	50.9%	全国統一入試	約98%
推薦入試	38.4%	推薦入試	全国で5,000人程度の規模に限られる
AO入試	10.6%	大学の自主募集	一部の大学に募集人員の5%まで

「令和2年度国公私立大学入学者選抜実施状況」、「中国の大学入試個別選抜改革」石井(2018)を参考に作成

日本と中国の相違点（制度面）

共通点

高等教育の大衆化
進学率：日本58.1%（2019）、中国51.6%（2019）
両国ともユーバーナル段階に到達
教育制度の類似性
初等・中等教育を経て、全国規模の共通試験を経て大学進学
共通試験が進路決定の重要な節目
「一発勝負」への批判が存在

相違点

日本
長年の改革で 多様化が進展 共通テスト+個別試験、推薦型・総合型選抜の拡充→複数ルートから進学可能、進路選択に柔軟性
中国
高考中心で制度的制約が強い 多様化の試みは限られた、日本ほど進まず →進学先選択は「高考結果」に大きく依存

7

8

中国のCOVID-19対策と教育環境への影響

時期	政策・対策	教育環境への影響
2020年初頭	<ul style="list-style-type: none"> 武漢封城（1/23） 全国で最高レベルの公衆衛生危機対応発動 国務院による春節休暇延長通知 教育部による春季学期の延期通知 	<ul style="list-style-type: none"> 2020年大学入試（高考）が7月に延期（教育部発表） 史上最大規模のオンライン授業開始（「休校不停学」）
2020～2021年	<ul style="list-style-type: none"> 「動的ゼロCOVID」方針 差異化管理策 教育部・卫健委共同による「中小学校新冠肺炎疫情防控技術方案」発表 	<ul style="list-style-type: none"> 授業が対面⇒オンラインの間で切替 学校内での日常的な感染予防対策実施（検温、健康コード、大規模集会制限）

9



高考延期と公平性確保

◆ 決定

中国教育部は2020年3月31日、例年6月実施の高考を **1か月延期し7月7-8日実施**と発表

◆ 延期の理由（公式）

1. **健康第一**
-3月末時点でも一部地域で小規模感染・クラスターの危険性あり
-世界的な感染拡大が継続していたため
2. **公平第一**
-特に農村部など、休校やオンライン環境の格差で学習準備が遅れている受験生への配慮
-学習時間を確保し、試験機会の公平性を最大限保障

◆ 規模と対応

受験者数：約1,071万人（過去最多）
会場：全國約7,000万所・40万室
スタッフ：約94万5千人勤員
感染対策：受験生・スタッフは14日前から体温記録、予備試験場の設置、徹底的な消毒

出展：南紅玉「大学入試における各国のCOVID-19対策—日本、中国、韓国の共通試験を事例に—」日本テス学会誌、17(1), 2020

10



9

中国のCOVID-19対策と教育環境への影響

時期	政策・対策	教育環境への影響
2022年	<ul style="list-style-type: none"> オミクロン変異株により多地域で大規模感染発生 「科学的・精密な対策」強調 封域管理・PCR検査の強化 感染予防管理方案（第9版） 	<ul style="list-style-type: none"> 都市によっては高3生が長期自宅学習 オンライン学習 受験生のメンタル、家庭に影響大
2022年	<ul style="list-style-type: none"> オミクロン株の病原性弱め、ワクチン接種の普及 対策最適化調整と 『新型コロナ感染をB類感染症に区分しB類管理する総合方案』（2022.12.26）公布、実施 	<ul style="list-style-type: none"> 教育秩序が着実かつ全面的に正常化 各種入学試験が対面に戻る 疫情の学習への影響は、政策レベルから個人の健康問題という側面に変化

11



日本と中国の相違点（COVID-19対応）

共通点

入試は中止せず、日程調整で実施
授業中断とオンライン授業の導入
高校生活・課外活動に大きな制限

相違点

日本
大学・地域ごとの柔軟対応 共通テストに追加日程・追試を設定 休校は1～2か月、補習・夏休み短縮で度々回復
中国
全国一斉に高考を1か月延期 休校は3か月以上、長時間のオンライン授業 高3を優先的に対面復帰

11

12



調査概要

日本2018年度調査
調査時期：2019年2月～4月
対象：全国11校の高校生 7,700名
有効回答：1,089名（回答率14.1%）

日本2020年度調査
調査時期：2021年2月～3月
対象：全国6校の高校生 4,104名
有効回答：3,171名（回答率77.3%）

中国2018年度調査
調査時期：2019年6月～8月
対象：河南省4校の高校生 419名
有効回答：371名（回答率88.5%）

中国2018年度調査
調査時期：2020年10月～11月
対象：河南省7校の高校生+大学新入生 1,249名
有効回答：1,116名（回答率89.4%）

- ・日中両国で調査対象となった高校各地域の上位から中のレベルの進学校とみなされる高校であり、総体的に見ると、社会的な位置づけには本質的な違いはないと考えてよい。

13

調査概要

日本「調査対象となる時期」

2018年度調査：
2018年4月～2019年3月
2020年度調査：
2020年4月～2021年3月

日本	度数	%
年度	2018年度	1,019
	2020年度	2,834
学年	1年生	1,428
	2年生	1,451
	3年生	972
		25.2

中国「調査対象となる時期」

2018年度調査：
2018年9月～2019年7月
2020年度調査：
2019年9月～2020年9月

中国	度数	%
年度	2018年度	192
	2020年度	598
学年	1年生	285
	2年生	222
	3年生	283
		35.8

14

13

14

授業形態

「中国」

国の政策（教育部・2020）として、基本的オンライン授業。対面授業に戻った時期を調査した結果、5月になると9割近くの高校生が対面授業に戻った。これは国のCOVID-19感染防止政策の調整状況と一致した結果である。

「日本」

	度数	パーセント
無回答	29	1.0
①対面授業のみ	274	9.7
②オンライン授業のみ	471	16.6
③一部オンライン授業と一部対面授業	288	10.2
④授業はない、課題だけ	1702	60.1
⑤その他	70	2.5
合計	2834	100

15

15

授業時間と学習時間

「一日平均オンライン授業時間」

中国：7時間30分
日本：4時間10分

「オンライン授業時間を除いた一日平均学習時間」

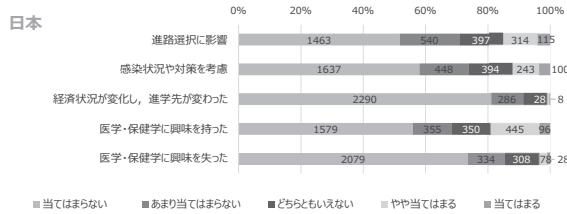
中国	度数	%	日本	度数	%
①0時間	20	3.3	無回答	20	0.7
②0～3時間	290	48.5	①0時間	132	4.7
③3～6時間	174	29.1	②0～3時間	1415	49.9
④6時間以上	114	19.1	③3～6時間	854	30.1
			④6時間以上	413	14.6

中国：3時間30分 (M=3.47) 日本：3時間10分 (M=3.19)

16

16

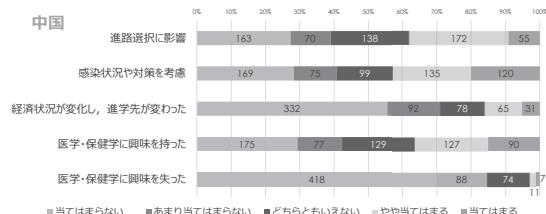
高校生の大学選択に与えた直接的な影響



313人(全体の11%)の生徒28.4%は「影響がなかった」と回答した。
「勉強」と関係ある回答は96(42.9%) 「オープンキャンパス」と関係ある回答も25(11.2%)名あった。

17

高校生の大学選択に与えた直接的な影響

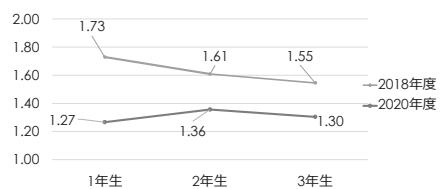


195名(全体の32.6%)生徒のうち70%は「影響がなかった」と回答した。
「勉強」と関係ある回答は33(60%)。

18

18

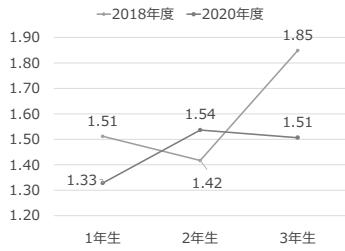
対面型情報収集活動（日本）



COVID-19の影響で、高校生が大学選択をするための対面型情報収集活動を行う頻度が低くなった。

オープンキャンパス / 大学先生による講演 / 卒業生による講演 / キャンパス見学 / 進路説明会

対面型情報収集活動（中国）

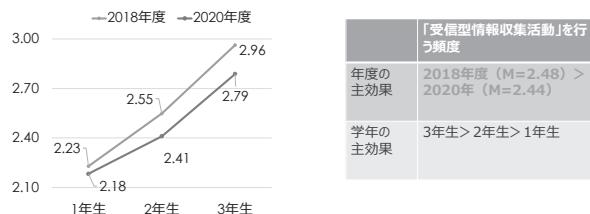


オープンキャンパス / 大学先生による講演 / 卒業生による講演 / キャンパス見学 / 進路説明会

19

20

受信型情報収集活動（日本）



大学ホームページ / インターネット / 大学のパンフレット / 雑誌や本

受信型情報収集活動（中国）



大学ホームページ / インターネット / 大学のパンフレット / 雑誌や本

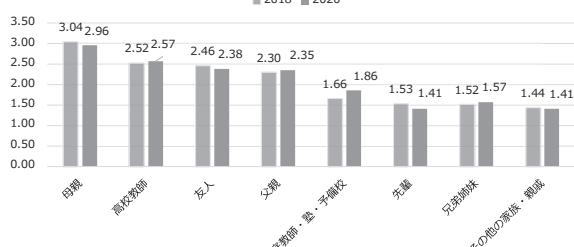
21

22

相談相手（日本）

調査対象となる1年間
得点が高いほど、相談頻度が高い傾向にあると解釈される。

■ 2018 ■ 2020

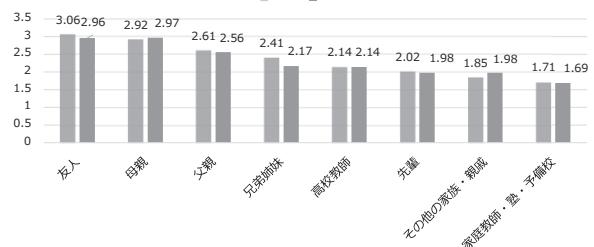


23

相談相手（中国）

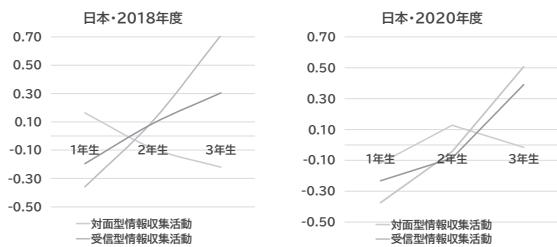
得点が高いほど、相談頻度が高い傾向にあると解釈される。

■ 2018 ■ 2020



24

「高校生の大学進学における進路決定プロセス」



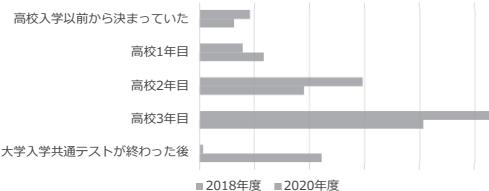
「高校生の大学進学における進路決定プロセス」



25

26

志望大学の決定時期（日本）



- COVID-19の影響で、日本高校生の志望大学の決定時期が遅くなる傾向が見られた。

27

ご清聴ありがとうございました

- COVID-19は教育環境を大きく変化させた
- 大学選択行動への影響は日中で共通点がある
- 一方、それぞれの制度や状況に応じて異なる形で現れた。

28

話題提供4：地方公立高校の現場から見たコロナ禍の影響

——生徒と保護者が受けた心理的制限——

新潟県立新潟高等学校

山崎 健太 教諭

三戸望特任教授（司会）

続きまして、「地方公立高校の現場から見たコロナ禍の影響——生徒と保護者が受けた心理的制限——」と題して、新潟県立新潟高等学校の山崎健太先生、よろしくお願ひいたします。

山崎健太教諭

新潟高校の山崎です。よろしくお願ひします。

地方という形でタイトル出しましたが、各地方ごとに状況は様々ですので、こういった事例もあったのだなというふうにお聞きいただければと思います。

まず最初に、コロナの影響について、特に入試についてというところですが、令和3年度入試に関してはこれまで何回か話が出ていますが、大学入学共通テストが絡んだ年なので、コロナだけの影響がこうだったということを独立して考えることは非常に難しいと思います。ですので、ある程度高校生の受験というところと、学校生活というところに分けながら、ここもきっちりと分けることはできないのですが、話を進めさせていただきたいと思います。

多くの高校では、生徒が卒業するときに3年間の振り返りに関するアンケート調査を実施していると思います。コロナに特化した項目を立てた学校は少ないと思いますが、私が勤めた長岡高校では、自由記述の中に、「コロナに罹患しないように注意しすぎて精神的に追い込まれた」等のコメントがありまし

た。これらを見ると、結構強烈な影響があつたのだろうというふうに思えるのですが、言葉だけではなかなか分からぬ部分があるので、主観的にならないように見ていくことがとても大事になります。そういうことを含めまして、高校の先生方は結構ご存じのものが多いと思うのですが、全国的な受験生のデータも示しながら進めさせていただきます。



合格実績とか進学者数というものは高校のホームページやパンフレット等の資料で公表されています。ただ、その高校の生徒たちが大学を何校受験したか、または、いくつ出願をしたかということは公表されません。ですから、これらは投影のみとさせていただきます。R 2という部分は、私が3年生の担任をした時です。この数字は入試年度を示しています。R 3は春に一斉休校が入った時に3年生だった学年です。これらを見ると、2年前までいた長岡高校や現在勤めている新潟高校では、コロナというものが受験行動に

直接的な影響を与えたのかというと、ほとんど影響はなかったということが言えます。地域のトップ校という言い方をすると語弊あるかもしれません、この学校の生徒たちは、入学の時点で既にある程度進学意識を明白に持っています。長岡高校の場合は、東京大学に進学する生徒がいますし、医学科にも一定数進学しています。志望先として一番多いのは地元新潟大学ですが、二番目に多いのは東北大学です。これらはコロナ前後で変わっていません。ですので、こういった現状を理解して、この高校に進学すれば、卒業後の進路先は今ほどお伝えしたような大学になるのだろうということを考えたうえで、生徒は入学してきています。新潟高校も同様です。さらに、高校では、3年生だけでなく1年生、2年生の時にもそれぞれ進路希望調査というものを行っています。コロナ禍の前後で、どのような動向の変化があったのかを確認すると、これも全く変化がありませんでした。コロナ禍であっても、自分自身の進学にしっかりと向き合っていたことが分かります。

ただ、そうすると、ここで話が終わってしまうので、全国的なデータを見てきたいと思います。受験人口と大学入学定員に関してですが、このデータは駿台予備学校さんから頂いたものになります。生徒の数は減っています。しかし、大学全体の入学定員は増えていることが分かります。こういったところが生徒の受験行動に結構影響を及ぼしています。私立大学では、経営の観点からも学生の獲得ということが重要であると思いますので、入試の動き出しがが早いなというふうに高校側は考えています。

次の資料に移ります。浪人生と現役生の受験生の数の推移になります。教育課程が変わったりすると生徒は浪人することを嫌いますので、左から3つ目のR3年度入試では、共通テスト元年を迎えるにあたり浪人生の数が減っています。一番右側も新カリの影響

で浪人の数が減っています。全国的に浪人生は毎年ある程度います。ただR4、5、6というところは、入試制度が変わった時に浪人したくないという意識と同じぐらいの影響が出ているので、この3年間は、コロナの影響というものが現役志向を強める方向にはたらいたのだろうと感じます。

続けて、国公立大学の志願者数推移を見ていきます。子どもの数は減っています。一番左のところに矢印を入れました。R2年度の入試は、前年度よりもセンター試験の平均点が下がった年と言われています。平均点が下がれば、自己採点の結果、志望する国公立大学に必要な点数に届かなかった、または合格の可能性がある大学がないと判断した生徒は、一般入試の出願を諦めるということにつながります。このような理由で志願者が減った部分もあると思います。R2からR6年度の間に、全国で見ると大体6万人ぐらいの受験者が減っています。このように18歳人口の減少で受験生は減っていますが、国公立大学に関しては志願者数に変化がないということが分かると思います。

続きまして、私立大学の一般選抜になります。R2からR3年に矢印を入れましたが、ここは大きく志願者が減っています。一斉休校になった時に3年生だった生徒たちの受験です。志願者の延べ数は、前年度と比べて大体50万人ぐらい減っているというような状況です。では、高校生みんなが受験する学校の数を減らしたのかというと、そればかりでもないようです。確かに志願者数は減っているのですが、この部分はいろんな複合要素が含まれていると思います。

こちらの資料をご覧ください。私が去年1年間勤めていた学校のデータになります。これはホームページに出ている進学実績をまとめたものになります。一番左のH26からR2までの平均と、R3年度を比較します。一斉休校があった時の3年生たちについて

は、県外の大学に進学した生徒数が多少減っています。減っていますが、高校現場としては、高校3年生になってから進路先を決めましょう、考えましょうという指導はしていません。大体2年生ぐらいの時には自分の進路先を具体的に考えさせるということをやっています。つまり2年生の時ということは、一斉休校になる前のことです。生徒たちは、私はこういう進路先がいいということを一斉休校になる前に考えていますから、この経験が受験期における受験プランの決定に影響を及ぼしています。それに対してR5からR6年度の変化に注目してください。コロナは2類が終わり、R6年入試ではすでに5類に変わっています。制限がなくなったような状況ですが、県外の大学に進学した生徒が減少しています。これもやはり、その前の年度のところで生徒たちがどのような学校生活を送り、進路に対してどのように考えたのかということが影響として表れています。ですので、その後のR7年度入試に関してはある程度県外への進学も増えましたが、それでもコロナ禍前の水準までは戻っていないという状況となっています。これについてはまた後程少し触れます。

次に選抜方法ごとの入学者数を見ていきます。まずは国立大と公立大を確認します。R2からR3年の入試のところで、国立は総合型、公立の方は学校推薦型での入学者がちょっと増えています。この微増について、大したことないなと思うかもしれません、この生徒の分だけ私立の一般入試を受ける数が減りますので、先ほどお示ししたR3の私立大学一般選抜志願者数についてある程度の影響を与えていると思います。

入学者の種別については私立大学の方がもっと顕著ですね。総合型選抜がR2からR6年にかけてぐっと上がっています。総合型選抜については、併願可能な場合もありますが、早期の入試であるため、受験生の多くは

専願に近い認識でいます。総合型選抜で入学手続きをした生徒は一般選抜を受験しません。そうすれば当然、一般入試の志願者数は減ります。ですので、途中でお示しした、私立大の志願者が50万人ぐらい減ったということについては、コロナとこの年内入試の動きとの複合型の影響があったというふうに考えることができます。

あと、これは倉元先生の話でもありましたが、地方の生徒は入試の変化を嫌います。コロナ禍により大会とか検定について中止が相次ぎました。出願要件にあたる大会などに参加ができなかった場合、生徒は総合型や学校推薦型選抜に出願できなくなりますが、これについて、出願の妨げにならないように配慮しようと5月14日に文科省が発表しました。これは生徒にとってはとてもメリットですよね。やっていなくても出願できるというラッキーな話なのですが、これを上回る逆風がありました。これまで馴染みのないオンライン面接というものがどうやら必要になると分かったのです。これまでなかったもの、なんだかよく分からないものを生徒たちはとっても嫌がったり怖がったりします。文科省や大学側は親切丁寧にこれらの通知などを出してくれたと思いますが、これは生徒や保護者からすれば、よく分からないものには手を出したくないということで、最初の年はオンライン面接についてはある程度敬遠されたと思います。その翌年になると、こういった新しいことが周知・浸透されてきますので心理的なハードルは下がったと思います。入試の制度の変更というものは、例え科目が減ったとしても生徒、保護者、さらに教員もそうですが、結構嫌がります。

保護者に関しては、厳しい経済状況にみまわれていた家庭も多くありました。私が去年勤めていた学校がある柏崎市は、製造業が多い地域で、結構直撃を受けていたと言えます。近年、高校は奨学金については非常に丁寧に

告知しています。様々な補助や支援制度がありますので、学校として保護者に対してメール配信やホームページに掲載したりしながら各種奨学金の情報を発信しています。私は今、学校で奨学金担当をしていますが、春から夏休み前までは本当に生徒からも保護者からも問い合わせが多数寄せられています。このように各学校で対応していますが、お金に関しては苦しい部分はあるかと思いますが、お金の面だけで進学先を考えていくような状況はある程度回避できていると思います。ただ、中堅校とか多様校では、なるべくコンパクトな受験にしたいという保護者の意向がある程度感じられたと思います。

実は本日、私がR2年度入試のときに担任をした教え子の保護者の方がわざわざ新潟県から来て、この会に参加してくださっています。感謝申し上げます。保護者や生徒がどのような制限を受けたのかについては、ぜひこの方に伺ってみるとよいと思います。当時の教え子たちは、一斉休校となったその年に進学しました。大学名は言いませんが、関東の私立大学に指定校推薦で進学した生徒の話をご紹介します。その生徒は大学生になりましたが、大学1年、2年、3年の時、講義はすべてオンライン授業でした。そのため、ずっと新潟県内の実家にいました。しかしアパート代は払っていました。このようなことは、高校では先輩から後輩へとか、部活をやっていると、先輩保護者から後輩保護者へと情報がある程度伝わっていきます。このような状況で過ごし、何のためにわざわざ東京の大学に進学したのだろうかと思うこともあったようです。結構地方の子どもたちは東京が好きなようです。千葉とかも好きなようです。コロナ禍で、画面にある不等号にちょっとイコールが入るぐらいに心理的な変化が起こりました。こういう状況だったらそんなに遠くの大学に行かなくてもいいのではないかと生徒も親もある程度感じたのかもし

れません。進路について特にこだわりを持たない生徒に関してはこういう傾向がよりあてはまったかと思います。

あと、オープンキャンパスについてです。地方にいるとなかなかリアルな情報源が少ないので、高校としては、1年、2年のうちに大学のオープンキャンパスに参加しましょうという指導を行っています。ただ、3年生の夏になっていろんなことを悩んで迷い、駆け込みでオープンキャンパスに行くということも、多々とは言いませんがある程度あります。進路選択に関してオープンキャンパスに行けないということになると、結局生徒は、近場にある大学とか、名前を知っている大学というものを志願先の候補にしていきます。実際に自分の目で見て、行きたい大学を探すということができないため、早く受験が終わるというところに気持ちをシフトするような傾向もちょっとあったかなというふうに思います。

あと、今はもうコロナ禍は終わっていますが、この影響や制限が今も続いていると思われることに触れていきます。中堅校に多いかもしれません。今15歳である中学3年生の子どもたちの進路意識というものは、今、自分が進学したいと思う高校の学校ホームページだったり、その学校のパンフレットだったり、学校説明会などで形成されます。これはどういうことかと考えることが必要です。中学生が見ている情報は、今19歳ぐらいの子どもたちが受験を終えた結果を見ているのです。今の中学校3年生とか高校1年生は、最もコロナ禍で制限をされてコンパクトな受験をしてきた高校生たちの情報を見ています。つまり、中学生が、自分はこの高校に行くと卒業したらこういった進路先になるのかなと感じ取る情報は、コロナ禍で歪んでしまっていたものを見ているかもしれないのです。私が去年勤めていた学校は柏崎市にあります。隣に長岡市があるのですが、長岡

には日赤の看護学校があります。ここは選抜性が高い専門学校です。柏崎市で勤めていた学校からも毎年受験して進学する生徒がいました。ですが、この数年間でそれがなくなりました。柏崎市内にも看護の専門学校があります。コロナ禍の影響で、地元の専門学校に行く生徒が増え、時間が経過すると、それが恒常化しているのです。このように、中堅校に関しては進学に関しての行動範囲が狭くなっている場面もあり、先輩たちも進学していないとなると、前例がないということに置き換わり、進学に対する閉鎖的な影響が新たに定着して、皆が内向きになる可能性があると強い危機感を感じています。

また、部活を引退した3年生は、放課後学校に残って学習に励んでいる生徒も一定數います。コロナ禍では、授業が終わると、生徒には早く帰りなさいと指導してきました。そうすると1,2年生は、先輩達が進路実現に向けて頑張っている姿を見ることができませんでした。これに関しては、当時の学年主任たちは後輩への影響が大きかったと言っていました。あと、出席率について97.5パーセントという数字を紹介します。40人のクラスで毎日一人が休むと出席率がこの値になります。39÷40です。この出席率が、高校現場の先生方は分かると思いますが極めて低い数字です。コロナ禍前の出席率は、学年全体で99パーセントぐらいでした。私が長岡高校で3学年主任をしたのはちょうどコロナが5類に移った時です。コロナ禍が終わりを告げたときの3年生なのですが、その年の3年生最後の出席率は97パーセント代でした。これは非常に低い出席率と捉えられてしまうかもしれません。しかし、その前の年まではコロナ禍の影響で、ちょっとした体調不良でも全て出席停止扱いとしていました。風邪症状があれば登校しないでくださいと学校側は指導してきました。コロナが2類の時の3年生の出席率が97パーセントぐ

らいでしたので、当時私が学年主任をした時の3学年団は相当クラス運営や個々の生徒への対応などを丁寧に頑張ってくれたと思っていますし、感謝しています。他校の様子を聞いても、コロナ禍を経験したことにより、ちょっとしたことで学校を休もうとする生徒や、休ませようとする保護者の気質が形成されているようです。生徒も親もここに一番の影響があったのだろうと思います。欠席が多くなる傾向は今後もしばらく継続していくのであろうと予想されますし、これについて改善するための努力が多方面に求められると感じています。

こういう時代で育ってきた生徒たちが今大学生になっていますが、結果として、学習や研究に対して、粘り強さに欠けるのではと思って心配しています。ちょっとしたことで学校を休むという生徒たちがいます。教室の中では欠席者の机があると、連鎖して、他の生徒についても欠席の数が増えます。こういうことが、粘り強さとか、いろんなところにちょっとずつ影響を及ぼしているというふうに思います。

以上で報告を終わります。ありがとうございました。

三戸望特任教授（司会）

山崎先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上の入力をお願いいたします。

ここで休憩を取らせていただきます。再開は12時といたします。なお、話題提供者の4名の先生方への質問等の受付は11時55分で締め切らせていただきます。来場参加の皆様は、お手元のQRコードから、オンライン参加の皆様はオンライン参加者用ページより、あるいはスクリーンに表示されているQRコードからWEB上での入力をお願いいたします。それでは休憩に入ります。

第42回東北大学高等教育フォーラム

地方公立高校の現場から見たコロナ禍の影響 — 生徒と保護者が受けた心理的制限 —

新潟県立新潟高等学校
山崎 健太

前提として



様々な要因が複雑に絡み合っているので
コロナによる影響だけ
を考えることは困難

⇒ 大学受験を取り巻く状況
を確認したうえで「受験」と
「学校生活」にある程度
分けて考えていく

1

2

<コロナ禍を過ごした受験生の声>

受験後のアンケートより

オンラインの学習環境に慣れるのに時間がかかった
コロナに罹患しないように注意し過ぎて精神的に
追い込まれた

マスク着用の義務が息苦しく、集中できず辛かった
コロナのせいで国公立個別試験がなくなったらどう
しようと不安だった

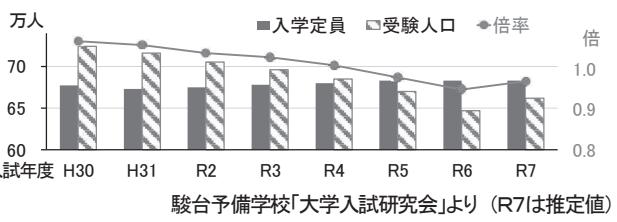
⇒ 主観論にならないようにデータを確認していく

3

<受験人口と大学入学定員推移>

受験人口は減少傾向、入学定員は増加傾向

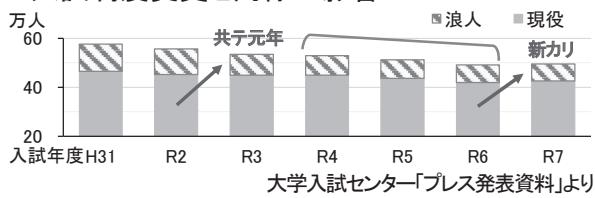
⇒ 私大の年内入試が増加傾向



4

<共通テスト・センター試験 確定志願者数推移>

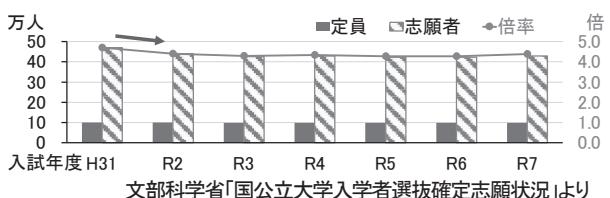
R3の浪人生は共テへの移行を嫌ったため減少
R4～6はコロナの影響で現役志向が高まる
⇒ 入試制度変更と同様の影響



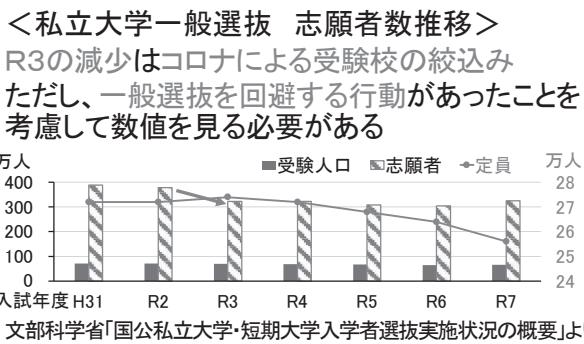
5

<国公立大学一般選抜 確定志願者数推移>

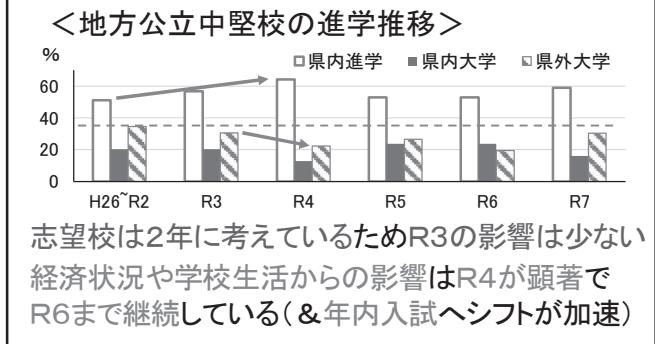
R2はセ試が文理共に平均点が前年度の-20点
R3以降は受験人口等を考慮しても国公立志願者
数は一定の水準を保っている(難関は一時減少)



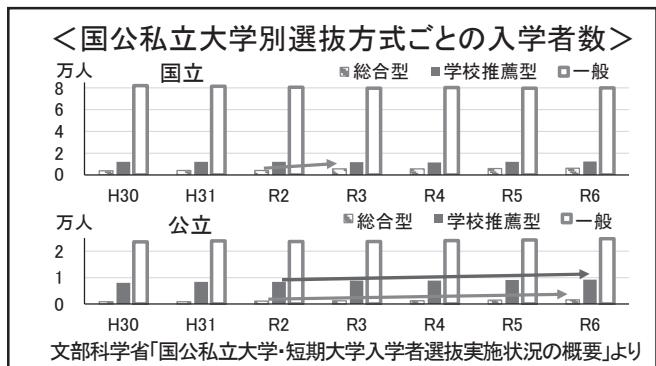
6



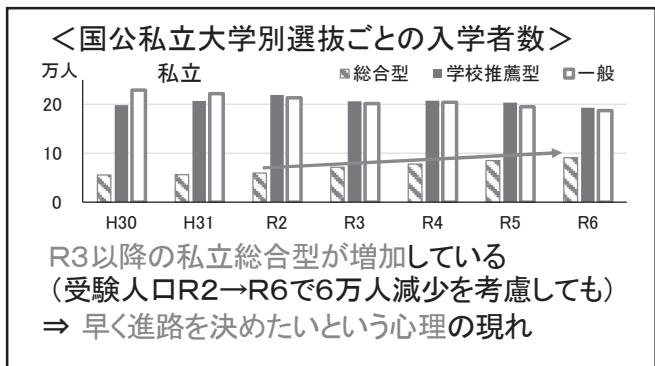
7



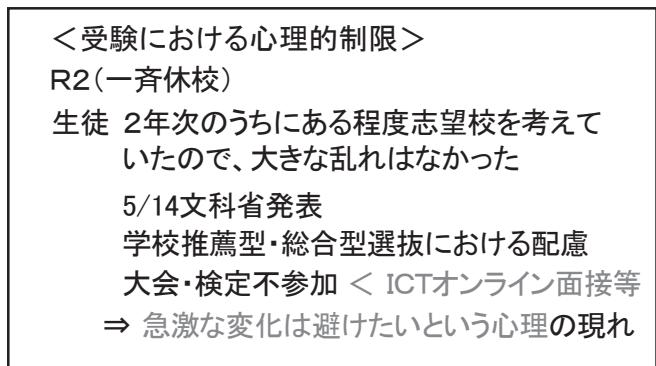
8



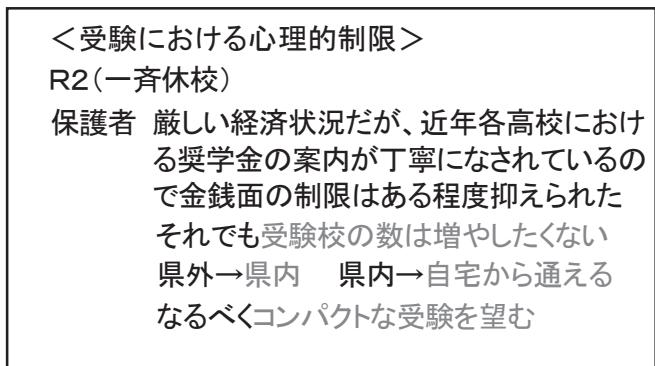
9



10



11



12

<受験における心理的制限>

R2(一斉休校)

生徒&保護者

一人暮らしでコロナに感染したらという不安
春に大学に進学した先輩からの情報として、
県外の大学に進学したが大学へは通えず
授業は実家でオンラインという情報
関東>地元の大学 → 関東≤地元の大学

13

<受験における心理的制限>

R3(2年目)

生徒 オープンキャンパスの参加経験が薄い

⇒ 地元または知名度のある大学へ偏る
日常生活の制限が継続
⇒ 行きたい大学≤受験が早く終わる
学校推薦型・総合型選抜の希望者増加
(オンライン面接などの情報が浸透)

14

<受験における心理的制限>

R7(5類以降2年目)

中堅校に見られる進路意識

R7受験生 → R5入学生

高校卒業時の進路イメージは
中学3年に形成され始めている
⇒ R4、3の先輩の進学実績

脱コロナ後も影響は恒久化する可能性がある

15

<学校生活が受験に与えた心理的制限>

生徒

3年生は放課後に早く帰宅させる
(放課後の自習は原則禁止)

⇒ 1、2年生は受験に向けて頑張る先輩達の
姿を見ることができなかった
最後まで頑張るという心理形成に影響があつた
行事や大会の制限も重なり、みんなで頑張る、
受験は団体戦という意識が崩された

16

<学校生活が受験に与えた心理的制限>

生徒&保護者

コロナ禍では風邪症状の場合は登校しないよう
に指導(公欠扱い)

⇒ 5類移行後も、ちょっとした体調不良で欠席
する(させる)状況が散見され続けている

3年間体に浸み込んでしまった、無理をしない
意識は、しばらく継続することが予想される

17

ご清聴、ありがとうございました

18

第2部 討議

討議——パネルディスカッション——



安成英樹教授（討議司会）

それでは討論の方に入らせていただきます。司会を担当いたします。お茶の水女子大学の安成と申します。

秦野進一特任教授（討議司会）

東北大学の秦野と申します。よろしくお願ひいたします。

安成英樹教授（討議司会）

ご承知の通り、時間がどんどん押しておりますので、時間の限り議論を深めたいと思います。

まず最初に、4人の方のご報告を受けまして、指定討論者の苅谷剛彦先生からコメントをいただきたいと思います。苅谷先生は昨日も登壇していただきましたけれども、上智大学の特任教授で、オックスフォード大学名誉教授、東京大学名誉教授でいらっしゃいます。それでは苅谷先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

苅谷剛彦特任教授・名誉教授

時間が押しているので、手短にコメントしたいと思います。それぞれとても興味深いご発表だったんですが、個別に一人ずつ質問すると、時間が足りなくなるので、なるべく皆さんに関係する論点を私なりに抽出して、それについて

コメントというか、この後の討議の中で使っていただける話題提供をしたいと思います。



コロナのお話伺っていて、私自分がその時はイギリスにいたことを思い出しました。当然日本よりかなり厳しい政府の規制がありました。私から見ると日本の場合はほとんど自粛で問題を解決したんだと思います。つまり法的な強制力を持ったロックダウンではなかった。だけど、結果的にはその自粛による相互監視がうまくいって、感染者数や人口当たりの死亡者数はイギリスと比べ桁違いに少ない状態だったと思います。

このような対応の違いは、おそらくコロナ全体に対する「責任の主体」は何なのかなっていう

問題と関係するはずです。今回のシンポジウムのテーマである大学入試にも関わるでしょう。それでは、どういうアクターが責任の主体だったのか。その答えは、当然入試制度の仕組みにもよるし、おそらくはコロナに対する責任を誰が主体として受け持っているかということとも関係するので、それほど自明ではないのかもしれません。

倉元先生のご発表のなかで、ヨーロッパ型、アメリカ型、日本型、東アジア型というお話がありました。そこにおいて国や政府の責任というか、姿勢の違いは結構大きかったと思うのです。一方では、コロナに対して法的強制力を持ってそれを防ごうとする場合、それだけ国の権限が強いわけだから、その分、国の責任は明確になります。それに対し、自粛というのはやんわりとした、昨日の私の話で言えば曖昧さに満ちたやり方なので、国の責任については少しほんやりとしたものになります。それが入試制度になると、これまた違ってくる。責任の主体は、入試センター、つまり国の準機関なんですかね、独立行政法人として、国に準ずる機関なので、倉元先生の話にあったように、官邸からの影響が強かった。その点では、国の機関がそこで責任主体になったとみてよい。

それに対し、イギリスでは、A レベルの試験が大学入試の重要な一部で、いくつもの Exam Boards がって、それが実施するしくみですから、かなり政府から独立している。ただ、全体としての決定がどこで行われたかというと、イギリスの場合は私は詳しくはわかりません。アメリカだとさらに政府から独立してゐるわけです。州立大学の場合は州政府との関係になるかもしれませんけども。SAT や ACT は政府から独立している。先ほど予算カットによる影響の話がありましたけど、おそらくそれはかなり間接的な影響力で、影響の出方は責任主体によって違ってくるというような展開になるのでしょうか。おそらく中国が一番、政府機関の関与も権限も強い。ただし、政府の責任があったと

しても、それを問う民主主義の仕組みが欠如している。それから、当然学校の責任もある。つまり、どういうアクターが責任主体として、このコロナ禍でどう行動したかということをめぐって、それぞれご発表の中で関係する点をお話をいただければいいのかなというのが 1 点目です。

それから 2 点目は、私はイギリスについて、日本のコロナ禍のことについて、実は一冊本を書いたんですけども、その時に「安全安心」という言葉が日本でそのころ盛んに使われていたのを覚えています。安全というのは客観的な基準で測れます。ところが、安心というのは極めて主観的なので、人々が客観的に安全だと言われても、それを安心と受け取るかどうかにはかなりの温度差がある。おそらく文化の違いも出るので、安心の閾値が日本の場合はかなり高い、つまり安心するための敷居が高い。要するに余程の客観的な安全を確保することで、人びとの安心をえる。だから、安全基準よりもはるかに高い閾値を求めたといえるのではないか。

日本の場合、この点が、多分入試にも反映するんだと思うんです。人々が安心とか安全とかをどう受け止めるかという問題です。最後に高校の生徒さんたちの主観性の話が出てきたけど、そういう意識の問題を、どこかで議論できたらいいと思います。

それと関係しますが、最後に、昨日私が話したことと、関連付けたコメントですが、コロナ禍は未曾有な不透明な時代への対応を迫られた事態でした。昨日の講演の副題が、まさに不透明な時代への対応の不透明さということだったんですが、それでは、コロナを体験したことと、我々日本人の、あるいは、いくつかのアクターごと、責任主体ごとに、日本で、あるいは中国でもいいんですけど、この不透明な時代への対応はできたのか。対応する際の資質能力は何だったのか。それは入試でこれまで評価できていたのか。もし入試が今まで批判されたように、そういうものがわかつていなかつたら、

それでは今回の経験を通じて、そういう資質や能力のない人たちが多くたとすれば、コロナ禍への対応はなんだったのか。私は対応力がなかったとは思わないのですが、この辺、変化球の質問かもしませんが、不透明な時代への対応という事態として、コロナ禍を捉えたときに、皆さんがテーマとした、私自身「主体」という言葉は曖昧すぎて使いたくはないんですが、責任の担い手たちは、コロナ禍に対してどういう資質や能力を発揮したのか。それは入試測定できるのか。ちょっと抽象的になりますが、これらが一応私からの話題提供というところでしょうか。

安成英樹教授（討議司会）

ありがとうございました。続きまして、フロアから質問をいただいておりますので、質疑に移りたいと思います。

秦野進一特任教授（討議司会）

はい。たくさんのご質問をいただきましたが、時間の関係で絞らせていただきます。申し訳ございません。

まず、林先生に調査対象についての簡単な質問だと思います。調査対象の高校は公立の高校という認識でよろしいですか？都市や地方などの偏りはどの程度ありますか？というご質問です。よろしくお願ひします。

林如玉助教

ご質問ありがとうございます。調査対象には公立高校だけでなく私立高校も含まれています。日本では全国から都市部・郡部双方の学校を選定しており、特定地域に偏らない形で全体的な傾向を把握できるサンプルになっていると考えています。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）

ありがとうございました。

次、山崎先生。最後に、コロナ禍で過ごした学生が粘り弱くなっているというお話をありました。大学進学後の退学者や留年、成績不振といった数は増えている体感はありますか？首都圏の大学で指定校推薦入学者の退学増加が話題に上がっております。とのことです。よろしくお願ひします。



山崎健太教諭

はい。申し訳ございませんが、大学進学後のことに関しては大学の先生方に聞いていただいた方がよいのかと思います。

いただいた論点からずれてしまうのですが、一つお話をさせて頂きます。学校現場としてのコロナによる影響は、受験だけではなく、急激なオンライン化が進んだということもあります。この急激なオンライン化で、新潟県の場合、高校生一人に一台タブレットを貸与できる体制が整いました。この対応が中学校、小学校にも行き届いているわけですが、生徒の学力というものは、このICT機器だけで伸びていくものではないと思うのです。例えば、目で見て情報を捉えることが得意な生徒はいます。耳で情報を獲得することが得意な生徒もいます。繰り返し書くことなどの反復練習による経験で知識を獲得することが得意な生徒もいます。個々の生徒によって、知識や技術の獲得方法は異なるのです。今の急激なICT化などによって、

繰り返す、反復するということが小中高とも大幅に減っていると思います。部活動では何度も基本的なことを反復練習するのに、なんで学習は反復練習させないようになったのだろうかと疑問を感じます。高校現場において私が思うことは、現在生徒が学力を獲得するために必要な教育のバランスが崩れてしまっているということです。

安成英樹教授（討議司会）

はい、ありがとうございました。

次に、寺尾先生に CBT の導入ということでご質問がありました。CBT は、今後共通テスト等での導入が進むのだろうか、というご質問です。

この問題はおそらく他の問題全てにつながってくるところがあると思っておりまして、コロナがある程度収束した段階で、元に戻った側面と、収束後も不可逆的に進行していった側面、その両面があると思います。CBT については今後どちらの方向に進むのか、お話しいただければと思います。

また、林先生には、CBT の問題は中国ではどういう状況であるのか、それから山崎先生には高校側からして、CBT 導入への動きをどう捉えておられるのか、あるいは、どういう問題が生じるだろうかという点でコメントをいただきたいと思います。

では、まず寺尾先生からお願ひいたします。

寺尾尚大准教授

ご質問ありがとうございます。CBT に関して、私がかねてから申し上げている立場ですけれども、共通テストのパラメーターのままで一月中旬・50 万人一斉という状態の中で一の CBT というのは一番遠いと申し上げています。センターが、今、サポートしたいと思っているのは、個別大学の総合型選抜や学校推薦型選抜、あるいは留学生選抜でのかなり小さい単位での入試のサポート、実施面でのサポートですの

で、まず冒頭のご質問に対してはそのようにお答えしたいと思います。

CBT に関して、確かにご質問の元に戻ったところ、不可逆のものという点に関連するかもしれません、紙での学力試験をやめて CBT になったところで、また紙に戻すという選択もされている大学さんもありますので、特に元に戻れない選択肢ではないと認識しています。ひとまず以上です。

林如玉助教

ご質問ありがとうございます。中国における CBT の状況ですが、まずコロナ前については、主要な学科試験を含め、筆記試験が主流でした。ただし、一部の資格試験や語学試験、例えば皆さんもご存じの TOEFL などでは、すでに CBT 形式が導入されています。

コロナ禍での対応については、先ほど紹介したように、高考のような大規模な全国試験では慎重な姿勢が取られ、CBT の方式はほとんど採用されていませんでした。一方で、芸術系の入試や大学院入試の一部では、CBT を導入したケースも見られます。

まとめますと、一部の試験では CBT が活用されているものの、大規模な全国試験では従来の対面式が標準的な方法となっており、公平性の観点からこの方式が維持されています。CBT については、一部の試験で導入例はあるものの、全国規模の試験では慎重な検討が続いているです。

山崎健太教諭

高校側としましては、通信環境に課題があると感じている先生方が多いのではないかと思います。

私が 2 年前まで勤めていた長岡高校は 1 学年 8 クラスという規模が大きい学校で、学校中に wi-fi が入っています。体育館にも入っています。ただ、十分な通信環境があるとは言えません。1 つの学年が全て同時にオンライン作業

を行おうとすると回線がパンクしてしまうのです。ですので、各学校に通信環境はあるのですが、今の状況では、生徒全員が安心して同時に作業をすることは難しいのではないかなと思います。スムーズなオンライン環境が整っている県や学校もあると思いますが、全国一斉という条件ではオンラインの CBT 実施はまだ難しいです。少し話がずれるのですが、共通テストが終わりますと、高校では翌日に自己採点を実施します。自己採点も最近オンライン化してきたようで、これまで用紙に記入したものを持ち帰っていましたが、オンラインで個々の生徒が自己採点結果を送信するとなった時に、学校内の環境で対応して期限内に完了できるのかということを、高校の先生方は心配していると思います。ですので、全国全ての学校におけるオンライン環境がもっとスムーズになればよいのですが、現状からすると CBT を実施した場合は確実に混乱が起こるというのが私の認識です。



安成英樹教授（討議司会）

ありがとうございました。それでは、倉元先生からも CBT の問題を広げていただきたいと思います。

倉元直樹教授

あの、CBT 関連ですね。実は、ひとつ、コロ

ナ禍を経て実感したことは、日本が極めてデジタル後進国だってことですよね。林先生のご発表の中で、中国がスムーズにコロナ禍に対応できたのは、実は、もうオンライン授業が既に導入されていて、中国の高校生は寮生活ですから、寮じゃなくて自宅に帰った後でも、オンラインでスムーズに授業ができたと伺っています。例えば、あの、私、直近、イギリスに調査に行ってきましたが、ほぼ、現金を使う場面がないんですよね。まあ、ロンドン中心だったからということもあるって、田舎だと少しあるかもしれないんですけども。そういうところが、多分、あの、日本は世界の中では遅れてるんだろうなと思います。

そういうことは、多分、CBT を議論することに関しても関連してくると思うのですが、すごく大事なことは、なぜ入試を変えられないかということです。それは私も話の中で強調したつもりですが、我々の中で、特に入試ということに関していえば、受験生がどういう準備をしてくるかをすごく大切にしているからだと思いますよ。ということは、「こういう素晴らしい方法がありますので、来年度からやります。」では実現できないですよ。相当の助走期間が必要だし、それに関しては、まさしくいろんなことを合意してかないといけない。なかなか、それが、今、欧米で行われている CBT とは遠いだろうなということがあります。

もう一つですね、あの、実は苅谷先生から投げかけられたことに誰もまだ答えてないので、「責任主体」ということで、もう 1 回、考えてみました。あ、ごめんなさい、短く話します。あの、日本は大学の入学者は大学が決めるのです。そういう仕組みです。だから、最終的な責任主体というのは、大学になる。国は「ガイドライン」を出すんですね。これが、平時、我々がいろいろ問題を感じているのは、うまく行っていないところがあります。それは、何かと言うと、まあ、高校も含めて現場の実情をお互いに知らない。そこからカオス状態になっていく、

ということがあるのですが、コロナに関して言うと、僕は非常にうまくいったんじゃないかなと思います。責任の受け止めがどうか分からぬのですが、あの、多分、国がこういうふうに規制します、こう決めます、ではなかつたはずなんです。けれども、ガイドラインをバシッと示してくれたことによって大学入試センターからのガイドラインがあつて、個別の大学が、これが現実的にこれできるかどうか、という議論をして、我々の中でどうするかということを具体的に決める判断基準になったわけです。

だから、この仕組みをこう変えたら絶対うまくなるというのはなくて、今の日本の意思決定なり、あの責任のあり方の中で何ができるかということを考えていきたいと思っています。

ごめんなさい、ちょっと長くなりました。

安成英樹教授（討議司会）

いえいえ、大事なポイントだと思います。

さて、討論の時間があと5分ということになってしまいました。最後に、報告者のみなさまにご報告で言い残したこと、それから、苅谷先生の非常に大きな問い合わせを受けて・・・これは答えるのがすごい大変だと思うのですけども・・・何かコメントなどがありましたら、最後に一言いただきたいと思っております。それでは山崎先生からお願ひいたします。

山崎健太教諭

責任の主体ですが、学校現場でいうと校長だと思います。ただ、その校長がどのような人かということで多少影響が出てくると思います。また、その学校が持っている気質や文化というのも影響すると思います。ですが、正論を言えば管理職である校長だと思います。

ただ、校長が全て責任を負えればいいとか、校長に責任を押し付けるかということではなく、学校という組織体がいかに力を合わせて子どもたちに向き合っていくかということ、そしてお互いをいかに支え合っていこうとするかが

とても大事なことだと思います。

最後の一言ですが、今回は、これだけみんながコロナで大変だったぞ、ということがテーマだったと思いますが、高校の一教員として生徒たちの受験を見届ける中で思ったことをお伝えします。当時、高校は、受験から帰ってきて登校した生徒たちに対して、この生徒たちを隔離して、他の生徒たちと接触させないようにするという、非常に、本当に心苦しいことをやってきました。みんなで最後まで頑張ろうというのに、このような対応をすることは、本当に辛かったです。ですが、受験に行って帰ってきた生徒たちからは、受験会場が混乱して大変だったという声は聞こえませんでした。大学の先生方が本当に苦心して受験に対応してくださいましたということについて、この場をお借りして改めて感謝を申し上げたいと思います。

林如玉助教

ご質問ありがとうございます。

2点ほど補足してお答えしたいと思います。

まず1点目ですが、先ほどのCBTに関する回答は主に「試験」の観点からお話ししました。ただし、倉元先生のお話にあった「デジタル化」というテーマとは少し観点が異なります。中国では、コロナ前からすでに国の戦略として教育分野のデジタル化が一定程度進んでおり、教育用のオンライン配信やMOOCの活用も広がっていました。こうした基盤の上にコロナが起きたことで、デジタル化がさらに加速した、という背景があります。その結果、コロナ期間中には、全国的なオンライン授業への移行も比較的スムーズに行われたという状況です。

次に2点目です。苅谷先生のご質問に対する回答ですが、中国の責任主体は日本とは体制が異なり、基本的にはトップダウンの仕組みになっていると考えています。まず国レベルの教育部（日本の文部科学省に相当）が全体的なガイドラインを定め、加えて国の中政策決定機関である委員会や国家衛生健康委員会が政策決定を

行います。そのうえで、省や地方レベルの教育庁・教育局が国のガイドラインを踏まえつつ、それぞれの地域状況に応じて一定程度調整します。さらに、学校レベルでは、高校など各校がガイドラインに基づいて具体的な運営を行う、という三層構造になっています。

監督については、私自身まだ詳しく把握しきれていないところもありますが、政府内部の監督体制に加えて、外部のメディアなどが結果的に監督の役割を果たすこともあります、複数の手段が併存していると理解しています。以上となります。

寺尾尚大准教授

ありがとうございます。

苅谷先生がご提示の論点「責任主体」という話に絡めながら、一言お話ししたいと思います。大学入試センターは、共通テストを実施するという1年に1回の試験ができるだけ安定的に回す事業をしているわけですけれども、国や独法である大学入試センターとしてガイドラインを示すっていう頭と少し違うのかなという印象がありまして、緊急時、あるいはその平時にも、みんなが困らないガイドラインを作ることの難しさは、このコロナ禍を通じて感じたところです。

いろんなステークホルダーの方がいる中で、できるだけみんなが動きやすいガイドラインを作ること自体が結構難しいことです。日頃、私は大学ともあまりコネクションがないものですから、なかなか現場の状況がわからないこともありますけれども、平時から現場を担当してきた方とかなりよくお話をしたいという思いです。日頃のそういうものが緊急時に生きてくるだろうなと感じた次第です。

以上です。

倉元直樹教授

では、最後。

あの、学校の責任って何なんだろうな、ともう1回ちょっと考え直したいなと思います。私は日本では先生っていうのは「身分」だと思っているんです。24時間、先生は先生です。だけども、正直、フィンランドに行って質問した話です。校長先生に「先生の学校でもし子どもが犯罪を犯したら、先生はカメラの前で謝りますか?」という質問です。「私が管理している学校の敷地内で学校が開いてる時間に起こった場合には、私に全責任があります。しかし、そうでなければ、私は関係ありません。」ということでした。多分、そこをもう一度、引き直さないと、この日本の仕組み、教育の仕組みがうまく回るかどうかというのが問われている時代なのかな、と思います。入試のことも含めて考えました。

以上です。

苅谷剛彦特任教授・名誉教授

あの、いいですか?

秦野進一特任教授（討議司会）

ええ。

苅谷剛彦特任教授・名誉教授

今、皆さんの話を聞きながら、実は責任主体を何で最初に聞いたかというと、2番目の問い合わせの不透明な時代への対応する力は何かという話と、当然、関係するんですね。今、伺って私が理解したのは、個人の資質・能力の問題ではないということです。

学校の中でも、要するに校長のリーダーシップだけで決まるわけではない。おそらく、隣の高校の校長とも当然、情報交換や相談し合ったりして、悪く言えば、横並びになるんだけれど、そうやって決まっていくことも結構あったのではないか。その場合の主体性とは何か。不透明な時代への主体的な対応とは、どんな資質や能力か。それらを個人の問題として論じてきたのではないか。



しかし、今の話は、日本社会のレジリエンスとか強みはどこにあるのかという問題と関係する。あいまいなコミュニケーションによってあいまいな協力体制をつくり、それを使う。その絶妙な、しかし下手をすると悪い面もあるのだけれど、どうしても入学者選抜の話になると、あるいは昨日話した学校教育法に書かれていることからすると、どうしても個人の資質、能力というところに目が行ってしまう。そこに欠けてる論点の一つは、一人一人の資質、能力には対応、対応する力がなくても、それが集まつた時に何ができるのかという問題で、それはまた全然別の視点で論じなければならない。となる共同・協同・協働とかの話ではない。

かといってすぐに個人主義から集団主義へ、といった単純なことではない。この共同性みたいなものを前提にした時の、資質、能力は何かと問うと、それを文科省が受け取ったときには、またコミュニケーション能力とか言い出すんでしょう。でもそういうことではないんだと思います。そういうことをもう一度考えるきっかけとして、コロナ禍の経験を捉え直すと、学校教育法がいうような資質、能力とは違う議論ができるはずだと思いました。ありがとうございます。

安成英樹教授（討議司会）

このまま、あと1時間ぐらい続けたいところ

ではあるのですけれども、残念ながらお時間となりましたので、このあたりで討論は締めさせていただきたいと思います。

コロナ禍の影響というのは、おそらくこれからもずっと残っていく、その経験の中から教訓なり知恵を導き出して、今後に生かす努力を続けていかなければいけないんだろうと思っております。

三戸望特任教授（総合司会）

はい、5名の先生方、長時間お話を、ありがとうございました。

閉会の辞

東北大学アドミッション機構長
滝澤 博胤

三戸望特任教授（総合司会）

えー最後に主催者を代表して、東北大学アドミッション機構長滝澤博胤より閉会のご挨拶を申し上げます。

滝澤博胤機構長

はい、皆さんお疲れ様でした。2時間のフォーラムということで、話題もたくさん盛りだくさんで、討論も最後まで盛り上がったようで、やはり時間が足りないですかね。そこはまた今後考えていきたいと思っています。

今日は主題が、コロナ禍は大学入試をどう変えたかというタイトルでしたが、実際に変わったんでしょうか。そこは、それぞれお考えあるかとは思ってます。



実は少し小ネタ挟むのですが、去年のこのフォーラムが、やはり同じこの会場でやったんですけど、そのときちょうど自民党の総裁選の決選投票っていうぐらいのタイミングで、フォーラム終わったところで、石破新総裁だねって話をした記憶があります。今日はちょうどまた、

総裁選の公示日だそうで、何を言いたいかっていうと、1年経って、結局、また同じことをやって、じゃあ何も変わってないなっていうことです。それをずっと繰り返して、失われた30年というのあったと思うんですけども、実はこの30年の間に、あっという間に大学全入時代になってしまいました。まあそう言われてすでに久しいんですけども、では本当に大学の入学者選抜って変わったんですかね。私はそこは大いに考えるところがあると思ってます。今日はそういう分野の研究者だったり、あるいはステークホルダーであったり、あるいはご関心の高い皆さん、お集まりだということで、ぜひそういう点を今後考えるきっかけにしていただければと思っております。

ちょうど間もなく夏休みも終わって、新学期始まるところですけど、この新しい青葉山のキャンパス緑の、まだ紅葉に入る手前ですけど、皆さんお迎えてきてよかったです。2時間、どうもありがとうございました。

三戸望特任教授（総合司会）

滝澤先生、ありがとうございました。

以上をもちまして、本日のフォーラムを終了いたします。お忙しい中、最後までご参加いただきありがとうございました。

最後にアンケートへのご協力をお願い申し上げます。スクリーンに表示されているQRコードからもアンケートのウェブページへアクセスしていただくことができます。それでは解散してください。

ありがとうございました。

講評

講評 1：コロナ禍が教育現場に残したもの ——第 42 回東北大学高等教育フォーラムに参加して——

青森県立八戸高等学校
福島 隆雄 教諭

1. はじめに

2020年2月29日、安倍首相（当時）が発表した全国一斉の臨時休校。新型コロナウイルスが日本でも感染者数を増やす中、蔓延防止のため打ち出された施策ではあるが、その混乱ぶりは、教育現場にいた方なら実感されたことと思う。私も当時は担任として、2学年の終わりから3学年へ進級する生徒の対応をしていた。そう、コロナにより全国高校総合体育大会や夏の甲子園、全国高校総合文化祭が中止や変則開催に追い込まれた学年である。また、30年に渡って行われた大学入試センター試験に代わり、大学入学共通テストが開始されるなど、高大接続改革が本格始動した年度でもあった。今フォーラムに参加し、そのような数々の出来事を思い出しつつ、コロナが教育界にどのような影響を与えたのかを認識することができた。

2. 「コロナ禍の教訓」

東北大学教授 倉元直樹先生

冒頭でも触れたように2021（令和3）年度入試は高大接続改革の初年度として、コロナ禍でなくとも受験生にとって大きな変革を受け入れなければならない年であった。喉元過ぎれば熱き忘れるというわけではないが、コロナ禍によってあまりにも多くの「非日常」が押し寄せてきたため、改革の本丸とも言っていた入試の主要部分については霞んでしまった感がある。核となる英語の外部検定試験の利用や国語の記述式問題の導入といった、生徒にとっても指導する側にとっても負担の大きい要素を含んでいた。その対応については当該年度の生徒入学時より、準備をしてい

るところであった。幸いなことに時の文部科学大臣の英断により、いずれも見送りとなつたが、実施されていた場合はコロナ禍と相まってどのようにになっていたのか想像もつかない。

倉元先生がまとめられたコロナ禍前後の入試関連の状況を見ると、改めて荒波に揉まれた入試制度改革であったことがわかる。国としては、制度改革を早期に予告してはいたものの、現場の声を反映しての中止。それに対して、大学側では告知していた選抜方法を極力変更しないようにして受験生を受け入れる。各立場におけるぎりぎりの判断が、当時の受験生のためになされたことを痛感した。

さて、言うまでもないことではあるが、受験は日本全国、そして世界各地で実施されるものである。当時は目前の生徒の指導で精一杯であり、国内他地区はもとより世界の受験情勢など知る由もなかつた。しかし、多くの留学生が日本の都市部だけでなく地方大学でも学ぶ国際化の進展した今日、教員も視野を広く持つ必要がある。

倉元先生の発表ではコロナ禍での入試に対する特別措置が、地域ごとにわかりやすく類型化された形で提示された。実施時期を変更するもの、選抜基準を変更するものなど、中には政治体制と密接に関わりあっている国もある。これらについては後の先生方の発表や討論会の中でも、「責任の主体はどこか」ということで想起された部分である。特に倉元先生の、受験生を受け入れる大学の立場や国の政策提言にも関わる立場など、俯瞰する位置に居たからこそ言えるまとめられ方だったと理解した。

各論点の整理をされつつ、後に続く発表の先生方の特徴を事前に提示された倉元先生の御講演は、正に今フォーラムの嚆矢となり、我々参加者にとって推考の方向性を示していただけるものであった。

3. 「コロナ禍における日本の大学の強靭さと脆弱さ」

大学入試センター准教授 寺尾尚大先生

コロナ禍において我々高校教員も中学生の受験、つまり高校入試では数多くの対応に追われた。県立高校であるため、県教育委員会から大枠の指示はあるものの、それを現場レベルに落とし込むとなると、細部を詰めていく必要が生じる（各校で受験生の数は異なり、受験場となる教室の数、監督の教員に限りもある）。管理職と入試を所管する教務部担当者が苦労していた様子も記憶に新しい。

さて、受験生の少ない地方の高校でも混乱のあった受験だが、全国から多くの受験生が集まる大学ともなると、その苦労はどれほどものものであったろう。寺尾先生の御講演の冒頭では、コロナ禍最盛期に国（政府）と各大学（高校）の狭間に置かれた大学入試センターの御苦労を垣間見たような気がする。

提示資料では令和2年度から4年度までのコロナ陽性者数の推移と年度ごとの政府や大学入試における対応が示された。振り返ってみると、緊急事態宣言が発出された年度（正確に言えば翌年度）の受験が対応面において注目されたが、その後もしばらくは対応が必要な時期が続いたのである。年を追って社会全体がコロナに対し「免疫」をつけていく様子を確認することができた。そして、その過程を経て残された「大学入試の在り方に関する問い合わせ」。これは新型コロナに限らず、入試における危機管理体制の在り方ではないかと思った。

寺尾先生は「安定」と「革新」というキーワードをもとに御説明をされていた。後者にあたるオンライン面接とCBTについては、

当時もその実施程度に差異を感じていたが、その後の導入状況や動因について改めて伺うと腑に落ちるところがあった。私個人としては、検定試験における運用テストの状況を鑑みて、大学受験でも積極的にCBTが導入されていくものだと思い込んでいた。公平な仕組みを構築しなければならない大学側と、安定した回答環境（PC等）を準備しなければならない受験生（学校）側の負担を考慮すると、導入は難しいものと思われる。しかし、受験のための移動や宿泊を伴う地方の学校としては、その活用により生徒の負担が減るのも事実である。実際の学び舎となる大学の会場で受けることも大切だと思うので、全入試の切り替えまでは求めないが、CBTの導入が今より進むことを期待し、先行実施している諸大学と大学入試センター職員の皆様のご尽力を願う。

4. 「COVID-19による教育環境の変化と大学選択行動」

東北大学助教 林如玉先生

多くの留学生が日本の大学で学ぶ今日、受け入れる側としても、海外の状況を知っておく必要があるように思う。林先生の発表は、日中両国の18歳前後の若者たちがいかにして高等教育を選択するのか、その類似点と相違点を認識する良い機会であった。

そもそも中国の教育制度が日本で紹介されること自体が、あまりなかったのではないだろうか。現代中国の情報を意識して収集しない限り、中国の全国統一入試「高考」の受験者数の実態や高等教育の大衆化が進行していることなど知ることはない。入試制度等の説明において、日本と中国の教育における類似性がかなりあることが丁寧な補足説明で確認することができた。しかし、現在の日本の入試制度が一般入試のみならず、学校推薦型・総合型（さらに大学ごとに独自性あり）など、多様化が進んでいるのに対し、中国では「高考」に重点を置いていることに驚きを覚えた。

多くの人口をかかえる中国こそ、多様な入試制度を取り揃えているものと思っていたが、実際はそうではないようである。新型コロナウイルス蔓延時に1千万人を超える受験生が同一の試験を受験する環境であったことで、その対応の難しさや現場の混乱は日本以上であったかもしれない。

さて、高校教員としては、生徒がどのような大学に進学したいのか、その決定時期はいつか、影響を与えた要因は誰か、など非常に注目するところである。林先生の集められたデータでは情報収集活動や進路相談の相手に関して、平時と非常時（コロナ禍）における対比がなされており、非常に興味深い結果が見られる。特に注目すべきは相談相手がいずれの時期においても変わりはないことと、高校教師の順位である。日本では相談相手の2番目となっているのに対し、中国は5番目と比較的低い。代わりに家庭の役割が高いことは、家族内の結びつきの違いによるものだろうか。林先生の調査・研究はコロナ前後の対比のみならず、教育環境の異なる日中両国の対比を行うことで、大学進学に対する支援体制の違いを浮き彫りにしたものであった。

5. 「地方公立高校の現場から見たコロナ禍の影響」

新潟県立新潟高等学校教諭 山崎健太先生

私の勤務校も卒業間近に控えた2月、3年生を対象に3年間の学習活動等を振り返るアンケートを実施している。山崎先生が指摘されたように当時はコロナに関連する質問の項目立ては行わず、例年通りの内容であった。

受験全般に関する感想の中に、コロナに対しての不安を吐露するものもあったが、実際にはどのような影響があったか数値として判断することはできない。しかし、客観的数値としてはつきりわかるのは、受験先の特徴である。山崎先生がコロナ禍の際に勤務されていた長岡高校と同様、本校の受験校の延数や出願先の多い大学の傾向に変化はなく、「コ

ロナによる受験への影響は最終的には無かった」ということが確認できた。コロナ当時は気にも留めていなかったが、多くの生徒はコロナの影響を受けていない1、2年時にある程度の志望を固めており、影響を最も受けた2021年度入試の期間は、第一志望に向けてひたむきに勉強を行っていたと考えられる。むしろオープンキャンパスで現地を見られないことから、志望を変更する要素が無かったとみることもできる。

「頑張っている先輩の姿を見ることができなかつた下級生」ということも大いに共感できるものがあった。本校では放課後講習を実施しているが、講習終了後も遅くまで残る者、休日も自主的に登校して学習に励む者など、多くの努力する姿を見て、その後の学年が引き継いでいく文化があった。最近はまたその様子が復活した感もあるが、コロナ後しばらくは途絶えていたようである。

また、大学受験に限らず、コロナによって一度中断された行事や風習が再開されたものの、以前とは異なる形になっているものも未だに存在する。各発表の先生方がおっしゃるように、コロナの残した影響はしばらく尾を引くのかもしれない。その中で、最も影響を残しているものは山崎先生が最後に触れた「欠席に対するハードルが下がった」ということではないだろうか。コロナ禍においては、少しでも具合が悪い又は不安を感じれば休んでも良い、欠席にはならないという指導が確かに行われた。勿論、コロナ後遺症に苦しんだ生徒もいる。しかし、語弊を招くかもしれないが、その時の経験や記憶が継承され、ここぞという時に踏ん張れない生徒が増加しているように感じることもある。討論会の場面で苅谷先生がおっしゃった日本における「安心」を求める対策の難しさを痛感した次第である。また、受験指導、ひいては学習活動において、このように定型化や文章化されるわけではなく見て真似る、または先輩から後輩へ口伝えで継承される「学習文化」があるこ

とに改めて気付かされた。だからこそ、現在在学している生徒の姿が、後の入学生の道標となると信じ、その成長のために指導を行っているのである。

6. 討論

討論の冒頭、苅谷先生より「コロナ禍において、責任主体はどこにあったのか」という質問が発表の先生方に投げかけられた。4名の先生方はそれぞれのご所属やお立場から回答されたが、共通していたのは平時の備えであった。未曾有の事態に際しても、日頃から組織内の縦の繋がりや組織間の横の繋がりが確立されていたため、完全ではなかったものの、一定の対応ができたと考えられる。コロナ禍における対策は危機管理の一つの形であり、今後何らかの危機的状況に陥った際の指針になるだろう。

7. 終わりに

「天災は忘れた頃にやってくる」これは、今回のフォーラム終了後に思い浮かんだ言葉である。防災意識の啓蒙では使い古された警句ではあるが、教育においても受け入れられる言葉かもしれない。

コロナ禍以前より教育界のDXは、国主導で徐々に進められてきてはいた。この取り組みがコロナ禍において、最善とは言えないものの、休校時の指導や面接試験で活用することができた。また、生徒に対する進路指導は各国とも形式が整っていたため、多少の影響はあったものの、大きく変わらず対応することができた。これらは地道に積み上げてきたものが、非常時にうまく機能した結果と言えるだろう。各立場において変革を求めず、旧態依然のままであったならば、大学入試においても、さらなる混乱が起きていたに違いない。教育活動の改善全てが感染症対策や災害に対応したものとは限らないが、生徒のためになると信じ、各界一体となって対応した結果が功を奏したと考えれば、今後も教育に携

わる者は現状に甘んじることなく、研鑽を積まなければいけない。

最後に、このような貴重な機会を与えていただいた東北大学高等教育フォーラム事務局の皆様をはじめ、素晴らしい発表をされた先生方に心より感謝申し上げます。

講評2：コロナ禍は大学入試をどう変えたのか 講評

岩手県立盛岡第一高等学校
北川 貴彦 教諭

ここ数年、高等学校の進路指導は大きな転換を迫られているように感じます。先日、駿台予備学校が進路実績の公表を取りやめました。これは、一人の受験生が複数の予備校から指導を受けるなどして、各予備校の進路実績に重複が生じているためとのことです。かつて勤務していた高校では、生徒の志望や適性を見ながら「この生徒にはこの学校を勧めてみては？」、「この生徒はこの大学を狙わせてみよう」といった話し合いが行われていました。しかし近年では、このような会議は徐々に減少し、生徒の第一志望を尊重する方向へと変化しているように感じます。「〇〇大学に何人合格したか」という実績は今も重要なありますが、かつてほどの重みはなくなっています。その背景には、コロナ禍の影響もあるのではないかと考えています。今回、東北大での講演を拝聴する機会を得ましたので、私なりに振り返ってみたいと思います。

東北大の倉元直樹氏による「コロナ禍の教訓～日本型大学入試の本質～」というテーマの講演では、コロナ禍によって、従来の大学入試の課題が浮き彫りになったことが語られました。大学入試対策には多くの準備時間が必要であるため、受験生を第一に考え、予定の変更や選抜方法の急な変更は避けられました。しかし、感染拡大防止の観点から、受験生が一堂に会する学力試験の実施が困難となった際、代替案を用意することができず、そもそも代替案を検討することすらなかったという現実がありました。各国の対応は様々で、東アジアでは実施時期の調整、ヨーロッパでは選抜基準の変更、アメリカでは経済原理を最優先する対応が見られました。また、

オンライン技術の進展により、オンライン面接（実施方法には課題があるものの）やCBT（Computer Based Testing：筆記試験をコンピューターで実施）など、新たな試験方法の研究が進められるようになりました。

学校現場においても、コロナの影響は計り知れません。授業はオンラインでの実施が当たり前となり、調査書には出停・忌引の表記を行わないこととされました。このことから、個を尊重する機運が高まり、不登校の生徒がオンラインで授業を受けたり、以前より気軽に欠席するようになったりしています。その結果、「一枚岩で頑張ろう」という風潮は薄れ、それぞれの考え方方がより尊重されるようになってきました。働き方改革も含め、個を尊重する流れが進む中で、学校の役割も変化してきていると感じます。大学入試は個別対応の方向へ進んでいますが、高校現場ではそれに対応するため、より多くの対応が求められています。

続いて、大学入試センター研究開発部の寺田尚大氏による「コロナ禍における日本の大学入試の強靭さと脆弱さ～オンライン面接とCBTの分水嶺は？～」という講演を拝聴しました。令和2年から令和5年までのコロナ禍における大学入試の振り返りが行われました。個人的には、トンガ噴火による津波の影響で、共通テストが全国で唯一延期となった岩手県立宮古高等学校での出来事が思い出されます。津波警報が鳴った早朝から学校に待機し、大学からの連絡を待ちました。結果として試験は延期となり、受験生へのフォロー、追試験までの指導計画の練り直し、国公立大学出願までの指導など、大変な対応を迫られました。

また、入試実施者側の論理として、入試業務ではミスをしないことが最も重要であり、従来の型を緊急的に変更することは避けられました。そのため、革新的な選抜方法はあまり検討されてこなかったという現状があります。受験生にとっても、事前に周知された選抜方法で実施されるほうが安心感を得られるため、入試改革は進みにくい状況にあります。コロナ禍では、対面での面接や大規模な学力試験の実施が困難となり、オンライン面接は総合型選抜や学校推薦型選抜で導入が進みました。一方、CBTは課題が多く、導入には至りませんでした。しかし、CBTには感染症流行時の対応や留学生選抜、受験上の配慮など、多くのメリットがあり、今後の研究が期待されています。

高校現場では、オンライン授業やペーパーレスの普及により、BYOD（Bring Your Own Device）が急速に進みました。情報伝達の方法が変化し、便利になった一方で、対面でのコミュニケーションの機会が減少しています。CBTが導入されたとしても、生徒たちはすぐに順応すると思われます。ただし、CBTやオンライン面接で人物評価が可能なのかという疑問も残ります。大学入試の先にある就職試験では、対面が基本であることが多く、コロナ禍により自分のペースを最優先する生徒が増加している中、CBTでは安心できる環境で試験に臨めるため、力を発揮する生徒も増えるかもしれません。しかし、今後の人生では、自分のペース通りに進むことばかりではないという現実もあります。以上のことから、個人的には従来の大学入試のほうが、生徒の本当の力を見極めることができると感じています。

次に、東北大学の林如玉氏による「COVID-19による教育環境の変化と大学選択行動－一日中の高校生比較から－」という講演を拝聴しました。日本の共通テスト受験者が約50万人であるのに対し、中国の全国統一入試「高考」は約1,350万人と桁違いの規

模です。「高考」は一発勝負の試験であり、大学入学の唯一の手段であるため、受験生は相当な対策をして臨みます。COVID-19の影響で「高考」も大きな影響を受け、通常6月実施の試験が約1か月遅れて実施されたとのことです。中国では、COVID-19以前からオンライン授業が行われていたため、学習環境の確保がある程度可能だったようです。

また、日本と中国の進路選択における違いについても言及がありました。日本では進路目標決定に影響を与えるのは母親に次いで教員であるのに対し、中国では友人や母親の影響が大きく、教員の影響は比較的低いという結果が示されました。さらに、日本ではCOVID-19の影響により、進路決定が中国に比べて遅れる傾向があることも明らかになりました。

この講演を通じて、コロナ禍によってコミュニケーションが失われ、生徒の進路決定に大きな影響があったことを改めて痛感しました。中国の受験戦争は日本とは比較にならないほど厳しく、膨大な勉強量で試験に臨んでいます。スパートニク・ショックの頃の日本との違いにも興味が湧きました。また、共通の問題で受験するため、難易度の高い問題がどの程度出題されているのかという点にも疑問を感じました。

進路選択に関しても非常に興味深い内容でした。文化的な要素も影響しているのか、日本では親や指導者に従う傾向が強く、教員の影響力が大きいのに対し、中国ではそれほどでもないことから、文化の違いや教員の社会的役割に差があるのではないかと感じました。

最後に、新潟県立新潟高等学校の山崎健太氏による「地方公立校の現場から見たコロナ禍の影響－生徒と保護者が受けた心理的制限－」という講演を拝聴しました。コロナ禍を経験した受験生の声には、不安や苦しみが多く含まれていました。そのような状況下での受験はチャレンジ精神を減退させ、身近な地方国公立大学を目指す生徒が増加しました。

また、早期に進路を決定したいという思いから、私立大学の総合型選抜を希望する生徒も増えました。オープンキャンパスに参加できなかつたこともあり、地元や知名度の高い大学への志望が偏る傾向も見られました。部活動の制限により、早期帰宅が常態化し、1・2年生が受験に向けて努力する姿を見る機会が減少しました。「受験は団体戦」というイメージも薄れてきています。また、コロナ禍以降、少しの体調不良でも欠席する（させる）状況が散見され、それは5類移行後も続いています。

この話には、学校現場にいる立場として共感する部分が多くありました。特に「一枚岩で頑張る」という風潮がなくなり、個が優先される状況になっている点は印象的です。一方で不思議に感じたのは、共通テストの教科数が増え、忍耐強く努力しなければ良い結果が得られないはずなのに、コロナ前後で学力差があまり見られない点です。忍耐強い生徒が減少した一方で、自分のペースで生活する生徒が逆に成績を伸ばしたのではないかという新たな疑問が生まれました。

最後に、パネルディスカッションを拝聴しました。上智大学特任教授の苅谷剛彦氏からは、本質的なテーマが示されました。一つ目はコロナ禍入試における責任の所在、二つ目は「安全」と「安心」の違い、三つ目は不透明な時代における対応の不透明さについてです。日本では大学入試センターからガイドラインが示され、大学側にある程度の判断が委ねられました。一方、他国では国が強制力を持って判断を下しました。日本のコロナ禍対応は、結果的にうまくいったのではないかと感じます。「安心」とは究極的なものであり、すべての人に与えることはできません。また、コロナ禍で指定校推薦による入学者の退学が増加し、オンライン化によって反復学習の機会が失われたという指摘もありました。全体として、議論の時間が短く、もう少し腰を据えて議論できればさらに良かったと感じまし

た。

全体を通して、日常的に感じていたことが、様々な分析によって明らかになったように思います。高校現場では、年内入試を希望する生徒が増加し、個別対応がますます求められています。また、学力を伸ばそうという気概が薄れ、やりたいことを最優先する生徒が増えているように感じます。一方、東京大学や東北大大学では新たな学部創設により、日本国内のみならず海外からも優秀な人材を確保しようとしています。通信制高校への進学者も増加しており、全日制高等学校の立ち位置も今後変化していくことでしょう。コロナ禍の影響は計り知れず、高校現場はより社会に敏感でなければならないと痛感しました。今回、このような貴重な機会をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

講評3：第42回東北大学高等教育フォーラムに参加して

宮城県白石高等学校
佐々木 貴之 教諭

1. はじめに

まず初めに、この度は東北大学高等教育フォーラムに参加する貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。

私自身、今回が初めての参加となりましたが、大学入試センター研究開発部、東北大学、そして新潟県立新潟高等学校という、それぞれ異なる立場からの話題提供と討論を通じて、非常に興味深く拝聴することができました。

私はコロナ禍が始まった令和2年度に2年次を担当し、その後3年次担当・進路指導担当者として、コロナ禍の中での教育活動や大学入試を経験しました。このフォーラムに参加し、共通テストを含む大学入試に関して、それぞれの立場で多様かつ柔軟な対応が行われた結果、大きな混乱もなく終えることができたことに改めて感謝するとともに、コロナ禍を体験したからこそ得られた教訓について考え直す機会となりました。

コロナ禍は大学入試だけでなく、日常生活のスタイルや価値観にも大きな影響を与えました。今回は、高等学校に勤務する一教員として、当時の状況を踏まえながら、私なりの感想をまとめさせていただきます。

2. コロナ禍の教訓

——「日本型」大学入試の本質とその変容——

東北大学 倉元直樹 氏

倉元氏は冒頭で、「意識」と「無意識」という感覚的な事象を「呼吸」を例に挙げて語られた。

振り返ってみると、大学入試において高校現場の私たちは、倉元氏の言う大学側の「受験生保護の大原則」を“無意識”的に信じて受験に臨むことができていたと感じる。その一方で、コロ

ナ禍での大学入試に関する特別措置の国際比較において、フィンランドでは大学個別試験が中止されたという例も紹介され、日本の受験実施側の関係機関による「受験生救済」という姿勢が、必ずしも世界の常識ではないことも確認できた。

ここで、私が勤務する高校の生徒たちにとって、コロナ禍が大学入試にどのような影響を与えたのかを考えてみたい。当時の受験結果を振り返ると、一定の影響はあったものの、むしろ好結果をもたらした側面も見られた。令和3年度入試では、コロナ禍にもかかわらず、北海道から沖縄まで地域的に幅広く大学を受験しており、進学実績も過去数年間で最も良好だった。令和4年度入試でも同様の傾向が見られる。本校は宮城県南部に位置する高校であり、地方校としての特性でもあることから、高校生のキャリア選択や学習活動における教員の関わりが大きいと考えていたが、コロナ禍の中で生徒一人ひとりが自らの時間を主体的に使い、自律的に学習へ向かう姿勢を育んだ結果だと感じる。この点は、後述する当時の生徒談話からも確信を得ることができた。

フォーラムを通じて、生徒がコロナ禍でも成長できた背景には、「大学入試実施側が受験機会を必ず確保してくれる」という安心感が大きく影響していたのではないかと感じた。

3. コロナ禍における日本の大学入試の強靭さと脆弱さ

——オンライン面接とCBTの分水嶺は?——

大学入試センター研究開発部 寺尾尚大 氏

寺尾氏の発表では、コロナ禍における新規陽性者数の推移、緊急事態宣言、蔓延防止等重点措置など、国の対応が時系列で整理されていた。令和

2年に始まり、安定期に入るまでの未曾有の状況での対応の流れを改めて確認することができた。

特に印象的だったのは、寺尾氏の「問題作成や試験実施・運営体制が硬直化していないか？」という問い合わせである。これは大学入試に限らず、コロナ禍が社会全体に突きつけた大きな課題だったと言える。

例えば、当時、高等学校でも感染予防の一環としてリモートワークが認められ、全県的な会議もオンラインで実施されるようになった。感染防止が目的であったが、結果的に「多様な働き方」「業務効率」「柔軟性の向上」など、多くの利点が見出された。このフォーラムを通じて、高等学校も平時においてこそ、より一層の「柔軟性」を追求すべきではないかと感じた。

授業は対面が最良と考えがちだが、コロナ禍でのオンライン授業では通学時間の削減など、タイムパフォーマンスの良さが明確に示された。しかし現在では、台風などによる突然の休校時に、当時ほど迅速で柔軟な対応が取れなくなっていると感じる。コロナ禍は多くの変革の契機を与えたが、平時こそ改革のアクセラが緩みがちである。

また、最後の討論で挙げられた「責任の主体」というキーワードにも関連し、高等学校を取り巻く組織が、その点で曖昧であることも課題の一因だと感じた。寺尾氏が述べられたように、「強固な入試の安定志向を打ち破り、変化へ移行するのは、緊急時ではなく平時こそがチャンスである」という言葉は、高校教育全体にも当てはまると思った。

4. COVID-19 による教育環境の変化と大学選択行動 ——日中の高校生比較から——

東北大学アドミッション機構 林 如玉 氏

林氏からは、中国と日本の大学入試制度の違い、そしてCOVID-19が高校生の学習時間や大学選択に与えた影響について、調査データをもとに報告がなされた。倉元氏が示された、特別措置の取り

方による「東アジア型（実施時期の調整）」「ヨーロッパ型（選抜基準の変更）」「米国型（経済原理優先）」という分類を踏まえると、日本と中国はどちらも入試の日程調整によって対応したという共通点があった。

特に興味深かったのは、「高校生の大学選択に与えた直接的影響」に関するデータである。林氏の調査によると、コロナ禍が大学選択に与えた影響は限定的であった。本校でも令和3、4年度入試に関しては、情報提供が制限されていた当時にもかかわらず、進学先の地域の多様性や実績は良好であった。

現在（2025年10月）、ちょうど教育実習のために母校に戻ってきた令和4年度入試経験者と当時を振り返る機会を得た。一人の卒業生は「コロナ禍が大きな転機になった」と語った。休校措置により自由な時間が増え、自分の学習習慣と進路選択に真剣に向き合うことができたという。もう一人の卒業生は、学習時間をうまく活用できなかったものの、友人とのコミュニケーションが増えたことで学習意欲や大学選択に良い影響があったと述べた。教員への相談が難しい状況の中で、友人と助け合いながら考える力が育ち、それが自信につながったという。このような談話を「コロナ禍」という視点から聞くことができたことは、今後の教育の在り方を考える上で大きな示唆となつた。

5. 地方公立高校の現場から見たコロナ禍の影響 ——生徒と保護者が受けた心理的制限——

新潟県立新潟高等学校 山崎健太 氏

最後の話題提供である山崎氏の報告は、同じ高校教員として共感をもって拝聴した。

山崎氏が挙げたキーワードは「心理的制限」である。氏が述べられたように、「様々な要因が複雑に絡み合う中で、大学入試に対するコロナ禍の影響だけを切り離して考えることは困難」であるという前提には強く同意する。

「心理的制限」という言葉で思い出されたのは令和5年度入試である。この年度の受験生は、高校入学と同時にコロナ禍を経験した世代である。令和3、4年度入試では広い地域での受験が見られた一方で、令和5年度入試では安全志向が強まり、県外公立大学よりも地元私立大学を志望する傾向が顕著であった。その一方で、自律した学習習慣を身につけた生徒も例年より多かった。また、体調不良による欠席が増えた点も特徴的であった。どの段階でコロナ禍を経験したかによって、「心理的制限」の影響の大きさに差がある可能性を感じた。

6. 最後に

後半では、これまでの話題提供に基づく質疑応答と討論が行われた。冒頭で指定討論者の苅谷剛彦氏から提示された「コロナ禍の大学入試における責任の主体は？」という問い合わせ印象的であった。

討論を通して、非常時であっても各機関が責任をもって対応できたことが日本の強みであるという指摘が心に残った。また、生徒自身のレジリエンス（回復力・適応力）の高さにも改めて感銘を受けた。

確かに高校現場では、大学入試に関して実施機関から詳細なガイドラインが示されたことに非常に助けられたが、今後、予測が困難な緊急時においては、「責任の主体」を求めつつも、的確な対応を自ら模索していくかなければならない。「責任の主体者」の責任がやや薄まるときこそ、柔軟な対応力が磨かれる機会とも言えるのだ。

今後ますます不透明な時代を迎えるにあたり、平時こそデジタル化などの備えを進める必要があると感じた。「責任の主体」が曖昧であることが、時に柔軟性を生む一方で、改革を遅らせる要因にもなり得る点は重要な示唆である。

今回のフォーラムに参加しなければ、コロナ禍が大学入試に与えた影響をここまで深く考える機

会はなかっただろう。フォーラム全体を通じて、現在の「平時」と言える状況が永続する保証はなく、今こそ柔軟性を再確認し、さらに革新へと向かう姿勢を大切にしたいと改めて感じた。

講評4：第42回東北大学高等教育フォーラムに参加して

秋田県立秋田南高等学校
大友 和也 教諭

1. はじめに

コロナ禍で様々なことが制限されていたものの、私は感染が収まり行動制限などが緩和されると、すべて元に戻って今まで通りに物事が行われるものだと考えていました。しかし現実には、5類に緩和された今でも、オンラインの会議が行われたり、研修もオンラインで実施されたりと、コロナ禍で生まれた新しい形が主流となってきています。ICT技術の発展もあり、コロナ前では考えられなかつた会議の形が、当たり前となり始めています。そういった中で、コロナ禍を経て大学入試が今後どうなっていくのかという視点をもって、フォーラムに参加させていただきました。

私は共通テストの導入や新課程による教科「情報」の追加などの変化には敏感に情報をつかみ、生徒に還元しようと取り組んでいました。しかし、これまで個別学力検査などといった日本の大学入試制度に何も疑問を持たず、各大学入試の2次試験対策ばかり考えていました。他国とは入試制度が違うことは知っていたものの、具体的にどう違うのかなどの知識はなく、現在の大学入試やその改革については受け身になってしまっていたことに気づきました。更に、コロナ禍はちょうど大学入試に携わることが少ない校務分掌であったこともあり、オンライン面接などといった大学入試の変化についても自分のこととして捉えず、コロナ禍の特別なもので、いずれ元に戻るという意識でいました。しかし、コロナ禍で実施できたということは、今後も実施可能なものであり、またパンデミックなどの非常事態が起きた際には、コロナ禍で行われたことを参考に入試が実施されることでしょ

う。

このように、コロナ禍で変わった大学入試について分析することは大変意義のあることであり、このようなフォーラムにお招きいただきまして、感謝申し上げます。

2. コロナ禍の教訓

—「日本型」大学入試の本質とその変容—

冒頭で呼吸は無意識に行っており、呼吸困難に陥って初めて意識化するように、入試もコロナ禍を通して初めて意識化されたと述べられましたが、まさに私に当てはまることがありました。これまでのことを何も疑わず、何も感じずに入試対策をしていました。日本における大学入試が良いとも悪いとも思わず、ただひたすらに全国の大学の問題を解き、限られた時間で生徒にこの問題を解くための力を付けさせるためには、どのようなことをすべきかと頭を悩ませる日々でした。しかし、日本の常識が世界の常識ではないこと、そして欧米先進国の常識が最善だとも言い切れないという言葉を聞き、改めて日本の大学入試の制度についても、高校教員としても考えるべきだと感じました。

私が特に印象に残ったのは、コロナ禍に対する特別措置についてでした。東アジア型の「実施時期の調整」とヨーロッパ型の「選抜基準の変更」は想定できるものでしたが、米国型の「経済原理優先」という考え方には驚きました。コロナによる大幅な人員の削減、アドミッションオフィサーの解雇、そしてSATやACTが実施できず、志願者が増加したことでした。このフォーラムの後で改めて調べてみると、ハーバード大学への出

願数は43%増加、ペンシルベニア大学への出願数は30%以上増加、マサチューセッツ工科大学では65%強も増加とありました。

多数の大学がテスト・オプショナルの方針をとると、名門大学の志願者が増加することは、私にも十分想定できます。日本で置き換えて考えると、もし全大学で共通テストを廃止にして個別学力検査だけで判定することになつたら、東京大学をはじめとする旧帝大への志願者数が増加するだろう、と考えるからです。今まででは2段階選抜を恐れて出願を回避したり、業者からの判定が思わしくなくて出願を断念したりしていた高校生がいなくなり、強気に出願するものと考えます。米国の対応の実情を知ることで、日本の追試験による対応が、各大学の入試事務局の方や大学の先生方の並々ならぬ努力によって実施できていたこと、そして公平で公正な入試が実施されていたということを実感することができました。改めて、全ての大学入試関係者の方々に感謝申し上げたいと思います。

3. コロナ禍における日本の大学入試の強靭さと脆弱さ

—オンライン面接とCBTの分水嶺は?—

大学入試において、CBTが導入されることは大学入試において非常に大きな改革となります。もし大学入試が自分の居住地で受験できるとなれば、地方の高校生にとっては、特に大きい改革となるでしょう。寺尾先生からは、入試業務は安定が第一でミスなく終えることが大事だとありました。一方、選抜方法や入試業務など、革新も求められており、安定させながらも革新していくことが必要となります。実際に今年度から大学入試共通テストの出願が学校取りまとめから各自でweb出願となり、双方の負担軽減と、コスト削減が見込まれています。また、秋田県の高校入試でも、今年度からweb出願が取り入れられるようで、我々も入試業務に関して大きな不

安を抱えていますが、それでも大幅に業務改善になると感じており、大学入試においてもまだまだ改革の余地はあるのだろうと感じています。

CBTの大学入試導入は、安定という点では現時点でかなり難しいことではないかと考えています。私はCBTが実施に至らない理由は不正行為への対策だと考えておりました。過去には試験会場内から、試験時間中に問題の解法をインターネットで他者に聞くという不正が起きています。こういった不正をどう防ぐかが、課題となると考えています。寺尾先生からは、CBTを実施しなかった理由として、不正行為の問題以外にも費用面の問題や、受験者に原因のないインターネットのトラブルなども考えられること、そして個別学力検査では喋らないため感染拡大のリスクが低いといった理由から実施に至らなかったとのお話がありました。CBT実施に向けては、まだまだ課題が多いことを実感いたしました。

ただ、安定の観点からCBTの導入は緊急時よりもむしろ、平常時に起きると考えるべきだとのことでした。これから動きに期待したいと思います。また、いくつかの大学でCBTの実施に向けて動き出していることも知ることができました。中学校における全国学力・学習状況調査でもCBTでの調査が始まっています。まだ、共通テストにCBTを取り入れるのは、遠いだろうというお話もありましたが、今後どのように動いていくのか、楽しみです。

4. COVID-19 による教育環境の変化と大学選択行動 一日中の高校生比較から

大学入試について他国との比較をしたことがなかったため、大変興味深い話題提供でした。日中の比較をすると、制度としての共通点や類似点が多いことがわかりました。入試関連のコロナ対応も同様で、延期や追試などで従来とほぼ同じ試験を実施していることも

わかりました。ただ、休校期間中の対応は、中国は基本的にオンライン授業、日本ではかなりの割合で授業ができていないこともわかり、日本の遅れを感じたところでもありました。また、林先生の調査によると、大学選択に与えた影響については、影響ないと考える割合は日本で約3割、中国では約7割という全く異なる結果が出ています。これが中国の「高考」中心の選抜が理由なのか、それともそれまでの国としての対策の結果なのか、他に原因があるのか、逆に日本は、どういった制度が行われていれば、当時の受験生が苦しまずに進路選択をできたのかと考えさせられました。林先生の発表では、中国は「高考」中心で推薦、AO等の入試の多様化の試みが日本ほど進んでいないとありましたが、コロナ禍においては、この制度のため受験生への影響が少なかったのではないか、と考えました。

5. 地方公立高校の現場から見たコロナ禍の影響

一生徒と保護者が受けた心理制限—

コロナによる受験への影響はあまりなかったということや、コロナ禍の受験生のアンケートから出てきた生徒の声も私の勤務校のものと似ていた状況でした。受験そのものには大きい影響はなかったとはいえ、そこまでの過程はどの学校でも非常に苦労されたこと思います。

受験の傾向についても、私が体感しているものと同様の内容が発表されました。県外志向から県内でもよいと考える生徒が増えたことは、他校でもあったことが想像できます。また、部活動での全国大会出場などといった実績が不要となった時期は、年内入試の志願者が増えたことと思います。山崎先生の発表では、自校の先輩の進路イメージが、入学者にも伝わり自分の進路イメージとして形成されるという話がありました。このことは、私

の勤務校でも同様です。特に、本校は中高一貫校であるため、高校3年生の進路が中学生に与える影響は多大です。コロナや共通テストへの移行、新カリキュラムの開始など様々な原因はあるでしょうが、ここ数年で変化した年内入試の希望者数増加は、今後の各校の問題として続いているように思えます。東北大学のように、年内入試でも学力重視の入試を続けているような大学を志望するのであれば、これまでの指導とあまり変化はありませんが、ただ受験を早く終わらせたいという理由で年内入試を希望する生徒が増える場合、今後の指導に注意が必要だと感じています。

学校生活については、5類になった今もちょっとした体調不良で欠席させていることが挙げられており、これも今現在感じている通りでした。古い考えかもしれません、こんなに簡単に休んでしまって、いざというときに大丈夫なのだろうか？と心配しています。また、社会と関わるはずであった小学生、中学生の時期にコロナ禍を過ごしたせいか、人の関わりの部分で様々な違和感を覚えることが増えたと感じています。今後入学してくる高校生への指導も、こういったことがしばらく続くだろうと考えております。

6. 終わりに

最後のパネルディスカッションにおいては、苅谷先生のお話をもう少しいただきたかったというのが本音です。他の参加者からもそういった声が聞こえてきております。次回開催されることがありましたら、時間管理に関して改善していただきたいと思います。

今回の教育フォーラムはコロナ禍で行われた大学入試について大学、高校、大学入試センターそれぞれの視点から話題提供をしていただきました。幅広い視点で大学入試を検証することで、改めて大学入試をどう改革していくべきかを考えることができました。改めまして、今回大きな示唆を与えてくださった

話題提供者の先生方、貴重な機会を与えてくれ
ださった主催者、関係者の皆様に感謝申し上
げます。

講評 5：第42回東北大学高等教育フォーラムに参加して

山形県立酒田東高等学校
菅原 祐子 教諭

1. はじめに

このたびは、第42回東北大学高等教育フォーラムにご招待いただきありがとうございました。私はこのフォーラムに初めて参加いたしました。このお話を頂戴した際に同僚に相談したところ、参加経験のある方も多くおり、大変勉強になる良い機会だと背中を押してもらいました。私は勤務校で進路指導主事を担い2年目となります。全体を俯瞰して判断し、高校の進路指導を推し進めていくには、まだまだ勉強しなければならないところです。いささか力不足とは思いましたが、精一杯努めさせていただき、勉強しようと考えた次第です。講評というより自分自身の感じたことが主となります。綴らせていただこうと思います。

2. 話題提供1について

倉元先生の資料の最初のほうにあった、崩れそうなブロックをよいしょと積み上げようとしている小人たちのイラスト。コビト(covid)か！と面白がって見ていていたのだが、お話を聞いた後はその小人が、コロナ禍に見舞われた日本の大学入試を何とかいつもの姿に戻そうとする日本人の姿と重なって見えた。日本における無意識の価値観「受験生保護の大原則」についてはなるほどと感じた。普段は無意識であったが、コロナ禍で明らかに意識されたことであり、これに沿って日本の社会は動いたのだな、と腑に落ちた。

国際比較も興味深かった。各国の大学入試、それぞれの事情や国が優先することに沿った立て直しが行われたこと等々。各国の比較により、日本では、生徒たちが大学受験に向けて積み上げてきたことを約束通り評価することが優先したのだと改めて感じられた。また、個別学力検査中止の大

学は志願者が減少したこと等から伺える、日本人は変更が嫌であるという傾向にも共感できた。国という大きな枠組みでなく、高校教員としての自分の立場から大学受験を見たときに、大学で学部・学科が新設されたり、新しい入試方法を導入されたりした時の踏み出しづらさと重なる。特に教員は初めてが嫌である。むしろ生徒のほうに、パイオニアになることを恐れない者が登場する。知らない強み、飛び込む若さが道を切り拓く契機になっていくのだな、と、高校現場にいると感じることがままある。

3. 話題提供2について

通常このような行政側の、入試の実施者である方のお話を聞く機会がまずない。行政側から、コロナ禍を経たうえでそれを俯瞰して見るお話を聞く貴重な機会だった。今となっては使うことのない「まん防」といった言葉も久々に耳にした。大学受験に働く安定の原理については、倉元先生からあつたお話と重なる。

お話の中で、「オンライン面接とCBTの分水嶺について」が興味深かった。以前勤務校にディスレクシアの生徒があり、大学入試にあたっても様々な準備をしなければならなかったのだが、その経験からもCBT導入はハードルが高いだろうことは想像される。公平性の担保が難しいからだ。それでも海外ではCBTがコロナ禍を契機に導入されたとのこと。日本においては資料にあるような英語スピーキングや情報Ⅰあたりが現実的に感じる。資料中にあった問題バンク型のCBTは今後の入試の安定のためにはあってよいとも思う。これから少子高齢化はさらに進むため、人手をかけるところを精査する必要もあるからだ。一方で、これま

でのような意匠性の高いメッセージ性のある出題もやはり欲しいと思う。現在の大学入試問題には学ぶとは何かを考えさせる良問が多くある。時に高校教育の方向性も示してくれている。ここはハイブリッドに柔軟な形でこれからの時代の大学入試を考えていってほしいところである。

4. 話題提供3について

これも通常聞けないお話であり、興味深い内容だった。お話をから、中国の人口は日本とこんなにも違うのであったと思い知らされた。「高考」も初めて知った。高考については、科挙が現代も続いているのかと、中国と日本のお国柄、社会文化の違いを感じるところでもあった。

お話を印象に残ったことが二つある。一つは中国の受験生の学習時間が長いことだ。中国ではコロナ禍以前にオンライン授業の下地ができていたこともあり、一日平均オンライン授業時間が7時間30分と、日本の4時間10分と比較して長い。それ以外の学習時間も3時間30分と、日本の3時間10分より少し長い。ここに大きな差がないとはいえ、一日のなかでどのくらいの時間を学習に充てているかにはかなりの差がある。中国では高考が先々の身の立て方を決める唯一の手段であることや、難関大の門戸の狭さが理由なのだろうか。対して日本においては大学に行くための手段が多様であることや、進学率が高いことが理由なのだろうか。

もう一つは大学選択の際の相談相手の違いと共通点だ。相談相手のトップ3は、日本が母親、高校教師、友人で、中国は友人、母親、父親であった。両親の順番の共通性も興味深いところだが、日本においては高校生活が進学先を決めるにあたって重要な役割を担っているということが、この比較からも伺えた。改めて、高校生活での進路研究や進路指導の役割は大きいと思わされた。

5. 話題提供4について

山崎先生のお話は、同じ高校教員目線のため、共感できるところが多くあった。なかでも、スライドの最後のほうにあった「(生徒に)3年間体に浸み込んでしまった、無理をしない意識は、しばらく継続することが予想される」とのコメントが、一番深く共感できたことだ。この後の討論においても、山崎先生は「学力のバランスが崩れ、『繰り返し・反復』によりわかるようになる生徒がダメージを受けている」といった主旨のことをお話しされていたが、本当にその通りだと思う。今回のフォーラムに臨むにあたり、私も、コロナ禍で何が変わっただろうかと思い巡らせていた。そして同じようなことを思っていた。コロナ禍を経て、子どもたちが「頑張れなくなった」ということだ。

コロナがやってきたのは私が高3生の担任をし、卒業式を目前に控えた時だ。すべてが自粛になり、それまで大学受験指導やら部活動やらで、フル回転に忙しかった生活から急に切り離された。そして数か月の自粛以降も、徐行運転が続いた。ゆるい生活を経験してしまうと、もうあの生活には戻れないと大人の自分でも感じた。現高3生は、小6の終わりにコロナがやってきて、中学生活をコロナとともに過ごしている。密に過ごすべき年代を、学習の基礎をしっかりと培うべき年代を、だ。おまけに学習指導要領が変わって2年目の年代だ。知識偏重教育から考える力を重視する教育に変容しようとするなか、私の勤務する地域の中学校では、自律した学習を促すという趣旨で宿題が出されなくなった。これに教員の働き方改革なども追い打ちとなり、教員のサービスで手をかけてきたものが一つひとつなくなってきた。こうした合せ技の一番の被害者は、普通の子であると感じている。手をかけることで学習への向かい方が整い、学習事項が身についていく子たちである。勤務校における高校入学時の学力は年々下がっている。家庭学習時間の平均値も年々下がっている。毎日当たり前に2~3時間は家で勉強するものだと捉

えている生徒は少なくなった。大学進学に求められる学習の量に耐えられない生徒が増えた感がある。教育の効果は時間をおいて現れてくるものだが、コロナ禍の与えた影響が、そうした高校生の学力に現れてきていることを現在感じている。改めて、コロナ禍を経て、頑張る力・努力を継続する力が落ちていることに危機感を感じる。

6. 討論について

学力問題の第一人者である苅谷剛彦先生が登壇されるとことで、楽しみにしていた。また、先に話題提供で講演された4名の各専門の先生方のパネルディスカッションであった。正直に言えば、豪華な専門家の方々のパネルディスカッションとしては時間が足りなかつたと感じた。

さて、苅谷先生から、コロナ禍での「責任の主体」を問うたのは、不透明な時代に対応するための力を明らかにするためであるというお話があった。コロナ禍は「まさかこんなことがやってくるなんて！」と誰もが信じられない思いを持ったわけだが、現在我々が生きているのは、先がわかりにくい、誰も経験したことのない時代であり、いろいろな「まさか」は断続的に起こっている。大学入試においても、総合型選抜・学校推薦型選抜の比率が高くなり、様相がだいぶ変わってきている。勤務校においてこれを乗り切っていくためには、教員間で受験指導の本質をしっかりと共有しておくことが大切なのではないかと感じた。つまり、「大学受験を通して生徒を成長させる」ということを大事な価値として職員で共有することにより、進路指導の方向を納得して進めていくような考え方である。これは至極当たり前のことかもしれない。しかし、コロナ禍という非常時に、日本においてはある種の共同体の力が作用してこれを乗り切っているのであれば、不透明な時代に対応する力の源は共同体による目標の確認、共有がなされていることではなかろうかと思ったところである。

7. 結びに

演台に立たれた各先生方のお話は、先生方が積み上げてこられた調査研究を背景にしたものであり、まずそのことに敬意を表したく思います。貴重なお話をありがとうございました。コロナ禍を経て何が明らかになったのか、どう変わったのかを、自分にない目線から俯瞰して考える機会をいただきました。一高校教員の私にとって大学入試はふだん、自分がととしてはなかなか考えられませんが、様々な立場の人が大学入試を捉え、考える機会は貴重だと感じます。高校教員である私個人としては、コロナ禍を経て毎年変化していく生徒たちを前にし、大事にすべき価値に基づいた判断を都度行っていかねばなりません。今回のフォーラムではそのための知見や示唆を大いに頂戴いたしました。

最後に、この度のフォーラムの開催にあたり、ご準備にあたられた事務局および関係者の皆様、本当にありがとうございました。

講評 6：第42回東北大学高等教育フォーラム 「コロナ禍は大学入試をどう変えたのか」講評

福島県立安積高等学校
菅野 博 教諭

「コロナ禍は大学入試をどう変えたのか」というテーマは、教育学において総括すべき要のある重要なテーマだと感じている。それを今回第42回東北大学高等教育フォーラムで扱うと聞いて、執筆者自身、教育者はしぐれとして高校教育現場での経験を振り返りながら、事前に考えをまとめておいた。それを以下に示しておく。

コロナ禍は大学入試のウェブ化を促進させた。入試の個人化の促進と言ってもいい。ウェブ出願の流れはコロナ禍以前からあったが、オンライン面接の導入によって、大学入試は自宅にまで入り込むことになった。それまで受験は大学まで出かけていってするものであった。いわばパブリックスペースでの受験が前提だったが、オンライン面接は大学入試がプライベート空間に入り込んだ瞬間だった。

また、コロナ禍は各大学が総合型選抜に参入し、それを促進させる契機となった。折からの少子化の問題は各大学の経営に暗い影を落としており、受験生ができるだけ早期に確保することは喫緊の課題となっていた。また国公立大学定員枠の3割を年内入試に移行する施策は、高校現場の主張とは相反するものの、生徒及び保護者の「大学受験ができるだけ早く終わらせたい」という気持ちとは親和性が高く、年内入試に出願することに大義名分を与えることになった。これには、コロナ禍において日本社会が「無理をしない」をコンプライアンス化させたことが大きく影響している。心身ともに「無理をしない」ことが是とされたコロナ禍は、生徒の苦難に立ち向かう姿勢をいびつなものにしてしまった。そして、総合型選抜は従来の学校推薦型選抜と

は異なり、大方は推薦書の提出や校長印を必要としない受験形態であるため、大学は高校を介さずに受験生に出願を直接訴えることが可能な、受験生集めのための非常に使い勝手のいいツールとして機能している。このことは当然、先述したウェブ化による入試の個人化とも絡み合っている。

最後に、コロナ禍は受験生の受験機会を最大限に担保し尊重する流れを一気に加速させた。大学は追試対応だけでなく、体調不良などに対する配慮を最大限に行なうようになった。いわば、受験生の権利者意識（被害者意識？）を高めたのである。これと同時に大学側には説明責任を果たすように社会的圧力が加えられるようになった。

コロナ禍への対応としてSNSが有効な手段であったことは否めないが、その急速な社会への浸透は、従来の受験システムに大きな揺さぶりをかけたことは事実である。

以上のような認識を抱いて、参加したフォーラムは、以下の内容であった。

東北大学倉元氏の発表は、「コロナ禍の教訓—『日本型』大学入試の本質とその変容—」というテーマで行われた。コロナ禍における大学入試を、まさに大学側の視点から捉え、国家との関係及び高校や受験生との関係から「受験生保護」という理念がいかに現場を強固に支配していたか、その実情が報告された。その報告は、先述した執筆者の見解においても十分に納得できるものであり、当時の受験騒動に多角的な視点をもたらしてくれるものであった。また後半の「特別措置の国際比較」は大変興味深く拝聴した。東アジア型、ヨーロッパ型、米国型の分類において俯瞰した世

界の大学入試対策は、日本国内にのみ向けられた視点を相対化してくれるものであり、「大学入試学」の面白躍如であった。それ故に、「コロナ禍の影響の評価」として、日本型大学入試が抱える公平性の問題への鋭い指摘は興味深かった。

大学入試センターの寺尾氏からは、「コロナ禍における日本の大学入試の強靭さと脆弱さ」について発表がなされた。こちらは、共通テスト実施主体の側からの、実際の経験に基づいた提言であった。中でも、「コロナ禍が突き付けた問い」として、問題作成や試験実施・運営体制の硬直化という問題が浮かび上がったという指摘は内部告発的で鋭かった。一方で、コロナ禍のような非常時においては「安定の原理」が強く働き、変化というものにヒステリックになるという国民性が指摘されたことは、そこから運営側の苦悩及び苦労がうかがい知ることができ、総じてコロナ禍の入試が共通テストを含めて受験生保護に傾いた理由の核心をつかめたような気がした。また、オンライン面接の浸透という指摘も、視点は違ひながらも執筆者の考察と同様であり、「我が意を得たり」の感があった。

東北大学の林氏の発表は、「COVID-19による教育環境の変化と大学選択行動一日中の高校生比較から一」というテーマで行われた。日中比較で見えてきたものとして、両国とも公平性をいかに確保するかという点に力点が置かれるが、その対応の仕方に違いが出ており、その違いは国家形態が大きく反映されている、という指摘がなされた。東北大学倉元氏の発表では国際間比較として東アジア型、ヨーロッパ型、米国型という分類がなされたが、東アジア型を細分化して捉えたところに林氏の研究者としての個性がうかがわれた。

林氏による「日本と中国の相違点(COVID-19対応)」の調査報告は秀逸であった。中でも興味を引いたのは、受信型情報収集活動に関する調査結果報告である。2018年と2020年の比較において、受信型情報収

集活動を行う頻度が、中国の高校3年生では2020年の方が高く、日本では2020年の方が低く出ていたことである。こうした日本の高校生のデータを、林氏はコロナ禍における混乱やそれに伴う不安による対応の遅れが生じたため、とまとめていた。確かにロックダウンに伴って、不要不急の行動を慎むように政府からの要請が出ていた最中、また、家庭内のウェブ環境が中国ほど整備されていない中、もっともな指摘だと感じた。

しかし、一方で執筆者が感じたのは、両国の国民性の違いの表れではないかという点である。「個」が能動的である（中国）か、受動的である（日本）か、という性質の違いが、緊急時における行動の違いとなつたのではないか、と。一般的に、進路選択は個人の問題であるから、対面的情報収集活動が制限されれば、それに代わるものとして受信型情報収集活動が活発化するのはむしろ当然である。したがって、中国の生徒の示す数値は妥当なものと受け止められるのだが、日本の生徒はそうなっていない。これはどうしてか。先述のような外的要因があるにせよ、他にもっと重要な要因があるように思われてならない。

日本の高校において、生徒の進路選択は学年ごとにまとまってレールに沿って、進路指導という形で行われる。進路は個の問題ではあるが、その指導は全体に一貫して行われるべきものという考えが高校側には強く存在している。これが、日本人が本来受動的であるからなっているのか、進路指導の形態がそうであるから生徒が受動的になってしまっているのか、はっきりしないところではある。執筆者は、おそらくその両方だろうと考えているのだが、林氏の調査結果からは、平時にいて個よりも集団を重んじ、集団とは異なる動きをしない日本の高校生は、緊急時においても同様の行動をとることが証明されたと思っている。大変刺激的な発表であった。

新潟高校の山崎氏からは、「地方公立高校

の現場から見たコロナ禍の影響—生徒と保護者が受けた心理的制限—」というテーマで報告があった。執筆者と同職であり、興味を持って拝聴した。地方の高校生がもつ「早く（進路を）決めたい」「変化を嫌う」という傾向の指摘は、隣県の福島でも同様であり、また、コロナ禍が「無理をしない」ということをスタンダード化させたという指摘、さらには「無理をしない」を是としてすることで、生徒の粘り強さの欠如が発生しているという指摘にも同感であった。大学がこぞって立ち上げた総合型選抜が、こうした地方の高校生及び保護者の心理をうまく突いた形で浸透しつつある構図を浮かび上がらせた点において、山崎氏の発表は素晴らしいだった。

以上4名の話題提供者による発表が行われた後、休憩を挟んで討論が行われた。指定討論者として苅谷剛彦氏が、本討論の方向性を示した。日本はコロナ禍を自肅という形、言わば「あいまい」な手法で乗り切った。これは他国と比べ死者数が圧倒的に少なかったことで、結果的に功を奏したと言える。政府の責任の弱さをも示す、あいまいさこそ、実はコロナ禍において重要な役割を果たしたのではないか。もしそうであれば、①コロナ禍で責任主体は何だったのかの認識を、各方面から出して欲しい。また、コロナ禍でよく呼ばれた「安全・安心」のスローガンについてであるが、②安全は客観的指標であるが、安心は主観的なもので際限がない、しかし、各国の対応が、こうした「安全」と「安心」の間のどこに位置するのか、あるいはどのような強弱を持ってコロナ禍に対処したのかについては興味があるので、意見を頂戴したい。さらに、③コロナ禍のような不透明な時代への対応についての知見があれば出して欲しい。以上の3点が討議題となった。

討論は大学、高校、大学入試センター等それぞれの立場から興味ある意見が交わされた。時間の都合で、②の問題については議論されることなく終わったが、最後に示された苅谷

氏のまとめは示唆に富んでいた。「コロナ禍のような不透明な時代を乗り越える際に、日本の場合、個人の資質・能力が問題ではなく、責任の所在が曖昧ではあるものの、いわゆる集合知的なるものが絶妙なバランスで機能した（する）と考えられるのではないか」。

盛況の内に、フォーラムは閉会となった。気づきや学びの多いフォーラムに参加できることに感謝したい。

以上、講評とする。ありがとうございました。

アンケート・参加者統計

第42回東北大学高等教育フォーラムアンケート
(回収数50, 回収率17.7%)

1. 御所属

- (1) 高校: 24名 (48.0%) (2) 大学: 16名 (32.0%) (3) その他: 10名 (20.0%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。

- (1) よかった: 47名 (94.0%) (2) どちらとも言えない: 3名 (6.0%)
(3) 改善すべき: 0名 (0.0%)

3. 話題提供者の発表は如何でしたか。

- (1) よかった: 42名 (84.0%) (2) どちらとも言えない: 5名 (10.0%)
(3) 改善すべき: 3名 (6.0%)

4. ディスカッションは如何でしたか。

- (1) よかった: 34名 (42.0%) (2) どちらとも言えない: 11名 (22.0%)
(3) 改善すべき: 5名 (10.0%)

5. 時間は如何でしたか。

- (1) 短すぎた: 21名 (42.0%) (2) ちょうど良い: 28名 (56.0%)
(3) 長すぎた: 1名 (2.0%)

6. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

(後述)

7. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

(後述)

ご協力ありがとうございました。

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。¹

- 様々な観点でコロナと入試についての考察ができた。(高校, よかった)
- 不透明な時代を迎えるに際して, どのように対応すべきか, 責任や資質について考える機会となりました。(その他, よかった)
- 定性的に語られてきたコロナによる影響を, 各お立場からエビデンスを用いてお話いただけたため, 本テーマについての解像度が高まりました。本テーマに派生する形になりますが, 今後の大学入試(CBT化や多面的入試の拡大, 留学生受け入れ(GATEWAYや東京大のカレッジオブデザイン))などについても今後伺いたいと思いました。(大学, よかった)
- 大学入試の在り方を, コロナ禍という切り口で捉えることで, 今後の世の中の変化に対応するための一つの試みと捉えることができると考えられるので。(大学, よかった)
- 新型コロナウイルスの感染拡大という大きな出来事を通じて, 大学入試の変容を洗い出す, という試みが非常に興味深く感じられました。発表と討議により, 国内外での様々な要因, 環境の違いから生じる, 違った変化がある, ということが分かり, 大変有意義であったと感じます。(高校, よかった)
- 振返り, 検証を今後に生かす。有意義な機会をいただきました。(その他, よかった)
- 今回のテーマで, 大学側としてどんな教訓が得られたのか, どんな教訓を今後に活かすべきか, はっきりしなかったように思います。高校の進路指導の場に活かせる部分も少なかったと思います。(高校, どちらとも言えない)
- 國際的な視点でのコロナ禍への入試の影響に関する議論がとても興味深かったです。(高校, よかった)
- 高校現場でも「変化」のあった時期で改めて考える必要があると感じていたため。(高校, よかった)
- 高校の現場の先生のお話が勉強になりました。中国との比較も興味深いものでした。(大学, よかった)
- 貴重な振り返りが行われたと考えるから。(その他, よかった)
- とても大変だった当時の指導等に対する総括がわかったから。(高校, よかった)
- コロナ期の学校をメタな目線でもう一度見直す機会がいただけた。(高校, よかった)
- コロナ禍を経て, 高校教育の変遷が整理できた。パネルディスカッションはもっと長く拝聴したかった。(高校, よかった)
- コロナ禍を各現場の実情を踏まえて振り返り, 知見を蓄積・共有できた点や, 日本の入試における重要なポイントが可視化されたのが良かった。(高校, よかった)
- コロナ禍をきっかけにした変化ではあったが, むしろ今後の人材育成を考えたときに選抜における必要な変化という視点を強調してもよかったです。(高校, よかった)

¹ 末尾の括弧内は所属, 選択された御意見。

- コロナ禍は終わり、特別な時期は過ぎたと認識しておりましたが、実は今に至るまで様々な足跡を残し、教育や入試に大いに変革をもたらしたということに気付かされました。
(大学、よかったです)
- コロナ禍のその後の変化について、振り返ることが出来ました。(その他、どちらとも言えない)
- コロナ禍にあった事柄を再認識できた。(高校、よかったです)
- コロナ禍での経験を振り返りする契機となった。また、現方式の学力入試に対する革新を考える機会にもなった。(大学、よかったです)
- コロナ禍が終息し共通テストの追試験も1週後の実施に戻った今、その総括的な話になるのかと思いましたが、それにとどまらず今や将来の課題も扱った内容で、事前の想像にも増して有意義でした。(高校、よかったです)
- コロナ禍から、これからを考えるという流れがとても良かったです。(高校、よかったです)
- コロナという比較的ホットな話題に対してさまざまな角度から話題が提供される興味深いテーマでした。(大学、よかったです)
- コロナで何が変わったか、入試視点で考えるきっかけになり、様々な知見を得られた。
(高校、よかったです)
- オンラインで視聴できたのは大変ありがたい。ですが終了時間が決まっているのですから、各報告者の時間は守って欲しいです。入試の質を云々するセミナーなので、時間厳守は必須ではないでしょうか。(大学、よかったです)

3. 話題提供者の発表は如何でしたか。

- 林先生から報告がありました日中の違い、特に、大学選択の相談相手の違いは大変興味深かったです。(高校、よかったです)
- 普段知り得ないお話だったので。山崎先生のお話は共感できた。(高校、よかったです)
- 内容はよかったですものの、持ち時間が順守されないパターンが散見され、結果として討議の時間が短くなってしまったのが残念だと感じました。(高校、どちらとも言えない)
- 多様な立場の登壇者による網羅的な視点でのご発表で、多くの参加者にとって価値ある情報が共有できたと思います。(高校、よかったです)
- 多様な視点からの振り返りがみられたから。新しい気付きがあった。(その他、よかったです)
- 多くの話を聞けたことは良かったのですが、時間が延長しすぎて、議論の時間が短縮したのは残念でした。(その他、よかったです)
- 時間厳守のみお願いします。(大学、よかったです)
- 高校の先生のお話がよかったです。(大学、よかったです)
- 高校の先生からの教育現場の生徒や保護者の声や反応が知れて良かったです。(その他、よかったです)
- なかなか知ることのできない中国の大学入試の様子について理解が深まりました。(高校、よかったです)
- 上に同じ。(高校、よかったです)
- それぞれ異なる視点からの問題提起が丁寧になされていました。(高校、よかったです)
- それぞれの視点から興味深い講演であった。(高校、よかったです)

- それぞれの講演者の先生のご報告が分かりやすく構成されており、またデータも興味深いものが多かった。また中国の教育、入試の現状に関するご報告はとても参考になった。
(高校、よかったです)
- その当時のことを振り返るとともに国全体や他国の対応について総括的に知ることができたため。(高校、よかったです)
- コロナ禍により、改めて浮き彫りとなった日本教育の良さと弱点が整理できた。ただ、長年かけて培ったそれぞれの大学入試は、それはそれで有益な試験方法であると感じる。また高校現場では生徒の粘り強さがなくなったように感じている。これは世界共通なはずだが、これはどのような影響があるのかが気になった。(高校、どちらとも言えない)
- コロナ禍において、それぞれの現場がどのように対応したのかが良くわかった。また、海外の取り組みとの比較も面白かった。ただ、大幅に時間をオーバーした発表者がいたことは残念。そのために楽しみにしていた討議の時間が短縮され、討議が中途半端に終わった印象である。次年度以降は、時間管理をきちんとして、ベルを流して時間を知らせる、あるいは、時間が来ればその時点で司会が発表を中断させるなどの措置が必要ではないかと思う。発表者は次の討議のメンバーなので、しゃべり足りないことはそこで補足もできるので。(大学、改善すべき)
- コロナに対する責任の主体、及びその対応についてそれなりに理解できたから。(高校、よかったです)
- 4名の方、異なるお立場からそれぞれ明確なお話をいただきました。学ばせていただきました。(その他、よかったです)
- 4名それぞれの視点は興味深かったのですが、長い時間お聞きした割には考えが拡がりませんでした。(大学、よかったです)
- 4つの、様々な立場からの報告があり、多面的に考えることができました。(高校、よかったです)
- コロナ禍での世界の大学の取り組みを知ることができた。CBTの利用を考える契機となった。高校側の経験や意見を伺うことができた。(大学、どちらとも言えない)"

4. ディスカッションは如何でしたか。

- 話題に対する時間が短い。もう少し深い話が聞きたかった。(高校、改善すべき)
- 良い議論でしたが、時間がもう少しあると良かった。(大学、よかったです)
- 様々な視点からなされた発表を、苅谷先生ならではのご視点でまとめておられたのが印象的でした。(高校、改善すべき)
- 発表の時間を確保すべき。(高校、よかったです)
- 得られた回答はいずれも満足しております。ただ、進行が難しいのを承知で言うのは心苦しいのですが、指定討論者への回答の時間が十分に取れなかった点を考えますと、手放しで「よかったです」にはつけられません。申し訳ありません。しかし、討論を30分延ばして3時間で行うのは長いと思いますので、次の質問につきましては、全体で2時間半は「ちょうど良い」と思います。(高校、よかったです)
- 討論短く残念。(高校、よかったです)
- 討議の時間が短すぎる。(大学、改善すべき)

- 討議としては、時間が足りなかつたように思います。(高校、よかつた)
- 責任の主体というキーワードは、とても考えさせられるもので、これからも、大切な視点だと思いました。(高校、よかつた)
- 時間の制約があり、苅谷先生からの重要な論点に十分に回答出来ていなかつたと思います。また、議論というより一方的だったかと感じます。(大学、改善すべき)
- 時間が短く、さわりで終わつた感がある。多くの知見をお持ちの方々だったので残念！(高校、改善すべき)
- 時間が短かっことは仕方ないのかもしれないが、討議テーマの絞り方が、話題提供内容や指定討論者の提起と若干強弱がずれていたように感じました。(高校、どちらとも言えない)
- 時間が短かったです。(高校、どちらとも言えない)
- 現状報告が長くなつたため、討議の時間が短くなり残念でした。(その他、よかつた)
- 苅谷先生の話をもっとかがいたかったです。(大学、どちらとも言えない)
- 苅谷先生の本質的な問い合わせにより、議論が深まつた。また倉元先生のおっしゃる通り、24時間教員であることは大きな問題であると思う。(高校、よかつた)
- 苅谷先生の最後のお言葉は非常に腑に落ちました。(高校、よかつた)
- 苅谷先生の高い視座からのお話を受けて、報告者の方々が御発言、もっとかがいたいと思いました。(その他、どちらとも言えない)
- 苅谷先生の問い合わせが、考えるきっかけになつた。(大学、どちらとも言えない)
- 苅谷先生の責任主体という問い合わせと、それに関するコメントが参考になりました。(その他、どちらとも言えない)
- 苅谷先生の質問にもっと触れられるとさらに良かったと思います。(その他、よかつた)
- 各お立場からお話をいただいたことで、テーマ・質問への捉えを多角的に捉えることができました。下記点にも記載いたしますが、全体の時間をもう少し長くしていただくと幸いです。(大学、どちらとも言えない)
- やはり時間が短く、苅谷先生のお話をもう少し聞きたかった。(高校、よかつた)
- もう少し時間があるとさらに深い議論になつたと思いますが、限られた時間でも質の高いコメントなどしていただいたと思います。(その他、よかつた)
- まとめの苅谷先生のコメントにおける、協働性を帯びた資質・能力のあり方についての視点は広く共有されたらいいと思う。(高校、よかつた)
- とても参考になりました。(大学、よかつた)
- とても興味深い内容でしたが、時間がもう少しあればと思いました。(その他、よかつた)
- さまざまな考えを伺えてよかつたが、少し時間が足りないように感じた。(大学、どちらとも言えない)
- ご講演の疑問点の多くを討議の議論でさらに理解することができとてもよい議論でした。(高校、どちらとも言えない)
- お聞きしてみたいと思っていた内容も意外な話題の流れも盛り込まれ、興味を惹かれました。(大学、よかつた)

6. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

- 本テーマに派生する形になりますが、今後の大学入試（CBT化や多面的入試の拡大、留学生受け入れ（GATEWAY や東京大のカレッジオブデザイン）などについても今後伺いたいと思いました。（大学）
- 入試の多様化について、ぜひ取り上げていただきたいと思っています。（大学）
- 入試からはやや離れるかも知れませんが、国際的な教育連携の現状についても理解を深めてみたい。（高校）
- 同様で良いかと思います。（大学）
- 討論の部分の時間をもっと取った方がいいと思います。（その他）
- 東北大学の入試に向けた改善の取組や方向性を話題に入れてほしい。（その他）
- 大学入試はあくまで大学と高校をつなぐ点であり、さらにその先の社会とどうつながっているか、高大接続改革と呼ぶにはまだまだ見通しが悪いと感じています。高校ではたいてい1年生の時に理系か文系か決めねばならず、あまりに判断の時間が短いです。将来の社会がどんな資質を望んでいて、どの大学に行くとその資質が身に付くのか、高校にどんな教育をしてほしいのか、より高校生が見通せる工夫が必要だと感じています。（高校）
- 対面だからこそ深く印象に残ることもありますが、オンラインも可能かもしれません。テーマは大学と高校をつなぐような、共に考えられるテーマがよいな、と思います。（高校）
- 対面、オンラインのハイブリッド形式が望ましい。（その他）
- 生成AI、総合型選抜の行方など変わり行く高等教育の現状と未来。（高校）
- 初めて参加させて頂きました。とても、内容が濃い構成だと思いました。（高校）
- 今年度と同様の形式が良いと思うが、1人あたりの持ち時間はもう少しあっても良いと思います。（高校）
- 今後とも、その時の問題点を反映したテーマをお願いします。（高校）
- 今後、東北大学はすべての選抜方法を総合型選抜に変えたり、留学生の数を増やしたりする方向にあると聞いている。これらに関することについて、何故そのような計画に至ったのか、それらについて高校現場はどう受け止めているのか。また、海外から見たときにこれらの方向はどのように見えているのかなどについての意見交換ができればと思いました。（大学）
- 今回のようにウェビナーがあるとありがたいです。（大学）
- 今回のような対面とオンラインの併用を希望。（その他）
- 今回のようなハイブリッド形式、テーマとしては、応用力を問えば、出題範囲の逸脱と言わわれかねないという出題者のジレンマについてなどがあればと思います。（その他）
- 今回と同様の形式を望みます。（高校）
- 今の形態で良い。（大学）
- 高校現場での教育上の課題を前提にしつつ、大学では高度な教育を維持していくために、より弁別性のある入試制度は何か、そのための高校教育はどうあるべきか（現実的に何が可能なのか）という視点。（高校）

- 形式は同じで問題ないかと思います。(高校)
- 形式は今年度と同様。テーマは今年度とも関連しますが、社会情勢や経済情勢と入試の関わりについての内容。(その他)
- ハイブリッドでお願いします。(大学)
- この形式で時間にゆとりを持つ。(高校)
- このように、対面とオンラインの開催が良いと思います。(高校)
- オンライン参加できるのは助かります。(大学)
- オンライン、女子枠の是非。(大学)
- ICT教育と学力との話やスマホ依存などに関して。(大学)
- 「高大接続改革の現在地」、「学習指導要領改訂を見据えて」、「これから時代に求められる資質・能力の育成及び大学入試」など。(その他)

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

- 優秀な方の話はいくら聞いても飽きない。ご準備等ありがとうございました。(高校)
- 毎年参加しておりますが、都度参考になる視点を提示していただき感謝しております。登壇された方のご準備、会全体の運営準備等、本当に頭が下がります。引き続きよろしくお願ひいたします。(高校)
- 本日はありがとうございました。学力試験における CBT の利用について関心を持ちました。本学でも作問体制・試験実施体制・危機対応力など現状の一般入試（学力試験）の限界が近いように個人的には感じており、何か革新が必要になるのではないかと思っているので、1つの手段としてとても興味深かったです。(大学)
- 本当にありがとうございました。(大学)
- 普段の教育活動について考える機会となりました。(高校)
- 特になし。(その他)
- 討論の時間をきちんと確保していただきたい。そのためには発表の時間を守っていただきたいと思います。(高校)
- 討論の時間がもう少しあればと思いましたが、全体として大変興味深い内容でした。(その他)
- 地元の私大の先生のお話も伺いたい。(大学)
- 大変有意義なシンポジウムでした。ありがとうございました。(高校)
- 初めて東北大学に足を踏み入れたが、とても綺麗で素敵な場所だった。(大学)
- 充実の2時間 30 分でした。ありがとうございました。次回もよろしくお願ひいたします。(その他)
- 実行委員の先生方のお忙しさは想像するに難くない中、開催ありがとうございました。大学入試について大学・高校の意見が吸い上げられる本当に貴重な機会かと思います。語弊を恐れずに言うならば、現場の最後の良心・誠実さを失わない、最後の砦ともいえる学会だと感じます。どちらかが独りよがりにならず、拙速な改革にならず、協力して地に足のついた望ましい方向に進めていけるよう議論し、実行していくのはずであると希望を失わずにいたいと思います。貴重な機会をありがとうございました。(高校)
- 今年も勉強になりました。ありがとうございました。(その他)

- 個々の話題提供の導入説明は興味深い内容で、討論の際に突っ込んだ話があるかと思っておりましたが、時間の関係で議論が中途半端に終わってしまったような、消化不良感が残ったことが残念ではありました。業務の傍らで拝聴させていただいた関係で、途中参加ができない発表もあり、オンデマンド配信があると有難いと思います。本日は貴重な機会、ありがとうございました。(その他)
- 貴重な情報を得る機会を感謝申し上げます。今後とも引き続き宜しくお願ひいたします。(高校)
- 開催日程だけでも早めに告知頂ければ、入試学会への参加、フォーラムへの参加が決めやすくなります。会場についても、入試学会とフォーラムが連続するということで、東北大学となるのであれば、早めに安い宿泊先を探せるので と思います。(その他)
- プログラムについて、時刻や所属団体に誤植が散見されたのが気になりました。参加者全体に公開する書類のため、校正を重ねた方がよいかと感じます。また、冒頭のご挨拶の時点で 10 分超過していたことを考えると、タイムテーブルの組み方にはもう少し余裕を持たせると、より良い会となるのではないでしょうか。ただ、全般を通じて有意義な会であったことは間違ひありません。参加させていただき誠にありがとうございました。(高校)
- とても、刺激になりました。ご招待頂きありがとうございました。(高校)
- コロナ禍を再認識でき有意義なフォーラムでした。(高校)
- お疲れさまでした。(その他)

参加者統計

1 参加者総数: 313名

(講演者・招待参加者: 14名, 大学: 127名, 高校: 69名, スタッフ等: 17名, その他: 86名)

1.1 来場参加者総数: 162名

(講演者・招待参加者: 14名, 大学: 47名, 高校: 44名, スタッフ等: 17名, その他: 40名)

1.2 オンライン参加者総数: 151名 (参加申込者数)

(大学: 80名, 高校: 25名, その他: 46名)

2 参加者地域別

宮城県内: 53名

宮城県以外の東北地方: 46名

(青森県: 11名, 岩手県: 5名, 秋田県: 8名, 山形県: 15名, 福島県: 7名)

東北地方以外 211名

(北海道: 6名, 茨城県: 7名, 栃木県: 3名, 群馬県: 3名, 埼玉県: 3名, 千葉県: 8名, 東京都: 79名, 神奈川県: 5名, 新潟県: 6名, 富山県: 2名, 石川県: 2名, 福井県: 1名, 長野県: 2名, 静岡県: 4名, 愛知県: 10名, 三重県: 1名, 京都府: 7名, 大阪府: 20名, 兵庫県: 10名, 奈良県: 1名, 和歌山県: 1名, 岡山県: 4名, 広島県: 6名, 山口県: 3名, 徳島県: 1名, 香川県: 1名, 愛媛県: 1名, 高知県: 2名, 福岡県: 7名, 佐賀県: 3名, 宮崎県: 1名, 鹿児島県: 3名, 海外: 1名)

2.1 来場参加者地域別

宮城県内: 41名

宮城県以外の東北地方: 33名

(青森県: 10名, 岩手県: 4名, 秋田県: 4名, 山形県: 10名, 福島県: 5名)

東北地方以外: 88名

(茨城県: 1名, 栃木県: 1名, 群馬県: 1名, 埼玉県: 0名, 千葉県: 3名, 東京都: 36名, 神奈川県: 1名, 新潟県: 3名, 富山県: 1名, 静岡県: 3名, 愛知県: 5名, 三重県: 1名, 京都府: 2名, 大阪府: 9名, 兵庫県: 3名, 和歌山県: 1名, 岡山県: 1名, 広島県: 2名, 山口県: 3名, 愛媛県: 1名, 高知県: 1名, 福岡県: 3名, 佐賀県: 3名, 宮崎県: 1名, 鹿児島県: 2名)

2.2 オンライン参加者地域別

宮城県内: 12名

宮城県以外の東北地方: 13名

(青森県: 1名, 岩手県: 1名, 秋田県: 4名, 山形県: 5名, 福島県: 2名)

東北地方以外 126名

(北海道: 6名, 茨城県: 6名, 栃木県: 2名, 群馬県: 2名, 埼玉県: 3名, 千葉県: 5名, 東京都: 43名, 神奈川県: 4名, 新潟県: 3名, 富山県: 1名, 石川県: 2名, 福井県: 1名, 長野県: 2名, 静岡県: 1名, 愛知県: 5名, 京都府: 5名, 大阪府: 11名, 兵庫県: 7名, 奈良県: 1名, 和歌山県: 0名, 岡山県: 3名, 広島県: 4名, 香川県: 1名, 高知県: 1名, 福岡県: 4名, 鹿児島県: 1名, 海外: 1名)

多くの方々に御参加いただき、ありがとうございました。

第42回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	宮本友弘	
企画責任者	倉元直樹	
事務局	宮本友弘 木村 香	大野真理子 竹浪綾子
	林 如玉	

当日スタッフ	片山知史 石井裕基 秦野進一 秦 孝子 樋口加奈世	田中秀樹 加藤徳善 駒形一路
--------	---------------------------------------	----------------------

*: 本企画の一部は、JSPS 科研費 JP21H04409 の助成を受けた。

第42回東北大学高等教育フォーラム報告書

コロナ禍は大学入試をどう変えたのか

発 行：2026年1月

編 集：宮本友弘, 林 如玉

発行者：東北大学アドミッション機構

Tohoku University Admissions Center

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内28

Tel: 022-795-4815

Email: forum42@jaruas.jp

印刷所：有限会社 明倫社



Tohoku University
Admissions Center